フロイアント公の秘密

こいしるつこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フロイアント公の秘密

【Ｎコード】

Ｎ３０９６Ｉ

【作者名】

こいしるつこ

【あらすじ】

地下牢で生まれた赤ん坊がいた。名前をユアという。彼はやがて、国をも揺るがす大事件を起こして――。伝説の魔剣の名を戴く少年と、彼に惹かれる若き皇帝、それから素直でないお人好しの“なんでも屋”。真実を求めて彼らが動き出すとき、許されざる秘史がついに表舞台に現れる。世界よ。もし応えてくれるなら、今ひと時の力をどうか。仮想大陸エルヴァニアを舞台に繰り広げられる、本格的ファンタジー小説。（文章はややお堅めです）

1　十のつく日

月のない夜だった。グレイスは養父の寝室に向かっていた。十のつく日の恒例だ。毛足の長い絨毯が、神経質をかけらも思わせない優しさで、革のブーツをそっと受けとめる。音はない。皇一族の寝室や私室が集まるこの城の上層部は、部屋はもちろん、回廊にいたるまでが豪奢な敷物で覆われており、足音とはおよそ無縁なのだ。冬の到来を告げる鳥さえ今宵ばかりは大人しい。風だけがしんしんと流れていく。ローハーの空を舞う埃を抱いて、東へ、東へと。

すべてがいつもどおりだった。深い情を鉄の厚貌のうちに隠すグレイスも、冷たく冴える大理石の壁も、息をつめて寝たふりをする警衛の兵も。ただ、ひとつだけ明らかな異状があった。目指す部屋の隅のほうで、丸まるようにして養父は死んでいた。

黒い雲は繊介の光さえ許さない。いっそう深い闇に目をこらしながら、グレイスは寝室へと足を進めた。腰まである小麦色の髪が躍る。ふと入りこんできた風に湿り気を感じ、雨が降るな、とグレイスは思った。白い寝衣が夜闇に揺れる。と、むっと鼻にひっかかる――くすぶるように甘い――匂いがグレイスの全身を包んだ。養父が好み、寝室中の織物に薫きこめさせた麝香の匂い。その内にふと酔の覚める臭気を感じ、グレイスは眉をひそめた。鍛えられた筋肉が、にわかに湧いた緊張にきりりと締まる。高く造られたローハー皇城の石門でさえ、彼がくぐるとそこいらの門と大差なく思えてしまうほどに、それは堂々たる立派な体躯である。かわって彼の瞳ときたら、これが少年を思わせる澄んだ色をしているのだ。よく晴れた春の空だと言った人もいる。その空もしかしこの時ばかりは鋭さを帯び、油断なく部屋の隅々を走りまわった。

やがて暗がりに慣れたグレイスの目は、床に広がる奇妙に大きな朱の溜りをみつけた。そしてその中央に佇む黒い小山を。グレイスはさらに目をこらす。金糸に飾られた寝衣の裾、赤褐色に灼けた肌、

たっぷりとたくわえられた口髭。手足をまるでぎくしゃくに放り出し、崩れ落ちた人形のようなその人は、紛れもなくグレイスの養父、ローハー国第三十六代皇帝レザフ＝Ｅ－ロウであった。

第一話　十のつく日

翌朝、まだ闇が遠く西へと去りきらないうちに、ローハー皇城は混乱と狂騒に包まれた。国の絶対権力者である皇帝が、夜陰にまぎれて暗殺されたのである。それも惨い殺され方であった。関節という関節は、本来の向きをまったく無視して折れ曲がり、皮膚という皮膚は裂かれ、打たれ、執拗に刺されて、そのために流れ出た血は、彼の寝室を満たしてなお溢れるという壮絶さだったという。

この惨状をみつけたのは、彼が可愛がっていた若い給仕だった。

皇帝の朝は早い。空が白むと同時に起きだすレザフ皇帝を助けるために、給仕は彼の寝室を訪れた。そして変わり果てた皇帝の姿をみつけたのだ。まだ半ば眠りの中にあった皇城を揺るがす、断末魔の悲鳴にも似た叫び声。

彼女は哀れだった。あまりのことに気が触れたのか、回廊から身を投げて頓死してしまったのだ。きっと動かない皇帝にすがりついたのだろう、皇帝の死体から回廊までは血の足跡がついていた。しかし肉塊となった彼女は朱に包まれて、もはやどれが誰の血なのかまるで分からない。

混乱で頭がおかしくなったか、彼女こそ犯人であると言い張る大臣がひとりだけいたが、彼の言葉を信じる者はいなかった。凄惨たるこのあり様。一給仕が、しかも細腕の女が、どうしてこんな離れ業を成し得よう。恐れてその名を口にする者はいなかったが、誰もが同じ人物を思っていた。ユア＝Ａ＝フロイアント。伝説の魔剣“ＪＵＧＭＡ”の名を冠した、哀れで憎むべき少年である。

「おはようございます、グレイス様」

そう呼びかけられるよりも一瞬早く、グレイスは背後の人物を感じることができた。厚く塗りたくった白粉と、嫌みにふりかけた香水の匂いのためである。そのふたつが合わさって、皇后ダレスは今日も甘ったるい匂いをふりまいている。

「おはようございます、義母上(ははうえ)」

ふり向いてグレイスはうんざりした。抜かりのない化粧、美しく結いあげられた髪、卑しく歪んだ赤い唇。黒の衣装に身を包んでいるものの、それも申し訳程度の見せかけで、彼女が皇帝の死を悼むようすは欠片だってみあたらない。

「大変なことになりましたわね」

「ええ」

ダレスは声すらもねっとり甘い。

「夫の訃報を聞きましても、わたくし、いまだに信じることができなくて……」

夫とは。仮にも子であるグレイスに対し、ずいぶんと他人行儀な物言いではないか。

哀れっぽく身をくねらせてみるも、ダレスの瞳は意地悪くグレイスを捉えて離さない。ちくちくと刺さる言葉のいやらしさ。しかしグレイスは慣れている。いつもこうだ。ダレスはグレイスを疎んじている。隙あらば排さんと、昼夜彼をつけ狙っていると言ってもいい。それも仕方ないことなのかもしれない。養子としてやってきたグレイスのせいで、遅くに生まれたダレスの実子、ヤマが皇嗣を名乗れないのだから。権力などは苦みの塊にしか思えず、グレイスは第一皇子の座など譲ってしまいたかったのだが、レザフ皇帝は決してそれを許さなかった。偏に彼を、そしてその才能を愛していたからである。このこともダレスの不興を買った。

グレイスを支える皇帝派と、ダレス擁する血統派。いまやローハー皇城は真っ二つと言ってもいい。そんなさなかに皇帝が弑されたのだから、混乱が混乱を呼ぶこの状況もいたしかたない。

「ヤマとふたり、この世も終いかと身悶えましてよ。どうにも涙が

止まりませんの」
「そういえば御目が赤くいらっしゃる」
グレイスは適当に相槌をうつ。ダレスは唇の両端をきゅっと吊りあげた。
「ですがあなた様は気丈でいらっしゃる。まるで平生と変わりないのね。まあ、あなた様と夫とは血の繋がりもございませんから、それでそう冷淡でいられるのでしょうけれど、いまばかりはそれも頼もしく思えますわ。さすがは次期皇帝」
「義母上」
「そう。昨日は十のつく日でありましたから、夫はあなた様を御召しになったかと思うのですが？」
さすがにグレイスは顔をしかめたが、一方のダレスはまるで気にも留めない。彼の言葉などはさらりと流されてしまう。なにか異変はみなかったのか、いや、いっそおまえが犯人を手引きしたのではないかと、言外にたっぷり意味を含ませてダレスはグレイスを睨めつける。
「確かに御呼びは受けました。しかし体調がどうも優れず、申し訳ながら御断りさせていただいた次第です」
そこでやめておけばよかったものを、
「典医がそれを保証してくださいましょう。もしも私の言葉を御疑いであれば」
と、つい余計な棘を吐いてしまった。よほど参っていたのだろう。考えるよりも先に口が動いた。
言ってしまってから、まずい、と息をのむも既に遅い。ダレスのこめかみには青筋が浮かび、若い時分は美しかったのだろう顔は憤怒に歪んだ。
「あなた様の御言葉の正偽などどうでもよろしい。急ぐべきは汚穢（おわい）の処理よ。給仕女こそ罪人などと馬鹿げたことを言う大臣もおりますが、真の犯人など知れたこと。すべて下賤なユアめの仕業」
グレイスはやや俯いてじっと堪えている。そうしていても、ちら

ちら向けられる二通りの視線を、グレイスははっきりと感じることができた。養母の陰湿な仕打ちにも耐えねばならないグレイスに同情する視線と、不共にも展開を興味深くうかがう視線との二種類だ。

「皇帝殺しの罪は、魂吸いの呪いなどで許されるものではないわ。ユアの身が呪いに食われる前にみつけだし、もっと酷い罰を与えてやるのよ」

ふいに鋭い声を向けられた従者は、恐れ畏まって走り去った。手足がちぐはぐに駆けている。よほどダレスの形相に恐動したに違いない。そしてその言葉にも。それは皇后とはとても思えない口調だったが、次にグレイスにふり向いたときには、先ほどまでがまるで悪い夢であったかのように、ダレスは普段どおりの粘る口に戻っていた。

「ユアは魂食らいと呼ばれた男。これまで散々食らってきた魂を、今度は呪いに吸われることになるなんて、なんとも可笑しいことですわね」

グレイスはうまく答えることができなかった。ただ曖昧に首を傾けてみせるだけで。

散々まくしたてて気が済んだのか、大きな尻を左右に揺らし、ダレスは廊下をいってしまった。グレイスは頭をさげてそれを見送る。成り行きを見守っていた大臣や臣妾らは、気取られる前にと散らばっていく。

グレイスはなにも感じなかった。怨みという鎧に身を固めた養母も、馬鹿げた噂話ばかりにうつつを抜かす高官たちも、グレイスを憂鬱にすることはない。城での生活は、彼にとって灰色でしかなかったのだ。悲しみも喜びも、すべては心の奥底に隠してしまったから。それに、別れ際にダレスが放った一言が、なにより彼を捉えて離さなかった。

――まったく、あの女の血筋はどこまでもわたくしを苦しめますのね。

あの女。独り言にしてはいやに大きなその呟きは、グレイスの胸

にちくりと刺さった。言外に含まれる色あいが、なぜかグレイスを引きつけてやまない。
グレイスはひとつ息をついた。いまそれを考えたところでどうにもなるまい。
「葬儀の段取りはすんだのか」
いえ、と従者のひとりが答える。
「先に戴冠式を執り行わねばなりません」
グレイスの眉が翳るのを認め、従者は慌てて言葉を繋いだ。
「この国は一時たりとも指導者を失うわけにはいかないのです」
ほとんど耳に囁くような調子だ。グレイスはじっと目を閉じる。
「皇帝の御霊を気遣われるあなた様の御気持ちはお察しいたします。しかし、こればかりはどうか御容赦くださりませ。すべては罪なき臣民のためなのです」
「……では、式は可能な限り静かにいたせ。華美を誇るな。黒にまとめよ。国中から祭司を呼び集め、皇帝の魂をよく慰めることも忘れるな」
従者は深く頭をさげて、彼の言葉を伝えるべくその場を去った。
私室に戻る回廊の途中で、グレイスは悲しげな笛の音を耳にした。皇帝の死を悼んでいるのか、揺れる音は泣いているようにも聞こえる。重い扉もその悲しみを遮ることはできなくて、漏れ入ってくる笛の音に、グレイスは深々と息を吐いた。全身が気だるい。二人の従者は扉の傍に控えていたが、顔を見合わせるとどちらともなく頷いた。
「私どもは外におります。戴冠式の衣装合わせがございますから、準備ができ次第御呼びいたします」
気を取り直し、グレイスはしっかりと頷いてそれに応える。彼らの気遣いがありがたかった。なにしろ昨夜から動揺が過ぎる。グレイスにはひとりの時間が必要だった。
グレイスは手近の椅子に腰をおろした。立派な装飾のほどこされた肘掛けがついた代物だ。高級な綿がしっかり詰まった一級品で、

赤いクッションはグレイスの体重を優しく受け止めてくれる。目を閉じてグレイスは耳をすませた。従者たちの足音が扉の向こう、やや遠くでぴたりと止まる。疲れ切った皇嗣が眠りやすいよう、精いっぱいの距離をとったのだろう。皇城のあちらこちらで依然蜂の巣をつついたような騒ぎが続いているが、この辺りの回廊だけはしんと静かだ。

やがてグレイスは立ちあがり、大きな壁掛けに歩み寄った。床まで届くこの壁掛けには、繊細な編み目にローハーの建国からいままでが描かれていて、レザフ皇帝からの贈り物だ。おもむろに手を伸ばし、グレイスはそれを外してしまう。すると奥から現れたのはひとつの扉で、驚くようすはかけらもみせず、グレイスは慣れた手つきでその取っ手を掴んだ。

扉の向こうは窮屈な小部屋だった。ぽっかり開いた穴のような天窓からは、一筋の光が差しこんでいて、たよりなく揺れる埃をちかちかと照らしている。狭い部屋だが、それでさえ照らしきるには細すぎる光だ。ために部屋のなかは薄暗く、しかし陰鬱な空気はまるでない。埃っぽさはどうしようもないが、ここには澄んだ空気が生きている。昨夜まで、この隠れ小部屋にはひとりの老人が住んでいた。きっと彼がそうさせたのだろう。

ニンフというその老人は、訳あって死人とされている。グレイスに匿われ、外界の一切と隔離されてから、もう軽く二十年が経つ。だというのに彼はめっぽう物識りで、なにを訊ねても首を横にふることはまずなかった。そんな彼だから、きっと、溜飲のようにくすぶるグレイスの疑念の訳も、すらすら説明してくれたに違いない。彼はグレイスの師であり、父であり、城で気を許せる唯一の人物だった。

ふと目をやった机上に一冊の本をグレイスはみつけた。昨夜ここを訪れたとき、ニンフはこれを読んでいた――。

「新しい文字を作るのです」

にっかと笑って言うニンフに、グレイスはすっかり呆れたことがあった。鈴の音のようなエルフ語に始まり、あまねく知られる人間語（これを共通語と呼ぶのは人間の傲であろうか）、土くさく訛ったドワーフ語、獣の呻きにも似たアスビット語など、その他識別すら困難な方言までを加えると、世にある言語は驚きの数に至る。文字もそれに準ぜられて然りだ。なのにまだ数を増やすと言う。まったく、頭がよすぎる者の考えることは分からない、と。

「なにも書かれておらぬではないか」

しかし差しだされた羊皮紙には、文字はおろか、インクの跡も見当たらない。不審そうに呟くグレイスに、かざしてみなされと、ニンフは弾む声で彼を明かりの下に誘った。言われるままに羊皮紙を陽光にかざしてみると、なにやら小さな穴が無数に開いているのが分かった。

「規則に従って針を打っております。これは指でなぞって読む文字なのです。目が不自由でも書物を楽しめるように」

聞いてグレイスの胸は痛んだ。ただひとりばかりのニンフの孫は、生まれながらに目が利かない。生来の不幸を背負う孫が、ニンフはかわいくて仕方なかったのだ。その孫が幼いうちに不帰の人となってしまったことを、まさかニンフが知る由もない。グレイスは笑みを作ることもできず、ただ彼の偉業に感心しているふりをするばかりだった。

昨夜も彼は、新しい文字に書物を翻訳していたのだ。生きていればグレイスと似た年頃だろうニンフの孫は、しかし彼のなかではすっかりその時を止めてしまっているようで、開かれているのは幼児向けの御伽話であった。

「なにがありました」

グレイスが一声も漏らさないうちに、ニンフは静かにそう言った。なにかあったか、と訊くのではない。なにかが確かに起こったのだ。それも至極宜しくないことが。そう思わせるに十分なほど、グレイスの顔は青褪めていた。

「皇帝が」
グレイスは唇を舐めてやる必要があった。口が震え、うまく喋ることさえかなわない。
「死んだ。殺された。寝室で、おそらくは刃物で、血が……」
「よく分かります。しかしまずはお座りなさい」
揺れる肩をやんわり押さえ、ニンフはグレイスを椅子へと導いた。水差しを手に窺うと、皇嗣は酷く震えている。差しだされた水を飲み干してようやく、グレイスはわずかに落ちつきを取り戻すことができた。
「皇帝が殺された。惨いあり様だった。血があれほどに赤いとは……思わなかった」
「命の色ですからな。深いわけです」
ニンフがしっとり相槌をうつ。グレイスは視線を泳がせる。
「それに酷く臭かったのだ。身の毛がよだつような臭気だった。――いや」
ため息をつき、グレイスは左右にかぶりをふる。長い髪が合わせて揺れる。
「こんなことは大事ではない。私が言いたいのは」
グレイスは顔をしかめた。頭のうちが、まるで整理できていないのだ。ニンフはじっと彼の言葉を待つ。グレイスは大きな深呼吸を三度繰り返した。
「私が寝室を訪れたとき、彼は既に息絶えていた。不審な人影はもちろん、慌てた足音もなにもなかったが、犯人が誰かは分かっている」
「ユア＝A＝フロイアント」
グレイスは浅く頷いた。
「彼以外に皇帝を手にかけようとする者など考えつかぬ」
それで、とニンフは言った。それで、あなた様はどうなさるおつもりです、彼を。
「……逃がしてほしいのだ。ユアを、国の外へ」

ニンフはなにも言わない。ただグレイスの面を見守る。グレイスも彼の目をみつめかえす。その瞳は迷った子犬のように不安げだった。

「彼を、捕らえさせたくないのだ。どうしても。彼が極刑の末に死ぬところをみたくない。最後の一時だけでも、彼に外の世界をみせてやりたいと思う」

ニンフは思わず口を開きかける。しかしグレイスは首をふってそれを制した。

「なにも訊いてくれるな。私にも分からぬ。なぜこのように思うのか、どうしてこうも彼が気にかかるのか」

あれなどただの穢れに過ぎぬのに。グレイスは吐き捨てるように呟いた。

グレイスはゆっくりと立ちあがる。老いてなお人並み以上の背丈を誇るニンフさえ、グレイスの前では見劣りしてしまう。立派になられたものだ。ニンフの目が知らず細められた。

「引き受けてくれるか、この頼みを」

ニンフはころころと笑った。頼み、と言うのがまた皇嗣に似合わずしおらしい。血筋はどうあれ、グレイスはレザフ皇帝が認めた世継なのだ。もっと威光をひけらかしてもいいものを、堂々たる態度は崩さないながら、しかし驕るようすは欠片もない。この方ならばローハーは大丈夫だ。ニンフの胸を温かいものが満たす。いきなり笑いだしたニンフに、グレイスはすこし困惑したようだ。

「お任せください。不肖ながらこのニンフ、ユアを伴い、夜のうちに消えましょう」

「二度とこの地は踏めぬぞ」

「元より承知です」

「相手はかの魂食らいだ。いつ命を奪われるとも知れぬ」

決して外に漏れない程度に気を配りながら、しかしニンフは豪快に笑った。

「二十年も前に一度失った命です。あなた様に助けられなければ、

この老いぼれは、今宵ここに立ってさえおりませんでした」
二十二年も昔。グレイスが皇一族に迎え入れられた当時のことだ。まだ弱冠六歳。母親が恋しい盛りだ。それなのに、訳も分からないまま家族と引き離され、代わりに見ず知らずの大人たちの中に放り込まれたものだから、幼いグレイスが泣かない日はなかった。
大臣たちは期待の第一皇子に阿(おもね)りこそすれ、涙を不吉と咎める者などいなかった。ニンフひとりを除いては。その頃臣下やその子息らの教育係をしていたニンフは、ある日、グレイスの前に仁王立ちしてこう言ったのだ。
「いずれこの国を担う御方が、そんな御顔でどうします。いまやあなた様は“E”の称号を抱く御身。いつまでも恋慕の情に囚われて、真実を見逃すことでもあればどうなさる！」
雷が落ちたかという激しい怒声だった。グレイスははっと息をのんだ。ただちにこれは不遜だと叫ぶ声があがり、日頃から彼を疎ましく思う者の思惑も絡んだのだろう、叱責はひどい打擲(ちょうちゃく)に話をすり替えて皇帝の耳に届いた。もちろんレザフ皇帝は激怒した。詮議の場すら設けず、ニンフに死罪を言い渡したのだ。グレイスがこれを黙ってみていられるはずがなかった。
懐かしい記憶にグレイスの顔がほころぶ。血の気のなかった顔にもわずかに赤みが差した。
「おまえと別れるのは惜しい」
ニンフはこともなさげに笑ってみせる。
「なにを仰います。あなた様はもう十分に御立派、私の助けなどもはや必要ではありますまい。ただひとつ、あなた様が玉座におわします姿を拝めないが残念です」
軽口まで叩くとくれば。
気を取り直したように顔を引き締め、胸の紋章に手をそえ、ニンフは片膝をついて頭を垂れた。この国で最上級の礼のしぐさだ。グレイスはその頭上を右手で払う。これは皇一族のみが行う返礼で、命を賭した奉公を誓う兵士のために、その過去や煩悩を切り落とす

さまを表すという。ゆっくりとあげたニンフの顔は、晴れ晴れとして爽やかだった。グレイスは口をきりりと締める。

「いこう」

別れは辛い。しかしグレイスは皇嗣だ。実際にこの国を背負うようになるのはもう明日明後日のこと。情に囚われ、真実を見逃すことでもあればどうする――。

マントを羽織り、颯爽と部屋を出るグレイスの背中を、ニンフは濡れた瞳でみつめた。

月のない夜だった。どっしりと茂る黒い木々も、皇帝の絶対を疑わない臣民も、贅の極みを尽くした毛皮にくるまれて眠る皇后も、すべてがいつもどおりだった。ただ、ひとつだけ小さな異変が起こった。生まれた歪はいくつもの波紋を生んでいく。ちょうど静かな水面に小石を放りこんだときのように。しかしこの夜はまだ誰もそのことを知らない。誰も、なにも知らないのだ。本当のことなど、まるで。

2　三流の男

依頼の打ち切りを伝えられたとき、ゼンは千切った草を風に遊ばせていた。

毎年この季節には、決まって北西からの風が吹く。時折それはもう激しく吹きつけるのだが、まだ骨の細い子どもたちは布を広げ、風に逆らいながら丘を駆けおりる。そうすると、機が合いさえすれば、しばらくの間体が浮かんでしまうのだ。それで子どもはこの季節風をことさらに喜ぶのだが、大人にとっては迷惑以外の何物でもない。農作物の苗は折れるし、若木さえあっけなく倒れてしまう。国民のほとんどが農耕を生業とするバレリア国で、これは大きな痛手になる。おまけに海を挟んだ隣国のローハーは、これが風上にあたるのだが、しょっちゅう石を削っているとみえ、季節風に乗って灰色の粉がびゅうびゅうと飛んでくるのだ。これがご婦人たちには目下の悩みとなっている。なにせ、生乾きの洗濯物にも粉は容赦なく降りかかるのだ。シャツなどパリパリに萎びてしまい、とても着られたものではない。それに、風に乗るという子どもの遊びも、危なっかしくてみていられない。子が目の細かい布を持って家を忍び出るのをみつけると、母親たちは目くじらを立てて叱る。しかし大人が怒るから、いけないことと言われるからこそ、蜜はよりその甘みを増すのだ。

「よせと言われりゃ体がうずく、いけないことほど面白い……ふあーぁ」

適当な節をつけて口ずさみ、ゼンは生欠伸をかみ殺す。庭は広く、引けど抜けども雑草は一向に減る気配がない。

「その日暮らしの霞のお行き、口食(くちく)やいっぱい夢追いの――っと」

そこでようやく人の気配に気づき、慌てて作業を再開させるも、下男はとうに彼のなまけをみつけていたらしい。広い額には深い皺が三本刻まれていて、口を開かないままでも、ゼンには彼が不幸の

使者のように思われた。

第二話　三流の男

「糞ったれ！　契約違反で役所に訴えるぞ！」
いくらがなりたてようと、鉄の門はぴくりとも動かない。それどころか、鈍色の光は躍起になるゼンを笑っているようにさえみえる。
「この腐れ金持ち！　ちびっ禿げ！　びちびち白豚！」
持てる限りの悪言で罵っていると、門に駆けてくる足音が聞こえた。ゼンは逃げださんと身構える。しかしやはり門は開かず、代わりになにかぺッと吐き出された物がある。布袋だ。警戒しながら拾いあげ、中身を検めてみると、銅貨ばかりが五十枚ほど入っていた。実に銀貨一枚と半分に相当する額である。ゼンは目を丸くして門をみやった。これはなにかの罠かしら？
「旦那様からだ」
門の覗き窓から顔をみせたのは、先ほどゼンを追い出した下男だった。
「それをくれてやるから、さっさと失せろとのお達しだ。のろまの役立たずなど、声を聞くのもおぞましい、と仰っている」
ゼンはあんぐりと口を開けていたが、これを聞くと怒りがかっかと湧いてきた。元より沸点の低い男なのだ。道理がどちらにあるかなど、彼の考えの範疇ではない。
「けっ。いい年して小男共の頭がせいぜいのくせして偉そうに。偉いのはあんたでもなくあんたの主人でもなく、お金様のくせしてよ」
なかなか切れのある言いっぷりである。こと毒吐きにかけて、ゼンは一流の舌を持っているのだ。
「役立たずはどっちだい。え？　あんたらが決まったお遣いしかできないから、俺たち“なんでも屋”が必要なんじゃねえのかい！」
「言ったな！」
相手も相手で怒りだすのが早い。これはもはやバレリアの国民性

と言ってもいい。広大さにかけてはエルヴァニア全六大国の頂点に立つバレリアだが、その広すぎる国土のために、多種多様な話し口調、訛りが氾濫していて大変なのだ。ひとつ山を越えてしまえば、言葉がてんで通じない、なんていう珍事だってありうる。そんなだから、話し合うよりも先に、つい手が出てしまうのも仕方ないのかもしれない。とにかく、喧嘩っ早さはなにもゼンに限ったことではないということだ。

門が重厚な音をたてる。きっと鉄の錠が外されたのだろう。しかしゼンは下男が飛び出してくるより早く、音が鳴ったときにはもう駆けだしていた。もちろん、手には布袋をしっかりと握りしめて。

太陽は滞ることなく進んでいく。冬の暮れは早い。空の端に闇が滲むと後はあっという間だった。

ゼンは継ぎ接ぎだらけのマントを体に巻きつけた。綿の入っていない三流品で、比較的温暖なバレリアの冬には耐えれども、夜に入って冷たさを増したこの季節風だけは我慢できそうにない。ゼンは小柄で、それ以上に痩せぎすだ。それもそのはず、まともな飯などこの数日間ろくすっぽ食っていないのだから。寒さを遮ってくれる厚い脂肪などどこにあろう。一年中日に灼けた肌を、ゼンはしっかと抱きしめた。

この国の人間は二通りの肌色に分けられる。一方は白、一方は黒。前者はよく肥えていて、後者はひどく骨ばっているのもお決まりだ。いわゆる富裕層と貧困層である。ゼンのような“なんでも屋”は、日暮らしの銭稼ぎが掲げるわりと一般的な職業だ。言葉のとおり、なんだってする。屋根の修繕にレンガ積み、壁塗りに、お守りだって。朝の水汲みから夜の買い出しに至るまで、彼らはわずかな賃金で本当にたくさんのことをこなすが、なんでもすると謳いながら、その実なにもできないというあたりが面白い。彼らは実際、なにもできない人々なのだ。腕がたつわけでも、計算が早いわけでも、商売の才覚があるわけでもない。なにもできないからなんでもする。

それが“なんでも屋”だ。年間で数百人の“なんでも屋”が飢えで死に、数千人の新たな“なんでも屋”が生まれる。バレリアはそういう国だ。

寒さのなかで、しかしゼンの口元は綻んでいた。気を抜こうものなら涎が垂れる。なにせ、銅貨六十三枚だ。あれから木の陰でこっそり数えたのだ。何度数え直しても間違いなく六十三枚、布袋には銅貨が詰まってあった。銅貨三十枚が一枚の銀貨に相当するから、これだけあれば、肉に温かいスープにパンもついた料理が一度、いやきつきつで二度は食べられるというものだ。

そのうえゼンの目はいいものを捉えた。小屋だ。同業者が廃材をかき集めて作ったのだろう、みすぼらしく、とても住めたものではない。しかし一夜の宿としては十分だ。ゼンはそろそろと木の棒を拾った。望まない先客が入りこんでいる可能性は高い。

――先手必勝だ。

目に異様な光を宿し、ゼンはにじるように小屋へ近づいていく。

扉を蹴ると、朽ちかけた木材は粉となって砕けた。もくもくと立つ粉塵のなか、ゼンは必死に目をこらす。小屋は狭い。隠れる場所などありもしない。はたして、扉とちょうど対面する壁に、ゼンはひとつの人影をみつけた。

けたたましい音にも関わらず、人影は一寸も動かない。一歩足を踏み出し、ゼンはぎょっとして竦みあがった。まさか、死んでいるのだろうか。探りながら近づくうちに、ちらと光るものを認めてゼンは足を止めた。

それは一対の目だった。影の正体はまだ幼い少年だったのだ。少年は死んでなどいなかった。ただ歯を食いしばり、近づいてくるゼンをじっと睨みつけていたのだ。痩せこけた膝を抱き、寒さと恐怖にうち震えながら。

そうと気づいたとたん、ゼンの手から木の棒が滑り落ちた。激しい衝撃がゼンの胸をつく。少年はゼンよりもずっとか細く、ずっと弱い存在だった。そしていまにも目を閉じてしまいそうだった。

「あんた……」
少年は動かない。
ゼンは迷った。この少年は死ぬ。間違いなく。ここにいれば、ゼンの後にやってくるだろう同業者たちに殺される。乞食や浮浪者、貧しい日銭稼ぎの類は、水面下ではひっそり助け合いながら、一定以上に寄れば相手を食わんと牙を剥くのだ。それはこの少年だって知っているはず。だのに膝を抱えて動かないのは、もはや逃げる気力すらないからだ。腰帯に結んだ布袋がずっしりと重い。ゼンは唇を噛む。こいつはもう手遅れだ。一度や二度満足な飯を食ったところで、働けるだけの元気を取り戻せるはずがない。みろ、あの肌。褐色の斑点があちこちに浮いている。あれはもう駄目だ。なにをしたって助かるはずが――。
気づけばゼンは、布袋に手を突っこんでいた。突っこみながら、それでもまだ指は迷う。銅貨の確かな感触がゼンを誘う。布袋の中で銅貨同士がこすれ合い、ちゃり、とわずかな音をたてた。
「ぐおあああぁ！　があっ！」
そのときだ。それまで静寂を守っていた少年が、目を見張る勢いで跳ね起きたのだ。ゼンに向かい、一直線に突進してくる。骨と皮ばかりの足が、これほど鋭敏に動くだろうか。
ゼンはすっかり不意を突かれた。布袋から手を抜く暇すらない。少年の体当たりをまともにくらい、ゼンは後ろにひとつでんぐり返った。少年は体重が軽すぎるものだから、衝撃のほどは大して強くないのだが、なにしろ痛い。言わば骨の砲弾が飛びこんできたようなものだ。ゼンは目を白黒させて飛び起きたが、布袋はすでに彼の手を離れていた。袋の口を開けていたせいで、六十三の銅貨はみすぼらしい小屋の床にばらばらと転がる。
「ああ！　俺の全財産！」
金持ちが聞けば笑っただろう。銅貨など、彼らにとっては土くれも同じなのだ。しかしゼンにとっては大金だ。明日を生きる命の糧だ。床に這いつくばるようにして、ゼンは散らばる銅貨をかき集め

た。
　しかし少年がそれを許さない。もはや言葉もなくしたのか、獣のように吠え喚きながら、少年はゼンに飛びついてその腕を噛む。ゼンだってひどい痩せぎすだ。痛みは骨の髄をじかに刺す。
「このっ、糞やろう！　死にぞこない！　かすっかすの、骸骨め！」
　叫びながらゼンは拳を振るう。いままで振って当たった例（ためし）のないゼンの拳だったが、このときばかりは見事に当たった。少年の右っ面に、めりこむほどの勢いである。
　激しくもんどりうって、少年の体は小屋の壁に叩きつけられた。ぱっと木屑が舞う。伸びたかと思ったのも束の間、これぞ火事場の馬鹿力というべきか、少年はすぐさま四つん這いに体勢を整えたのだ。これにはゼンも心底恐れ入った。素早く屈み、手近の銅貨をむんずと掴むと、ゼンは壊れた扉をもう一度蹴り飛ばす勢いで小屋を出た。
　空はもうすっかり夜の帳に包まれている。ゼンが逃げ去ってしまってからも、小屋からはしばらくの間、少年の唸り声が漏れていた。

　湯浴みなど、もう何日もしていない。あまり汗をかかない季節とはいえ、さすがに限度というものがある。老人に連れられて食堂に入ると、給仕女が露骨に嫌そうな顔でゼンを睨んだ。いつものゼンなら、これですっかりへそを曲げているところだ。こんな応対の店で飯が食えるか、などと大口叩いて出ていくだろう。しかし今日ばかりはどうも大人しい。というのも、彼はいま夢見心地で、現世よりちょっとばかり浮いたあたりを、ふわふわと浮いていたからである。無理もない。小粒金を手のなかにちらつかせる老人が、これをくれてやると誘いかけてきたのだから。
　昨夜、ゼンが食べたのは味気ないパンひとつだけだった。もう太陽は中天をすぎているから、ゼンの腹の虫はぐうぐうと鳴いて騒がしい。
　いま思い返してもゼンの腹は煮えくりかえる。と言っても空っぽ

の腹である、煮汁ばかりで具さえないのはご愛嬌というところ。もっとも、それも全部あの少年のせいなのだ。獣じみた少年に追っ払われたとき、かろうじてゼンが掴み得た銅貨はたったの三枚。もっと掴んだ気でいたが、なんということはない、ゼンが後生大事に握っていたのは木の屑だったのだ。三枚ぽっちの銅貨で買えるものといえば、穴の開いたズックが片方か萎びたパンひとつがせいぜいといったところだ。

それがいまはどうだ。卓に並べられた料理の数々ときたら。崩れそうなほどじっくり煮こまれた肉（タンという。牛の舌だよ、とは老人が後で教えてくれた）のシチュー、皮にいい具合の焼き目がついたバゲット、玉ねぎが半分蕩けた琥珀色のスープ。ゼンは幻かと我が目を疑った。料理を、老人を、そして不機嫌な給仕女までを交互にみる。老人は人の好い笑顔を浮かべている。それをみたゼンは、息をつく間もなく次から次へと料理をがっつき始めた。すこしでも休めば幻が消えると恐れるかのような食べっぷりだ。とても褒められた行儀ではないが、老人はすこしの文句も言わなかった。ただ、ゼンが満足するのをじっと待っている。

「それで」

唇の端にパン屑をつけたまま、ゼンはもごもごと口を動かした。

「俺になにをしろって言うのよ」

簡単なことじゃ、と老人は言う。澄んだ発音だ。まず、かなりの金持ちとみて間違いない。

「害獣を追っ払ってほしいんじゃよ」

「害獣を」

老人は小さく頷いた。

「化け鼠を知っておるかの」

ああ、とゼンは答えた。答えながら色鮮やかなサラダに手を伸ばす。ああ、知ってら。体が異様に大きいっていう鼠だろ。たしか成獣は二メートルを超えるとか。

「そうじゃ。しかし結局はただの鼠、魔物の端くれにもならん。害

獣というのはこれじゃよ」
　わしの山に、断りもなく住みつきおって。老人が毒づくのを眺めながら、ゼンは音をたててスープを飲み干した。ちょっちょと舌を鳴らし、最後の一滴まで喉に流しこむ。あまりの行儀悪さに、近くのテーブルの若い女が金切り声をあげた。
「だけど俺、自慢じゃねえけど腕はあんまりたたねえのよ。そううまく追っ払えるかどうか」
　老人はからからと笑った。皺だらけの首で喉仏が揺れる。
「ただの鼠と言ったじゃろう。奴らの小さいお仲間がそうであるように、化け鼠も根っからの臆病ものじゃ。恐れることはない。巣穴に飛びこみ、棒を持って振り回してやればすぐに済む」
「ふうん」
「な、簡単な仕事じゃろう。それで小粒金ふたつだ。おまえさん、小粒金がいったい銅貨何枚分の価値かご存知かね。およそ八十枚じゃ。八十枚の銅貨が詰まった布袋がふたつ、これがおまえさんの物になるんじゃぞ。えっ？」
　老人の熱気がゼンに伝染する。興奮でゼンの尻はそわそわした。
「仕事の前には湯も貸してさしあげる。気づいておらんかもしれんが、おまえさん、なかなか酷い臭いじゃぞ。わしの家には石鹸がある」
「せっけんだって？」
「知らんか。乳白色の、妙にずっしりと重い塊じゃ。水に濡らすとぬるぬるとしおって、不思議な色の泡がたつ。これがまたいい匂いでの。化け鼠はこの匂いを嫌うとか聞く。今回は特別。特別じゃぞ。特別にこれを使ってもよろしい」
　さすがにゼンが怪訝な顔をしたからなのか、老人はまたもやにっこりと笑った。顔中の皺がよりいっそう深みを増し、細い目などは埋もれてしまいそうだ。
「お疑いかの」
　ゼンは肉を噛みながら曖昧な声を出した。

「疑うっていうか、ちょっぴり怖くなるのよ。綺麗な花にはなんとやらってやつ。飯は美味いわ安いわだったら、そりゃお客も並ぶだろうけどさ、あんたの話はそれどころじゃないよ。美味い飯をただでばら撒こうってくらいの大振舞だ。いい話だが、さすがにちょっとあれ？　って思うわけ」

そう言いながらも、ゼンはこの溜飲を下げる一言を切に欲しているようすである。

実際、迷わず飛びつきたくなる旨い話だ。ゼンは化け鼠についての知識などないに等しいが、老人の話を聞く限りだと、これは十年ほどそこら中をうろついても巡りあえない儲け話のようである。あとはひとつ、ただちょっと顔をもたげる、この疑問を晴らしてくれさえすればいい。なぜ、そんなに羽振りがいいのかと。

老人はそのあたりにめっぽう聡かった。老獪な人物である。禿げあがった頭をぺちりと叩き、いっそう目を垂れ下げた。

「いや、恥ずかしい話じゃがの。おまえさんはわしの孫に似とるんじゃ。目のあたりだとか」

目？　ゼンは意固地さを大声で喚いているような目元をさらりと撫でた。ほとんど逆三角形の、それは鋭い目つきである。

「そんなおまえさんが腹を鳴らして通りを歩いているのをみるとの、これがもう放っておけなくて。なんとか援助したいと思うが、訳もなく金を与えては俺も俺もと他が騒ぐ。それでこうして簡単な仕事を振り、報奨という形で金をさしあげようと考えたわけじゃ」

ゼンはぽんと両手を打った。うんよし、決まりだ！　この老人は類まれなるお節介、いやさ、お人好しなのだ！

「よし乗った。そこまで言われちゃ俺だって信じざるを得ないよ。あんたいい人だ。これからはじいさんって呼んじゃおうかね」

老人は愉快そうに笑った。孫が増えるか、こいつはいい。

と、そのときだ。不意に食堂の入口が騒がしくなった。皿が落ちたのだろう、けたたましい音が鳴って、ゼンをうんと睨んだ給仕女が、木の盆を口に当ててきゃっと叫んだ。

「おい兄ちゃん。いつまでも変なぁこと言っとったら許さんど。金がねえたぁどういうことだ」
店主だろうか。ひどい訛である。
「ありゃろくな教育受けちゃいねえな」
首を伸ばして騒ぎのほうを窺いながらゼンが言う。自分のことは棚上げだ。
どうやら無銭飲食がどうとかで揉めているらしい。よくある光景だ。俺ならば見事に逃げ切ってみせるがね、とゼンは思う。逃げ足の速さにかけては自信があるのだ。しかし今回はどうやら運悪く掴まってしまった者がいるらしく、店主らしい恰幅のいい男は、扉の前に立って出口を塞いでしまっている。
それに対峙するのは若い少年だった。年のころ十七、八。いや、もっと若いだろうか。ゼンとそう変わらない年にもみえるし、もっと成長した体つきにも思える。推し量りづらい容貌である。顔はひどくあどけないのに、背ばかりがすらりと高く、丈のみをみれば店主とだってそう変わりない。薄茶の髪はふわふわと柔らかそうで、陽光を浴びれば白にだって金にだってみえる。きれいな色だ。ゼンの強情っぱりの固い黒髪とは大違いだ。夜の闇に似た色のマントを肩にかけていて、遠目でみても上質のものらしいことが分かる。剣を帯びているから、もしかすると衛兵を生業とする者だろうか。しかしとても腕がたつようにはみえない。なにせ、風が吹けば倒れてしまいそうなほどに細いのだ。なまっ白い首筋は小枝のように寒々しくて頼りない。彼は立っているだけでもふらふら揺れているではないか。
「こら、兄ちゃん」
すると、ずっとだんまりだった少年がようやく口を開いた。にーちゃんじゃないよ、と言う。ようようの抗弁にしては、ずいぶんと舌っ足らずである。
「おれはユア。ユア＝A＝フロイアント」
「ンなこたぁ知らん。それよりよぅ、他になんど言うことあるんと

違うか。おう、兄ちゃんよぅ」
少年はこっくりと頷いた。そして素っとん狂にもこう言ったのだ。
「ごちそうさまでした」
店中がどっと沸いた。もちろん、店主ひとりを除いて、である。
店主のこめかみには太い血管が浮きあがっている。噂に聞く魔物もかくや、という形相だ。だのに少年はへらへら笑って動じない。なんなのだろう、あの愛想のよさは。ふと気を抜けばそのまま店主の肩に手をまわし、よう相棒、とも言いかねない。いまや客も給仕人も彼らの動向に目をこらしている。
「おおぅ！　いい度胸だぁ、このやろう。その小憎い面ぁに拳固かましてやろうかぇ！」
給仕女がまた短く悲鳴をあげた。木盆をさらに引きあげる。それでいて目だけは隠さずしっかりと成り行きをみているのだから抜け目ない。
丸太のような腕を振りあげ、店主はいましも少年に殴りかかるかと思われた。少年が抗うようすはない。ゼンは興味半分、恐ろしさ半分で激しく瞬きをくり返している。心臓がどくどくと震える。ああ、あの少年どうなるんだろう。どうなるんだろうどうなるんだろうどうなるんだろう……。
「あい待った！」
ゼンは座ったまま数センチほど飛びあがった。打たれてもいないのにぎゃっと声をあげすらもした。
活きのいい語調で叫んだのは、いまのいままで相好を崩していたあの老人だ。老人はいまや立ちあがり、きっと鋭く店主を睨みつけている。しかし敵意はあるようでなく、どこか芝居じみた目つきだ。それでも食堂はぴしゃりと冷水をかけられたかのように静まりかえった。視線という視線が店主と少年、それから老人の間をいったりきたりして忙しない。
打って変わったような沈黙のなかで、老人はまたふにゃりと笑みを浮かべた。それだけで不思議な安堵感と、老人に対する手放しの

好意がふつふつと湧いてくる。なにかしら人の心を掴む術に長けた人物である。
「そんな細腕を捕まえてなんとする。な？　金が必要ならわしが払おう。騒ぎ分の色だってつけよう。しかしその子の身はわしが預かる。のう？　どちらにとっても悪い話ではあるまい」
げっとゼンは舌を出した。厳しい世界に長く身を置いてきた分、先の展開を読む力には長けるのだ。ゼンが思うにこの老人、きっとあの少年も放っておけんとか言いだすぞ。
そう考えていると、老人は悪戯っぽく笑ってゼンに目配せなどしてきた。
「旅は道連れ世は情け。旅ではないが、仲間が増えるのはいいことじゃ。人生何事もお導き。えっ？　おまえさんにとっても悪い話じゃなかろうが」
ゼンは盛大なため息をついた。はいはい。類まれなるお人好し、ね。

3　狂った常人

結果として、戴冠式の方針に慎ましさを選んだのは正解だったと言える。

ローハーの歴史上、これほどしめやかな儀式典礼があっただろうか。飾りつけは極限にまで抑えられ、皇城の織物はすべて黒に取り換えられた。その質がいいことに変わりはないが、それでも普段のような豪奢ぶりは随分と息をひそめてみえる。あくまで亡き先帝を尊ぶ考えは、多くの臣民の涙を誘い、大臣らをして唸らせた。

饗される調べもまた格別に素朴であった。なんと笛の音一本の演奏だったのだ。さすがにこれは意気消沈、と眉をひそめる大臣もいたが、これも概ね好意的に受け止められた。これは皇后――いや、いまとなっては皇太后か――の過ぎた放蕩ぶりに、ここ最近非難が集まっていたためでもある。新たに起った若き皇帝、グレイスのこの姿勢は、臣民たちの不満を解消してなお余った。その点でも、やはり選択に間違いはなかったのだ。

こうして、新皇帝は掲げられた臣民の諸手に迎えられることになった。まだ三十路の域にも届かない若者が、それも皇一族とは血の繋がりがないにも関わらず、こうして起ったことを考えてみると、例外のない好調な滑り出しである。

血縁。グレイスの足場のうち、もっとも脆い部分のひとつだ。しかし血統派がこれを大声に攻撃できずにいたのは、偏に先帝レザフのためだ。彼はグレイスを実子と同等、いやそれ以上に掛けがえない存在であると、ことあるたびに言ってきた。血の繋がりだと？馬鹿らしい。余とグレイスとは、より濃く真義で交わっているのだ、と。小さな島国ローハーで、皇帝の言葉ほど絶対の力を持つものはない。

緑雲の林を抱く庭園には臣民がひしめいている。その先のほう、皇一族の始祖が書き残したと伝えられる書物の数に習い、一〇一段

ある石段の上にも、人が黒々と集まっているのがみえる。グレイスが露台に姿を現すと、それが一様に湧きあがった。身が竦むほどの歓声である。

「青冥！　青冥皇嗣！」

口々に叫ばれるこれはグレイスの愛称である。彼の瞳が青空の色をしており、またその明晰な頭脳は名剣のように切れることからつけられた。清流のような響きのこれを、先帝もいたく気にいっており、よくグレイスをこう呼んだものだ。もっとも、これからは青冥皇帝となるわけだが。

グレイスの瞳はここにきて初めて揺れた。皇城は灰でしかなくとも、臣民の生きる城下町は彼にとって色鮮やかな花畑なのだ。臣民はそこを舞う蝶だ。彼らの幸せを守ることが、グレイスに残された唯一の生き甲斐であり役目であった。皮肉にも、グレイスが粉骨を尽くして叶えようとする臣民らの夢が、彼の忌む贅沢まみれの皇城のうちにあることを、若い彼はまだ知らない。

第三話　狂った常人

嬉々とした声に包まれていても、脳裏をちらつくのは別れ際にニンフがみせた笑顔ばかりだ。豪放で痛快な笑顔だった。二十余年前、グレイスがこの上ないわがままを畳みかけ、死刑を目前にしたニンフと面会したときにも、彼はあの笑顔をグレイスにみせなかったか。

「さて。すこしばかり女の力を借りねばなりませぬ」

昨夜のことだ。グレイスはニンフの言葉に眉をひそめた。いったいなにを言いだすのか。

「女と申しましてもこの世の者ではございません」

まるで謎かけだ。

「精霊か」

「さようにございます」

頷きニンフは口早になにかを呟いた。吐息の掠れに混じってしま

いそうに小さな声だ。しかしそれがもたらす結果ときたら。
　凪いだ空に風を吹かせ、枯れた土地に雨を降らすのが精霊の業だ。このときも、お決まりの季節風すらすっかり逆に流してしまうほどに、風の精霊ウィンディーネは強大な力をみせつけた。彼女はニンフの召喚に従って白の世界からやってきたのだ。ただ姿を現すだけでこの様だ。いつもながら、彼女ら精霊のもつ力には恐れ入らされる。
　ウィンディーネは褐色の肌に白い髪をしている。青碧の瞳、細い首筋、白い薄絹に涼やかな装身具。これらすべてを一纏めに言い表す単語があるとすればこれだ。――美しい。
　精霊はどれも女の姿をしている。どうしてなのか分からないし、知る由もないだろうが、彼女らは皆一様に美しい。しかしそれにも階級があるのだ。精霊の世界にも階級か、と魔法の講義を受けてグレイスは内心ため息をついたが、ただ人間のそれとは違ってわりと自由なものらしい。どうもころころと変わるようなのだ。彼女らの言う階級とは即ち力の強さ、彼女らを使役する魔導師の力量を示す値にすぎない。これが高まると身の輝きやら髪の長さ、装身具の美麗さまで変わってくる。やはりどうしてなのかは分からない。しかし、そういう階級ならば悪くない、とグレイスは思うのだ。言わば己の鏡である。ローハーで威張る階級のように、それで行動の範囲を規定などする馬鹿げたものとはまるで違う。
　――皇嗣にはお変わりなく。今日も優美でおられますこと。
　ウィンディーネは恭しく頭をさげる。まるで人間のような口の利きようではないか。彼女が浮いてさえいなければ、どこの美人かと思ってしまうほどな自然さである。グレイスはわずかに頷いてみせた。それからニンフに向き直る。
「それで、ウィンディーネになにをさせると言うのだ」
「遁走の手引きを。……こちら」
　懐に入れ、なにやらごそごそとまさぐっていた手を取り出すと、ニンフは小さな紙包みをつまんでいた。よくみると粉が包まれてい

るようだ。
「眠り薬です。こそりと調合しました。いつかお役にたつときもあるかと思い、煎じた多くの薬のひとつでございます」
グレイスは呆れて口を開けた。ときどき、小僧の使いのようなことをさせられると思っていたら、こんなものを作っていたのか、あの小部屋で。まったく、この老人は底知れない。
「まさか毒など煎じておらぬだろうな」
ニンフはちょっとばかり肩をすくめる。
「ニンフ」
尖った肩がさらに跳ねる。いたずらを咎められた悪童のようだ。
「煎じました、煎じました」
観念したのかニンフが吐いて、グレイスは大きなため息をつくはめになる。なんという奴。誰に服させるつもりであったか。呆れ半ばにそう問うと、ニンフは意外にも真面目な顔をした。
「毒と薬は表裏一体。なにも悪事にばかり働くというわけではございません」
「馬鹿を申せ。それは原料のうちの話。ひとたび毒として調合されれば、二度と薬にはなり得まい」
「では、ユアはこのまま処刑なされませ」
ウィンディーネが吹かせたわけでもないのに、強い風がびゅうとグレイスの髪を揺らした。
「なぜ」
「彼は毒です」
グレイスの口内はあっという間に渇いてしまう。先ほどまでのおどけはどこへやら、ニンフの瞳は鋭い。
毒という言葉が頭を巡る。ユアは毒。皇一族のために調合された、人を殺めるに躊躇いをもたない生きた兵器。
「逃げるとなれば行き先はバレリア。人の多い国です、特に港町などは。もしそこでユアが毒を吐けばどうなります。――惨状です。たくさんの命が奪われましょう」

グレイスは言い返すこともできない。正論だ。
「私のような魔導師の端くれ、とてもユアを止めることなどできますまい。彼が一度でも怒気を発すれば」
「しかし彼の命は限られている」
かろうじてニンフの言葉を遮るも、形勢はいっかな動く気配がない。魂吸いの呪いですな、とニンフは言った。グレイスは首だけで頷く。
「皇帝に叛けばそうなりましょう。生きてひと月の命。苦痛の一ヶ月でしょうな」
すっかり黙ってしまった皇嗣を、ウィンディーネが心配そうに見守っている。しばらくの間を置いてから、ニンフは静かに言葉を続けた。
「……しかし、やはり私は行きましょう」
グレイスがゆっくりと顔をあげる。
「あなた様は私の命だ。あなた様の苦渋と、見ず知らずの人間の命。比べられるものではございませんが、それでもあなた様を選んでしまうのは、逃れられぬ私の傲というものでしょう」
「ニンフ」
「頼む」
最後の一言はウィンディーネに向けたものだ。ニンフの命令を受け、風の精霊はまたたく間に姿を消した。もちろん、例の薬包も忘れない。
十のつく日の秘めごとのために、空が白むまでは、何人たりとも皇帝の寝室には近づけない。ただグレイスひとりを除いては。これは好都合だった。今宵、この階に警衛の兵はいない。その分上下の階を固めている。二階下まで降りてしまえば、あとは裏庭の切戸につづく隠れ道があるのをふたりは知っている。このニンフこそが作った道なのだ。彼が雷の叱責を降らせる前に、幼い皇嗣を遊びにお誘いしようとして。つまり、ふたつの階を下りてしまえばこちらのものということ。

眠り薬をウィンディーネに運ばせるというニンフの計略は、見事にうまく働いた。警衛の兵士たちは、どれも謹直な男たちであったが、薬の誘惑には敵わない。崩れるように眠ってしまった中を、皇嗣と元死人が駆けぬける。あとに続くウィンディーネは、この逃走劇をどこか楽しんでいるようだった。

「ユアの居所に御心当たりはございますので？　あれが勝手に動いたとなれば、彼の教育係も無事ではおりますまい」

隠れ道を半ば滑りながらニンフが問う。闇の中だったがグレイスは頷いた。

「ああ。ひとつだけある」

はたしてユアはそこにいた。海のみえる木、その頂辺に。

グレイスがこうも彼に近づいたのは、これが初めてのことだ。グレイスの強靭な心臓も、このときばかりは激しく鼓動した。

階級こそ“Ａ”を戴いているものの、ユアは穢れた身の少年だ。皇一族の目に触れることなどあってはならない。しかし、それでもグレイスは一度だけユアの姿をみかけたことがある。会食に向かう回廊の途中で、ふと目をやった木の上にユアがくつろいでいたのだ。初めてみたにも関わらず、そのとき、グレイスには彼が噂の魂食らいであると分かった。グレイスがみている内に、厳つがましい男がばらばらと木に走っていき、木上の彼を引きずりおろして連行してしまったからだ。彼のローブが緑のことから、彼が皇城での自由を許された上五位内の階級にあるのは明白である。それでいてこの仕打ちとくれば、冴える頭脳が導く答えはひとつしかなかった。彼こそがユア＝Ａ＝フロイアント、哀れにも情を奪われた暗殺者なのだ、と。

「あれが」

呟くようなニンフの声で、グレイスははっと我に返った。

「魂食らい。初めて目にします」

たしかユアの歳は十九ということだ。彼が生まれたのは、グレイ

スひとりを残してニンフが外界との関わりの一切を断った後ということになる。
改めてユアに意識を戻し、グレイスは気づいた。――歌っている。ウィンディーネはもう姿を消しており、風は自然に吹くばかりだが、それに混じって鼻歌が聞こえてくる。ユアだ。ユアが歌っている。知らず、グレイスの足が半歩下がった。
「ユア＝A＝フロイアント」
震えのない声でニンフが言う。さすがはかつて難癖ある大臣らを束ねた大人（たいじん）である。
調子はずれの鼻歌がやむ。葉がこすれて音をたて、どうやらユアはこちらを窺っているようだ。
「だれ？」
「ローハー国第一皇子、グレイス＝E＝ロウ様であらせられる。降りてこい」
うおっという素っとん狂な声とともに、大木の枝がひときわ大きく揺れる。葉とともに落ちてきた影があった。ユアである。音のない、しなやかな着地。
「うあ」
ユアは心もち首をかしげ、無遠慮にもグレイスの顔をしげしげと眺めた。
「皇嗣だ。ほんもの」
「無礼な――」
「よい」
いきり立つニンフを制し、グレイスは一歩前に出る。その荘厳さ。かのニンフが言葉も出せず、惚けたようにその面を見守るほどだ。
「ユア＝A＝フロイアント」
「うん？」
もはや確認するまでもないが、と心の中でつけ足してから、
「皇帝を弑したのはおまえか」
「しーした」

まるで不格好な発音に、グレイスは思わずため息をついた。そしてそのことに驚いた。たとえニンフの前といえども、一人のとき以外でこれほど明け透けなため息をつくのは今までになかったことだ。

グレイスはかぶりを振る。まるで無知なこの少年の前で、皇嗣の威厳をふりかざしたとて何になろう。そして先ほどまでとは打って変わった口ぶりでユアに語りかけた。

「ユア。皇帝を殺したのはおまえか」

ニンフは目を丸くする。グレイスのこれほど自然な姿をみるのは初めてである。対するユアは無頓着に、こうてい、とおうむ返しに呟きなどしている。

「レザフだ。レザフ皇帝。……殺したのか」

あっ、とユアは声をあげた。それから遥か星のあたりをみていた目をグレイスに向けて、

「うん」

これだ。あっけらかんとしたこの調子。きっと平生とまるで変わりないのだろう。腹は減ったか？　うん。そんなやり取りにすら聞こえる。やはり噂どおりなのだ。ユアは、人を殺すことになんの抵抗も感じない。狂人よりもずっといかれた“常人”なのだ。常人と言うのは、少なくともユア自身だけはそう思っているという点で。

ニンフの顔が強張るのが分かる。グレイス自身もかつてない恐怖に震えている。しかし、それでもこの少年の前から逃げ出したいとは思わなかった。奇態なことだ。涙のない暗殺者と、むしろもっと言葉を交わしたいと思っている。

「グレイス様」

ニンフに押しとどめられて気を取り直す。グレイスはまた足を一歩踏み出していたようで、ニンフはこれ以上ユアに近づくのは危険だというのだ。グレイスは頷き、再び足を戻した。代わりにニンフが前に出る。

「ユア＝A＝フロイアント。きさまの負う罪は重い。本来ならば即刻死罪となるところ、グレイス様には、特別な恩をもってこれを逃

がせと仰せられる。罰は呪いで足りるとのこと。よってかく言うニンフが共連れとなり、夜のうちにバレリアへ逐電という次第。あり難く受けよ」

ユアはいっそう首を捻るばかりだ。ニンフも元より彼に言い聞かせるつもりなどあるまい。役人としての立派な口上。グレイスに向けた、あまり素直でない別れの挨拶なのだ。グレイスもそれを分かっている。だから、朗々と涼しい彼の弁にじっと耳を傾けている……。

晴れやかな顔でグレイスをふり仰ぐと、ニンフは最高礼の形をとった。ユアも慌ててそれに習う。どうやらこれだけはしっかりと躾けられているらしい。グレイスはぐっと顔に力をこめた。こうでもしないと妙な具合に緩んでしまいそうになるのだ。

薄くなったニンフの頭髪。かつては届きそうにもなかった頭が、いま、皺で縮んで目の前に深く垂らされている。二十年分の思いがどっとグレイスに押し寄せる。グレイスはゆっくりと、言葉にできない――きっとしてはならないのだ――感情をこめて、ニンフの頭上を手刀で払った。同じようにしてユアの頭上も。ユアにはおそらく一度限りの返礼だ。こちらにも深い思いが湧く。心が動くことだけは、どう意識しても止められないものなのだ。

「馬を連れていくがいい。好きなものを選べ。私にしてやれるのはそれくらいのものだ」

「十分でございます」

言いながらニンフは持っていたマントをユアに被せた。夜の闇によく紛れる色のマントだ。

「おまえは警衛上がりの大臣だったな。厩番にも門番にも、きっと見知った顔がいよう」

「ええ。彼らはきっと驚きましょう。幽霊と魂食らい。おとなしく道を譲らぬ訳がありませんな」

「この期に及んでまだ軽口とは。私が言うのは穏便に行けということだ。知己相手におまえの舌を振るえば無理な話でもあるまい」

ニンフはからからと笑う。ユアはひとり蚊帳の外だ。グレイスとニンフの顔を交互にみやってばかりいる。
「御安心を。心得ております。それよりも心配なのはあなた様だ。眠り薬はそう長く効く代物ではありません。さ、御戻りを」
グレイスは頷く。しかし足が動かない。なんの話、とまるで状況にそぐわない調子で、ユアが歌うように割って入った。あの厳めしさはどこへいったか、ニンフはすっかり祖父のような顔をしている。おまえの恩人様に御別れを言うのだよ、などと優しく声をかけなどもする。そうかと思えばさっとグレイスに向き直り、お早く、と口を尖らせて急きたてるのだ。それでもグレイスが動きかねていると、ニンフは腰に手を当てて踏ん張った。仁王立ちというやつである。
「そのようなことで、国の長を勤められると御思いですか。老人に少年ひとり、さっさと見送られずにどうなさる。あなたはローハー臣民全員の希望なのですぞ！」
声をひそめてはいるものの、その勢いは昔そのままだ。ああ、とグレイスは息を漏らす。胸を温かいものが満たしていく。
「さすがは鬼人ニンフの一喝。不肖の身も引き締まる」
グレイス精いっぱいの茶目っけだ。ニンフは顔中で笑った。そして次の瞬間にはそれを一層引き締めた。グレイスも皇一族の顔つきに戻る。
「では」
「うむ」
呆気ないほど短い会話である。それを機にふたりはそれぞれに踵を返す。ふり返りはしない。ニンフに促されながら、しかしユアはぐずぐずとごねているらしい。なんなの、とニンフに訊ねる声がする。訳がさっぱり分からないのだろう。
グレイスは大股に歩いた。どれほど気を張り詰めていたのか、ふと我に返れば自室の前というあり様である。帰りの道はどうだったのか、頭を捻ってもてんで思いだせそうにない。しかし城の静けさをみると、どうやらこちらもニンフたちも、うまく事を運べたよう

だ。
回廊から空を見あげる。上階の兵士にみつかってはと、すぐに陰へと引っこんだが、丸い月が夜闇に浮かんでいるのがみえた。雲はしばらくお出かけらしい。
美しい月だ。
逃げるふたりの足元を少しでも照らしてくれたなら、とグレイスは願う。十の指を組み合わせ、月に向かってひたすらに。

「義兄様（あにさま）」
まだどこか幼い声に、グレイスはぶるりと身を震わせる。
どうやら汗をかいているらしい。吹きつける風がいやに冷たい。心配そうにこちらを覗きこむのは血の繋がらない弟、ヤマだ。母親に似た目鼻立ちをしていて、顔の輪郭がもう少し引き締まっていれば、もっと匂いたつ若者だろうにと陰口をたたく者がいる。見目優れたグレイスを引き合いに出し、どちらがどうと論じる者さえいるのだ。しかしグレイスには彼がどうあっても可愛い義弟だ。彼の実母ダレスとは違い、ヤマはよくグレイスに懐いている。血筋や継承のあれこれを全く抜きに、ただ純粋にグレイスを尊敬しているのだ。それだから彼を排そうとする母の気持ちがどうも窺い知れないらしく、グレイスに向けるのは多くが困惑したような笑みだ。優しいばかりが取り柄の少年である。
「御顔色が悪いようです。人の熱気に中てられましたか」
汗をつまみ、グレイスはにこと笑った。
「大丈夫だ。心配には及ばぬ」
「そうでしょうか」
浮かない顔を崩せないヤマの、やや丸い肩をグレイスはぽんと撫でる。それをみた臣民はわっと再び湧きあがった。すかさずダレスが傍に寄り、グレイスの手に自分の手を重ねてくる。念入りに白粉をはたいた手だ。臣民の歓声は止まない。美しき兄弟愛、美しき親子愛――。

「もしも義兄様が倒れられましたら」
臣民に向かいほほ笑んだその口で、ダレスは平気でこんなことを囁くのだ。
「ヤマ。あなた様が御起ちにならねばなりませんのよ」
庭園は歓喜の渦の中にある。海を渡った大国にいるふたりにも、この歓声は届くのだろうか。季節風がこれを運んでくれるのだろうか。若い皇帝は、ただ彼らの平穏を祈る。

4　化け鼠の巣

面白くない。ゼンは下唇を尖らせた。

元はといえば、これは俺ひとりが吸える甘い蜜だったはずだ、とゼンは呟く。それがどうだ。いつの間にやらひょろっこい、この――ええと、名前はなんと言ったか――変な野郎が横入りしてきやがって。

「なにをむっつりしておる。報酬が減ることを案じておるのか。えっ？　ふふ、心配はいらんぞ」

とりなすように老人が言っても、ゼンの不機嫌は治まらない。

ユアと名乗る少年の無銭飲食騒ぎは、結局、老人がすべて支払うということで丸くおさまった。店主は最後までしかめっ面だったが、案外いつもああいう顔なのかもしれない。それはともかく、ゼンにとっての問題は、食堂を出れば当然のようにユアがくっついてきたことだ。まるで親鳥のうしろに続く雛のようである。持ち前の鋭い目をことさらに尖らせ、ゼンがぎろりと睨んだところでユアはまるで動じない。むしろ、えへらと笑ってこちらの鋭気をくじく始末だ。

どうやらこの少年、頭の方が少しばかり足りないらしい。先ほどから老人は、分かりやすい言葉を選んでこれからの段取りを説明してやっているのだが、どうもうまく会話が絡まないのだ。

「での、わしの家で、まずふたりとも湯を浴びるのじゃ」

「ゆ」

「そう、湯」

「ユア」

老人は大口を開けて笑った。言葉繋ぎ遊びか、こりゃあいい。しかしそうじゃない。湯、じゃよ、湯。体を綺麗にするということじゃ。

「ふうん。楽しいね」

こんな具合である。ゼンの眉間はさらに険しくなっていく。

人でごった返していた大通りは、しだいに静けさに取って代わられて、気づけば三人は住宅街を歩いているのだった。大きな邸宅ばかり並んでいる。ゼンは目を輝かせて左右をみやる。ときどき馬車が急いで通りすぎていくのだが、それが立てる砂埃さえ、ゼンには輝く金粉にみえる。後ろでは、ユアがなにやら一生懸命に話している。どうやら自分の身上を語っているらしいのだが。

「それでね、おれ、いきなり一人になっちゃったの。おじいさんが消えちゃったんだ。でね、おれ、とまどま……とまどま？　とまどな、とまどま……とまどまっちゃって」

「戸惑っちゃって！」

思わずゼンは叫んでしまう。それからはたと口を抑えた。――しまった。あいつとは口を利いてやらないつもりでいたのに。

ユアはにへらと顔を崩した。

第四話

「ありゃ捨てられた口じゃな」

老人の耳うちに、ゼンはふと眉をひそめた。捨てられた口。

「どうも話を聞いているとそうらしい。あの少年、ローハーから追い出されたんじゃよ」

「ローハーだって！」

ゼンの声は素っとん狂に裏返る。

ローハーといえば、海を挟んだ隣国にあたるものの、その秘密主義ぶりは徹底したもので、どういう政治をして、人々はどんな暮らしぶりをしているのか、そのほとんどが薄絹の向こうに隠されている。ゼンの曽祖父が若かったころに、のちに百隻戦争と呼ばれる中規模の戦争がローハーで起こり、それでようやくいくつかの事象が世の明るみに出たのだ。ひとつ、ローハーでは階級こそが人生を左右する力を秘めていること。ひとつ、皇一族と呼ばれる皇帝の家系がその頂点に君臨し、絶対の権力を有していること。そしてもうひ

とつ、ローハーは魔法技術に特化した国で、その力の恐ろしく強大なこと。ゼンは話に聞いた限りだが、その凄まじさは、いまではすっかり姿を晦ましてしまった神の子エルフを、彷彿と思いださせるほどという。エルフ。その美しい体には強靭なばねが隠されており、一夜で十の野を駆けるという人々。ローハーに住まう民たちは、そのエルフの血を色濃く残した者どもではなかろうか、と推測する人もあった。

「ローハーの堅物人間？　あの妙ちきりんが？」

「おお。本人もそう言っておる。それに思いだしてごらん、彼の言葉を。ユア、“Ａ”、某と名乗ったじゃろう。あのＡというのはきっと階級なんじゃよ、ローハーの絶対規範と言われる」

ゼンは目を丸々とさせてふり返る。話題の主役は、下手な鼻歌に興じながら、ふらふらと心許ない足取りで歩いている。よくよくみれば、ユアが着ている緑のローブも、この国バレリアではてんでみられない珍妙な代物だ。どうやら本当にローハー国民らしい。

「おい、あんた」

ユアは歌をやめて目をぱちくりさせた。

「おまえじゃないよ。おれはユア。ユア＝Ａ＝フロイアント」

なんだっていいさ、とゼンは吐き捨てる。

「あんた、ローハーの人間なんだってね。ちょっと話聞かせな」

ユアはにっこりしながら首を傾けた。ゼンは老人に小さく囁く。

「いい機会だ。あいつにたんまり喋らせようぜ。それで内容を本にするのさ、ローハーの真実、だとかいう。きっと学者どもは喜んで買うだろうよ」

ほほう、と老人は思わず唸った。

「おまえさん、儲け話を嗅ぎつける分には、恐ろしく才覚があるようじゃのう」

しかし結果として、この計画はまるでうまく進まなかった。ユアはなにも知らなかったのだ。

確かに彼はローハーで暮らしていた。それは彼もはっきりと断言

した。ただ、ゼンがその実態に触れようとすると、ユアの言葉はふにゃふにゃと崩れてしまうのだ。ローハーの皇城ってどんななの。ええと、うん、埃っぽい。こんなふうに。かろうじてゼンが知り得たのは、皇帝の名前はレザフといい、ついこの間雲に隠れて還らぬ人となったらしい、ということ。

「だめだ。これじゃとても一冊の本になんて出来やしねえ」

「変なものを拾ってしまったもんじゃの」

老人は柔らかな苦笑を浮かべる。ゼンは肩をすくめ、ずかずかと大股に歩いていった。だから聞こえなかったのだ、老人が囁いた不吉な言葉など。

――こりゃさっさと捨ててしまうに限る――。

「じいさん！　あんたの家いったいどこよ！」

大声でがなるゼンに、老人はからからと笑ってみせた。おまえさん、もう通りすぎておるよ、と。

屋敷の中に案内されると、ゼンはすっかり委縮してしまった。あまりに広すぎるのだ。

「お帰りなさいませ、旦那様」

鉄の門が開けられると、三人の下女がきちんと整列し、頭を下げて老人を迎えた。ゼンは口を半ば開けて女共をみる。美しいのだ。灼けた肌も、労働者の証というよりは、健康的な利発さを際立たせる飾りのようである。一様に黒く、しっとりとした髪が、これまたよく似合っている。しかし老人はすっかり見慣れているのか、鷹揚に頷くだけで、彼女らの方を顧みもしない。

「こりゃあ期待以上だ」

ゼンは夢見心地で呟いたが、実際、彼の期待は予想を大きく上回って現実となった。

快適な椅子、温かい料理、湯殿の天井にまで伸びる大理石の柱。その中央に置かれた湯桶は、ゼンがこれまでみた中でも随分と大きな部類に入るようだ。もっとも、みたといっても実際に使用したこ

となど一度としてなく、その水垢をこそぎ落とすばかりであったが。しかし今度は、これを自由に使っていいと言う。
「御不満は？」
「なし！」
老人はにっこりと笑った。けっこうけっこう。では湯を張らせよう。
白い湯気をもくもくと立たせながら、熱い湯が桶に注がれていく。桶はゼンの膝ほどまでの高さがある。その七分目ほどで手を止めようとした下男に、もっともっととゼンはせがんだ。このような経験、後にも先にも二度とあるまい。贅沢が目の前に転がっているうちは、存分に堪能しておくに限る。
下男はたいそう愛想がよかった。ゼンのわがままにも、はい、はいと答える。ゼンはちょっとばかり面食らった。元来、彼ら“なんでも屋”と召使らは、いがみ合う関係にある。どちらもが互いを軽蔑しているからだ。特定の主人を持たない“なんでも屋”は、変わり映えがしない毎日を、鎖に繋がれた犬のように媚びへつらって生きる召使を馬鹿だと思うし、逆に召使らは彼らを、ふとやってきては仕事をさらい、小金をもらって満足する臭い乞食と嘲っている。そんなだから、両者が相容れないのは当然で、なにかしら諍いが起こるのも日常茶飯事だ。それがこの気前良さだから、好望にゼンの顔がほころぶのも無理はない。さっさと裸になったゼンの隣で、ユアがえっちらおっちら腰帯を解いているのをみても、その上機嫌は崩れなかった。俺がやってやるよ、と結び目を解いてやりさえする始末である。
「うはっ。最高、最高！」
漆喰の壁はフレスコ画に彩られていて、どうやら美しき精霊たちの姿を描いたものらしいが、鮮やかすぎるその絵は悪趣味といえる。しかしそれもゼンの興を削ぐことはない。体をこする目の粗い布を手に、ゼンは湯桶に駆けよった。たっぷり張られた湯を手桶ですくい、頭からかぶる。よほど汚れが溜まっていたのだろう、顎から滴

る湯は茶色く濁っていて、ゼンは困ったように笑った。これでは例の給仕女が彼を睨んだことも責められない。
「おい、あんたも早く来な！」
呼べば、ユアだよ、という声が返ってくる。仕方ないな、とゼンは呟いた。
「分かったよユア。ちゃんとそう呼ぶから、さっさと来いよ」
「うんっ」
ユアはにこにこと走ってくる。湯桶にざぶざぶと足を突っこみながら、ゼンは彼の肌の白さに驚いた。金持ちといえど、こうも白い人間などそうはおるまい。それにその細さったら。季節風が吹けば、ユアなどは布を持たずとも浮いてしまうのではないか、と思ってしまうほどだ。いったいどういう生活をしてきたのやら。闇に生き、満足に栄養を与えられない環境でなければきっとこうはなるまい。ゼンの胸がちくりと痛む。ユアもユアで、きっと恵まれない生を強いられていたに違いない。捨てられた口、という老人の言葉が蘇る。
「背中、流してやるよ」
「うん？」
「こすってやるってば、背中。ほら、あっち向きな」
痩せ細った肩を掴み（ずいぶんと手を伸ばしてやらなければならなかった）、くるりと体を反転させてやる。と、ゼンの目は一点に引きつけられた。ユアの背中、ちょうど心臓の裏側あたりに、見事な彫り物があったのだ。色は薄いが、薔薇を繊細に模（かたど）っていて美しい。
「へえ。ローハーじゃこんな洒落た彫り物を入れるのか。――おい、しゃがみなよ。届かないだろうが」
「……」
ユアはこっくり頷き、おとなしく湯桶にしゃがみこんだ。湯の表面がたぷんと波打つ。
「それね」
「あ？」

「それ、全然いいものじゃないんだよ」
呪いなんだよ、とユアは言った。ゼンは思わず訊き返したが、ユアはもうなにも言わなかった。ゼンは首をかしげる。なんだこいつ、のぼせたか。
「湯加減はいかがです」
ゆったりとしたパンツの裾をまくり、下女のひとりが湯殿に入ってきた。
「ばっちりよ。あんた湯の温度みる天才だ」
下女はにっこり笑い、湯桶にすこしだけ湯を注ぎ足した。やはり愛想はいいのだが、張られた湯が黒ずんでいるのをみると、さすがにぎょっと身を引いた。が、文句は言わない。
「旦那様からです」
そう言って差しだしたのは小さな盆だ。四つ足の台座の上に、バターの塊のような代物が乗っかっている。これが石鹸か、とゼンは内心頷いた。そういえば、鼻をくすぐるいい匂いがする。
「ご苦労、ご苦労。うん、下がっていいぜ」
ゼンは石鹸を奪い取ると、しっしと手を振って下女を追い払った。下女は深く頭をさげて退出したが、湯桶に背を向けたとたん、彼女の顔が嫌悪に引き攣ったことをゼンは知らない。
「おいユアみろよ！　泡だ！　すげえ、次々に出るぜ。まるで魔法だ！」
ふたりは喜びはしゃいで飽きることがなかった。

しかし、ゼンのこのご機嫌も、山道に差しかかると突然萎えてしまう。老人は大したこともないと笑っていたが、しかしやはり未知の生き物は恐ろしい。相手が自分よりもうんと大きいとなれば殊更だ。履き慣れたズックがいやに重い。
対するユアは、これが随分と軽やかな足取りだ。老人の豪邸に向かうときともまるで変わらない。ただ事情を理解できていないための陽気さなのか、それとも案外剛勇な精神の持ち主なのか。

「おい。俺たちがこれからなにをするか、言ってみな」
「ばけもの退治」
なんだ、よく分かっているじゃないか。ゼンの肩から少し力が抜けた。そのうえでこの気楽さなのだから、やはり化け鼠は恐れるに足らない獣らしい。
「あ」
ユアが間抜けな声をあげ、前方を指さして固まった。穴だ。化け鼠の巣穴である。ゼンは指先をぺろりと舐めた。
「なるほど、じいさんが言っていたのはあれか。……よし」
ゼンは手近の棒を拾いあげた。そうしてからふり向いてみると、ユアはぼうっと突っ立ったままでいる。なにしてんのよ、とゼンは声を荒げた。
「あんた、丸腰のまま入るつもり」
「うん？」
「だから、武器ぐらい――って、ああ。そういうわけ」
ユアの腰元をみて、ゼンは勝手に納得した。飾りは少ないが、少なくとも丈夫そうな剣が提げられている。木の棒などより、あちらのほうが余程頼りになるだろう。
ゼンは腕を鼻に近づけ、その匂いをかいだ。うん、石鹸の香りだ。化け鼠はこれを嫌うとのことだから、これだけ匂えば文句ないだろう。いくぜ、と短く促して、ゼンは穴のそばにひらりと走り寄った。その後ろにユアが続く。
巣穴は思った以上に深いらしい。それに酷く暗い。奥の方など、とても窺えそうにない。それでもゼンは、岩の陰から穴を覗いていたのだが、妙に静かだ。生き物の気配がない。存外、既に石鹸の匂いを嗅ぎつけて、野郎ども、逃げてしまったのかもしれないな。
都合のいい考えに己の身を震わせ、ゼンはようやく巣穴に足を踏み入れた。ユアもそれを追いかける。
ふたりの姿が暗がりに溶けていくようすを、男は草むらに身を潜めてじっと窺っていた。足音さえ聞こえなくなると、男は後ろを向

いて手を振ってみせ、それに応じて木々がざわざわ揺れた。現れたのは十人ほどの屈強な男である。小山のような男たちは、頷きあうと三手に分かれてばらばらと消えていった。

「ふん、ふーふふ、ふー、ふふ、ふんふふふん」

巣穴の中はしっとりと湿っている。ときどき岩が突き出たりしていて、気を抜けば頭を打ってしまいそうになる。

「ふふふん、ふふふん、ふふふー」

ユアはずっとこの調子だ。ゼンはあまりいい気がしなかったが、むっつり黙って歩いていると、時折水が滴る音が聞こえてきて、それが一層不気味に思えるものだから、それならば、と歌いたいようにさせている。

「痛」

ゼンはぴたりと足を止めた。すぐ後ろをついてきていたユアがぶつかり、彼は抗議の声をあげる。しかしゼンは構わなかった。

ゼンの目の前で、道は二手に割れている。ゼンは戸惑った。どちらの道をとろう。いずれにせよ、帰りに迷ってしまわないよう、目印をつけておく必要がある。ゼンは大きめの石を探し、それを一方の道に置いた。これでよし。こうすれば、こちらは通っていないことが分かる。

機転のきく自分自身にゼンがうっとり浸っていると、その顔に湿った風が吹きつけた。生温いだけでなく、おまけに臭い。眉をしかめて顔をあげると、その鼻先に、ふんふんと開閉するふたつの穴が突きつけられていた。その脇から伸びる、太い髭。

「うっ、ぎゃあああああぁっ！　わあっ、だ、わぁあああああっ！」

腰を抜かさんばかりにゼンは驚いた。化け鼠だ！　転(まろ)びながら後ずさりすると、ようやくその姿をまじまじとみることができた。

――大きい。

予想よりもずっとだ。人間の頭など簡単に咥えてしまえそうなほど大きな口からは、ゼンの手のひらほどある前歯が二本、ちらりと

顔を覗かせている。三メートルほどあろうかという体は、みるからに堅そうな毛に覆われており、興奮しているのだろう、空気を孕んだように膨らんでいる。その背後でちらちら揺れる尻尾がまた長く、そして太い。ぬるりと光る赤茶のそれは、海藻の絡みついた荒縄のようでさえある。それでいて目だけは丸々と小さく、しかしそこには一筋の凶暴な光が浮かんでいるのだ。臆病なようすなどまるでない。その証拠に、力の限りゼンが叫んだところで逃げ出すどころか、ぴくりとも動じないではないか。

「お、おおおいっ、どっか行けっ！」

ゼンはめちゃくちゃに棒を振り回した。びゅんびゅんと空を切る音に、さすがに化け鼠はじりりと後ろへ下がる。その隙に、とゼンは逃げ出す構えを整えた。

「こりゃ話が違う。ユ、ユア、逃げ――ぁぁぁあああああっ！」

ふり向いてゼンは再び絶叫した。いるのだ、ユアの真後ろに。さらに大きな化け鼠が一匹、歯を剥き出して。

「うし、うし、後ろっ！」

「うん？」

叫ぶなりゼンは走りだした。入口とは逆のほう、化け鼠のいない通路へと。慌ててユアもそれを追う。その後ろで、ギギィと耳をしかめたくなるような音がした。化け鼠が鳴いているのだ。彼らはぞっとする声で鳴き続け、不気味な反響はゼンたちを包んでやまなかった。

「畜生！　あの腐れ老いぼれ、適当なこと言いやがって……！」

なにが簡単な仕事だ。馬鹿を言え！　ゼンは目じりに涙を浮かべて罵った。

走るうちに何度も交叉に出会った。道の途中で別の方向に抜ける道がぽっかり現れることもあった。どうやら巣穴は奥に進むほど入り組んでいるらしいのだ。しかし、ゼンは道を選んでやる必要がなかった。必ず道のどちらかには化け鼠がいて、彼に選択権を与えないのだ。後ろからはかりかりと砂を掻く音が聞こえる。ふたりはも

う止まれない。
やがて通路がぐんと広くなり、さながら集会所のようになった場所に出くわした。ちょっとした中庭ほどの大きさである。その中央まで走り出て、ゼンは思わず足を止めた。右でも左でも、前からも後ろからも、ギィギィという鳴き声が響いてくるのだ。
広間の壁面には十ほどの穴が開いている。それを見まわしてゼンはぎょっとした。そのどれもから、化け鼠の湿った鼻先が突き出されているのだ。すっかり囲まれている。彼らはここに誘導されたのだ！
「こ、こんな……」
ゼンはもはや叫ぶ気力すらない。と、そのとき、轟音が大地を揺るがして、彼の混乱をさらに大きくした。高い天井から砂がぱらぱらと零れ落ち、化け鼠共もうろたえ、さらに鳴き声を張りあげる者、慌てて走り去っていく者などいる。ゼンは知る由もなかったが、このとき、みっつだけある巣穴の入り口は、彼らを見張っていた大男たちの手によって、すべて塞がれてしまったのだ。ゼンの体ほどある岩や倒木の類を寄せ集め、何者も出入りできないようにと蓋をされてしまったのだ。
老人の狙いは元よりここにあった。はなから化け鼠を追い払うつもりなどなかったのだ。彼の目的はただひとつ、化け鼠の腹の皮。背は一面に固い毛で覆われている彼らだが、腹部だけはしっとりと柔らかく、そこに生える短い毛は非常に手触りがいいのだ。丁寧に鞣(なめ)してやれば、ただの毛皮で満足しきれない婦人たちに好まれる高級品となる。しかし、凶暴で知られる化け鼠に、真っ向から立ちむかうことなど出来はしない。そこでゼンとユアの登場だ。彼らが生餌となり、化け鼠どもを残らず引きつけているうちに、彼らもろとも巣穴に閉じこめてしまおうというのだ。うまくいけば全てが餓死、まあ恐らくは共食いを始めるだろうが――もちろん少年ふたりを食らった後で――、多少“商品”に傷がついたところで利益に変わりはない。

「最後にいい夢がみられて幸せじゃったろうが。えっ？」
屋敷の長椅子にくつろいで、老人はからからと笑い声をあげた。喉仏が楽しそうに震える。
ゼンは息を荒げて化け鼠共を睨みつけている。それと背中合わせに立つユアは、腰の剣に手をかけることすらなく、口元に添えた指をぼんやりとしゃぶっていた。

5　不穏の影

最初の一滴は、狙いすましたようにグレイスの足元に落ちた。

司教長から冠を受け、ここに、名実ともにグレイス＝E＝ロウ皇帝が誕生した。ローハー第三十七代目の皇帝は、弱冠二十八での即位である。皇城前は、若き皇帝を一目みようと詰めかけた臣民らで溢れかえっている。黒衣に身を包み、堂々と露台に立つグレイス皇帝の御姿をみると、女共は彼の愛を一片でもいいから受けてみたいと悶絶し、男共は彼こそ我が命を預けるにふさわしい御方と頭を垂れた。老人などは、あまりに優れた彼の美貌に、神に愛されるあまり早死にしてしまうのではないかと恐れさえした。そういうわけで、先帝の御霊のためにと素朴に控えた式典も、臣民たちの熱気のために、かつてなく賑やかで歓声に満ちたものとなった。雨が降り出したのはこれが済んだ直後のことだ。

戴冠式が終わり、すこしばかり息をつけたかと思えば、今度は先帝の葬儀である。臣妾どもは準備にすっかり大わらわだ。

追号されて皇尊（すめらみこと）とされたレザフの体は、典医らの手によってきれいに縫い合わされている。粉々となった関節なども全てうまく取り繕われて、彼は白い棺に横たえられた。

「ああ、あなた。わたくしはこれからどう生きればいいの、あなたのいないこの現世で」

身も蓋もないようすで遺体に取りすがり、ダレスは声を放って泣く。大臣の多くは俯いているが、その半数が実は笑いをこらえているのだ。震える肩は涙のためではない。

ダレスが夫を愛していないことなど、皇城の者なら誰でも知っていた。彼女が愛していたのは権力だけ。腹を痛めて生んだ子でさえ、彼女の威光を増すための道具にすぎない。

ダレスの生家は代々大臣を輩出する名家で、幼いころから兄弟に混じって高等教育を受けていたダレスは、他のどの子どもよりも冴

える叡智をみせたという。彼女が男であれば、と父は嘆いた。女が賢くあると慎みがないと言われる社会だ。彼女がどれほど努力しても、大臣ほどの高官にはなれまい。しかしダレスは別の道でその明晰さを輝かせた。別の道、すなわち魔道だ。ローハーにある魔法学校への進学を決めたダレスは、その美貌と頭脳とで、学校に集う秀才たちとも一線を画した。

まったく輝かしい経歴である。木箱につまった金貨よりも、ダレスの歩んできた道は光で眩い。しかし、その道にもただ一点の落とし穴があった。

美しいダレスの顔を恪気に歪めさせた一人の女性。ダレスで間違いないと噂された魔法学校主席の座を、さっと攫ってしまったその女性の名は、スージー＝R＝ホメール。皇城に入ることすら許されない、下二位の階級の娘であった。

第五話　不穏の影

このところ、ローハー皇城は近年稀にみる慌ただしさに包まれている。

新帝の即位、皇尊の葬礼を済ませたのが三日前。グレイスは、それ以来ほとんど眠っていない。横にすらなっていないのだ。彼の前には書類の山がどっしりと佇んでいて、そのほとんどが新皇帝誕生のために発生した細々しい書類であるが、グレイスは漏れなく目を通さなければならない。内容に応じて指示を出さねばならない場合もある。これは歴代皇帝が即位の際に経験してきた一種の通過儀礼のようなものだ。皇帝とは、華々しくみえて実は雑務ばかりの忙碌職だ。愛玩動物のように、血統書があればよろしいとはいかない。それ相応の知力、体力、適応力が求められる。大臣らは、新皇帝がこの仕事を片付けるさまを見守ることで、彼が本当にこの国を支えられるかを判断するのだ。

敬弔の客は多い。全てに会っていては年さえ越しかねないので、

誰誰には会い、誰誰は書面のやり取りで済ませるなどとは太政官らが集まって決める。その判断基準のほとんどが階級だから、グレイスは内心気が悪い。しかし間違っても口に出せることではないから、会食の予定を読みあげる声に、ただじっと耳を傾けている。

「……十六日午前、ハーバルド公家長バルタ殿、長子フェルト殿と会食。正午と午後は、ユリシア国王アルバルト殿、レジア国王ファン殿の御二方と」

「ユリシアだと」

グレイスは思わず口を挟んだ。青い目がすっと細められる。

ユリシア。エルヴァニア全六大国のうち、最も文化の進んだ国だ。気高き雪の女王ユーリスが治めた国という伝説がある。六大国はすべて別名を持ち、ユリシアはこれを「金剛の国」という。北に位置するため雪が頻繁に降ることと、その秀でた文明度が他の追従を許さないことからそう呼ばれている。

文明開化大いに結構。しかし、グレイスが眉を顰めたのには理由があって、昔――といってもそう遠くない昔、先々代の皇帝の時代に、ローハーとユリシアは諍いを起こしている。ユリシアの船団が断りもなくローハーに接近し、見咎めた魔導師たちがこれを襲ったのだ。

先に手を出したのはローハー側だが、箱を開けてみれば、少なくとも攻撃的にはみえなかった船団には、兵士が山と乗りこんでいたことが分かった。元よりユリシアは攻めかかる気でいたらしい。かくして血なまぐさい戦いが幕を開けたのだが、結果をみると、これはユリシアの大敗であった。ユリシアの兵士は、ひとり残らず海の藻屑となったのだ。ローハーの地を踏んだ者さえいなかった。これはユリシアのひどい侮りが招いたことだ。北の大国の思惑をはるかに超えて、ローハーの魔導師の力は恐ろしく強かったのだ。これを百隻戦争という。この戦いでユリシアが失った船が、百を超えると言われたからだ。この戦争で、それまで頑なに他国との関わりを避けてきたローハーの力が、全世界に知れ渡ることとなった。獅子は

ついに眠りから醒めたのだ。
「ユリシア国王が来るというのか。このローハーに」
グレイスの声は怒り半分、驚き半分というところ。まだ流れた血も渇ききらぬというううちに、ユリシアは一体なにを考えているのか。
国土を踏みにじられることこそ防いだものの、ローハー側に損害がなかったわけではない。むしろ大きく損なわれた。国を守れと魔法を使いすぎるあまり、魔導師の多くが“精霊化”してしまったのだ。精霊化とは、涼やかな音の響きからは考えられないほど恐ろしい、死に直結する傷である。
疲弊した魂は、強大な力を持つ精霊の使役に耐えきれなくなったとき、逆に彼女らに食われてしまう恐れがある。食われた魂はその精霊の肥しとなるのだ。魂があれば、生き物は何度でも現世に舞い戻ることができるが、精霊化によって奪われた魂は命の輪廻から外される。消滅。この世からもあの世からも消えてしまうのだ。残された体はただ虚しく朽ちるのみ。
「皇尊から御聞きしたことがある。百隻戦争の後、精霊化した魔導師らがその場に倒れ、北の港は魂のない人で溢れていたと」
「はい。私も絵巻にその光景をみたことがあります。惨いものでした」
「彼らの体は生きたまま腐ったのだ。それを看取らねばならぬ家族は……」
グレイスの拳に力がこもる。思わず立っていたことに気づき、グレイスは少しうろたえながら再び椅子に腰を下ろした。大臣は静かな目でそれをみている。
「皇尊には、その遺恨を忘れるなかれとの御言葉だった。ユリシア国王には会えぬ」
「しかし、御会いなさるようにと仰せられたのもまた皇尊なのです」
「なんだと！？」
ついにグレイスは声を荒げた。聞き耳だけを立てていた大臣らが、これにびくりと反応する。グレイスはまた立った。立って、彼の怒

鳴り声に畏縮しきりの大臣を睨みつける。
「義父上がそのようなことを仰せられたと？　馬鹿な！　ローハー国民を一に考えていた御方だぞ。惨状の記憶も薄れぬうちに、かの国の人と近しく語らえとなど申されるものか！」
「し、しかし、そういう御遺言なのです。ユリシア、並びレジア両国王とは添うように、と」
グレイスは怒りが治まらない。息も荒く背中を向ける。その背に追いすがるようにして、大臣が哀れな声を出した。
「す、皇尊にも、先に御二方とは卓を囲まれたこともあられ……」
もはやグレイスは言葉もなかった。ひゅっと短く息を吸い、髪が頬を打つほどの勢いでふり返る。
「共に御食事なされたと」
大臣は壊れた人形のようにこくこく頷く。グレイスは張りつけられたようにその様子を眺めていたが、やがてふっと気が抜けたように椅子に身を落とした。従者が慌てて駆けより、右に傾いた彼の体を支える。青褪めた従者をやんわりと押しのけ、グレイスは片手で顔を覆った。深い吐息が漏れる。
「……分かった」
やっと彼が言葉を発するまで、玉座のある間は恐ろしく重い空気に満たされた。
「会おう。それが皇尊の御遺志ならば」
「はっ」
「……続きを」
グレイスに促され、大臣は一寸ばかり跳ねあがった。十七日午前、と読み上げる声が、すっかり震えてしまっている。
詰まりに詰まった訪問客との会食の予定を聞きながら、グレイスの頭はすっかり困惑している。猫のいたずらですっかり縫い糸が絡まったかのようだ。グレイスの脳裏で、亡き養父の笑顔が揺れる。グレイスは彼を怨んでいた。日に灼けた手で触れられるたび、きめ細やかな肌を粟立たせていた。だがそれは一人の男としてレザフを

みた場合のことで、皇帝という冠を戴いてみれば、確かに彼は素晴らしい人物であったとは言えないか。グレイスは彼を憎みながら、一方では深く尊敬していたのだ。それなのに。

震える声が予定をなぞる。十八日、十九日――二十八日。大臣が巻物をしまう。グレイスは頷き、手を振って彼を下がらせた。グレイスは、通過儀礼をついに乗り切ったのだ。やっと休める。

私室に戻ってもグレイスの背筋から力が抜けることはなかった。天に向かってしゃんと伸びている。従者たちは感服してため息すらついてしまう。なんと強靭な精神をもった御方だろう、と。しかし、この徹底して隙をみせないグレイスの姿勢は、時に彼から人を遠ざけもする。あまりに近寄りがたいのだ。彼をみていると、どうにも自分がつまらぬ小物に思えて仕方なくなってしまう。恥じ入って引きこもりたくなる。それで、グレイスに接する人はどうしても緊張を解くことができないのだ。

「では、私どもはこれで」

頭を下げて退出する従者たちに、グレイスは鷹揚に頷いた。静かに扉が閉められる。するとようやく、それまで張っていたグレイスの表情が緩んだ。荒らぶる海が、突然凪いでしまったかのような変わりようだ。

卓に肘をつき、グレイスは眉間のあたりを指で押さえた。頭が痛い。目を閉じてさえ、羊皮紙に整然と並ぶ文字がみえるようだ。思考がひどく鈍っている。まだ若いとはいえ、丸三日もろくに眠っていないのだ。皇尊が生前言っていた分には、通過儀礼は一日で終わったというから、今度のこの仕事量は異常である。実はここにダレスが一枚噛んでいるのだが、その嫌がらせを除いても、きっとグレイスは軽く二日は休めずいただろう。書類の多さは、つまりそれだけ新皇帝が期待されているということだ。それにもちろん先帝の徳も。

――先帝。

閉じていた目を細く開ける。
グレイスには訳が分からない。レザフ皇帝。臣民を第一に考え、人生をローハーに尽くした。堅実な手法と独創的な発想をうまく織り交ぜることのできる人で、彼の政策は多くの臣民の支持を得た。閉鎖的で、他国とは頑として交流を持たなかったローハーに、貿易という新しい風を呼びこんだのもレザフである。狭い国土での自給自足には限度があり、飢死とまではいかなくとも、ローハー臣民の生活には常に栄養失調の気がつきまとっていたが、海を挟んだ隣国バレリアと交流を持ち、緑豊かなその国の野菜類（「果実の国」という別名を持つだけあり、バレリア産の果物は格別に甘く、野菜さえほろりと甘いのだ）を輸入することで、臣民らの健康は格段に増した。そんな、名実ともに名君とされるレザフが、なぜ。どうしてユリシアやレジア――こちらは武具の精製に長けた国と聞く――などと物騒な国と、好んで関わろうとするのか。
グレイスは静かに立ちあがった。右手には寝室に続く扉があるのだが、しかしグレイスの足はマ逆に向かう。例の隠し小部屋だ。柔らかな羽根布団は魅力的だったが、なによりもまず気持ちを落ちつけたかった。小部屋にはもう愉快な老人はいないが、彼の残り香をかぐだけで、すこしは胸騒ぎも治まろう。
そっと扉を開けると、いつもと変わらぬ匂いがした。古びた本の匂い。結局出したままにしてあった御伽話を手にとる。他に、机には一枚の羊皮紙と、先をコルクに刺した針がある。グレイスは目を閉じ、埃が舞うのも構わず空気を吸いこんだ。ニンフの匂いだ。知的で、よく澄んだ、それでいてどこか優しい――。
「肺に埃は悪いぞ、皇帝陛下」
砂の詰まった布袋で、後頭部を激しく殴られたかのような衝撃がグレイスを襲う。あまりのことに息が詰まり、グレイスの喉は妙な音をたてた。
矢の勢いでふり返ると、狭い小部屋のちょうど対面する壁の前に、なんと少年が立っている。グレイスは青い目をこれ以上なく見開い

た。いつ入ってきたというのだ。いや、どうやって入ってきたというのだ、この少年は。扉はグレイスのすぐ左手にある。グレイスに気取られぬまま、少年がここを通れたはずがない。

何者、なぜ、どうやって。糾したいことが多すぎて、グレイスは一言も喋れない。ただ、力の抜けた手から本が滑り落ちた。

――まずい。

不用意に音をたてるわけにはいかない。怪しんだ従者たちが、きっと部屋に飛びこんでくる。そして姿のみえないグレイスを危ぶみ、この隠し小部屋をみつけ、その用途を詮索にかかるだろう。ニンフの存在が明るみになれば、芋蔓式に、彼が手引きしたユアの逃走劇さえ周囲の知るところとなりかねないのだ。しかし、分かっているのに体が動かない。

本の落下するさまが、その影を追うように、ひとつひとつ、くっきりした絵で目に飛びこんでくる。グレイスは覚悟を決めた。

しかし、本はついに落ちなかった。止まったのだ、落下の最中で。グレイスは思わず後ずさりした。あり得ない。本が浮く話など、これまでついぞ聞いたことがない。しかし、いくら目を凝らしても本は中空に留まっている。春先の蝶がはばたくように、ページがひらひらと揺れている。

「本を乱雑に扱うのはいけないな。これは手に触れられる歴史だ。大切にしなければ」

少年はくつくつと喉を鳴らした。笑っているらしい。

らしい、というのは彼の容貌があまりに奇抜なせいで、少年は妙な被り物ですっかり頭を覆ってしまっているのだ。大きなそれは、頭だけでなく顔のほとんども隠してしまっている。グレイスが窺えるのは、尖った顎がわずかばかり。

「貴様は……」

呟くグレイスの顔の横を、本がふよりふよりと通りすぎていく。まるで意思を持った生き物のように。息を荒げながら目で追っていると、本は勝手にぱたりと閉じて、元のように机の上に落ちついた。

本がすっかり動きを止めてしまうと、グレイスは再び少年に向き直る。
「貴様、奇術師か」
すると少年は鼻を鳴らした。
「お疲れだな、グレイス皇帝。忙劇にお頭(つむ)が弱ったか」
グレイスの眉がぴくりと動く。
「どういうことだ」
「いまのは奇術などではない。歴とした魔法だ。魔法はきみたちの専売特許だろう」
そう言ってまた喉を鳴らす。
「馬鹿な。魔法とは精霊を使役して起こす奇跡の業。貴様のそれは、詠唱もおろか、精霊は姿さえみせなかったではないか」
魔法とは精霊を使役して起こす奇跡の業。少年はグレイスの言葉をそのままくり返した。
「まるで本の一文を読み上げているようだな。その記憶力には拍手を送りたいが、本が全てを語っているとは限らんよ」
「では本が語らぬところを教えてもらおう」
「おや、洒落も多少いける口か。まあいい。つまり、精霊の姿を隠したままに、その力を駆使することも可能ではある、ということだよ。もっとも、ぼく以外にそんな離れ業をなせる者がいるとは思えんがね」
少年は自分の足元を指さした。
「さっきのは風の精霊ウィンディーネの力だ。彼女と僕はあまりに長く時間を共にしたせいで、もはや同化していてな。強いて言うなら、彼女は僕の足元にいる」
グレイスはその言葉に誘われて少年の指さす先をみた。穴の開いたローブ――この季節の着物としては薄すぎる代物だ――からは細い足が二本突き出ていて、息をのむばかりに白い。裸足なのに土に汚れているようすなど欠片もなくて、しかもおまけに――浮いている。

「馬鹿な……」
「その台詞は二度目だ」
そう言う少年の体は、今度こそはっきりと浮きあがった。目の錯覚かと思っていたグレイスは、あまりのことに口をあんぐりと開けてしまう。少年はまるでみえない糸に吊るされたかのようだ。そこに床があるのだと言わんばかりの確かさで、なにもない宙に立つ。
「ぼくとウィンディーネは常に共にいる。扉は開かれたままなのだ。これで分かったか？　それとも頬を捻ってやらねば信じられんか？」
いまやグレイスと少年の目線はまっすぐに等しい。被り物の下に、刀で入れた切れ目のような口があるのをグレイスはみた。
「しかし、まさか……」
精霊たちは白の世界に住む。使役するためにはその扉（白の扉とも呼ばれる）を開き、我々の世に召喚せねばならない――。本の一文がグレイスの脳裏をかすめる。白の世界にせよ扉にせよ、実際にそれが存在するわけではなく、もちろん現に手で押し開けるわけもなく、ただ便宜上そう呼ばれるだけなのだがそれはともかく。扉が開いたままだと？　そんな芸当は、
「出来るはずがない。開くだけでも神経を使う扉と聞く。無理をすれば精霊化の危険も孕むのに」
貴様のような子どもが、という言葉は呑みこんだ。なぜだろう。この少年、見た目は十かそこらにみえるのに、そんな段階の生き物ではないと思えてしまうのだ。
「精霊化、か。ぼくには無縁の言葉だな。いくら弱れど、ぼくの魂は精霊に食われるほど軟（やわ）ではない」
「貴様」
グレイスは唇を舐めた。すっかり渇いている。
「何者だ」
順番がすっかり前後している。仕方ない。あまりに信じがたいことが立て続けに起こったのだ。
「そうだな。お近づきの第一歩として名乗っておこう。ぼくはリヒ

ィ＝ミヒィ。永遠の子どもだ。そしてきっときみのいい友人になる」
グレイスの眉間が曇る。友人だと？
「人は自分の欲求を満たす者の傍にいたがるものだ。御世辞、御追従。強欲な者の傍には、口を開けばこればかりの佞人が多いだろう。――養母の顔が浮かんだか？　無理もない。まあ、なんにせよきみが求めるのはこの類ではないな。知識であろう」
「知識……」
「そうだ。きみは知りたいはずだ。ユア＝A＝フロイアントに惹かれる理由、ダレス皇太后の謎かけにも似た言葉の意味、皇尊の遺徳の陰にちらつく不穏な姿の真実を」
グレイスの鼓動が速くなる。――知りたい。リヒィ＝ミヒィはにやりと笑った。
「ぼくはその答えを教えてやれる。きみに真実をみせてやれる。どうだ、ぼくたちはいい友人になれるとは思わないか」
グレイスは迷った。心がふたつに割れている。
リヒィ＝ミヒィの誘惑は甘い。グレイスはすべてを知りたいと思う。しかし、ここで頷いてはいけないと、一方で心はそう叫ぶのだ。得体の知れないこの少年は、信を置くにはあまりにも危険すぎる気がしてならない。
グレイスが黙っていると、リヒィ＝ミヒィはすとりと降りた。裾の切れたローブが風をはらむ。しかし、それでも足はわずかに浮いているのだ。床には触れていない。道理で足がそう綺麗なわけだ。
「まあいい。一度に多くがありすぎて、きみも混乱しているのだろう。きみが落ちついた頃にまた来よう。そのときはきっと友人として迎えてくれるな？」
リヒィ＝ミヒィの声は笑っている。グレイスを試しているかのようだ。グレイスはじっと堪えた。視線は決して逸らさず、その力も緩めず、隙なくリヒィ＝ミヒィを睨みつける。体の芯が震えていたが、それでもグレイスは耐えた。
リヒィ＝ミヒィはその挑戦的な目つきを気にいったらしい。愉快

そうに喉を鳴らした。そして、グレイスがひとつ息をした一瞬のうちに、跡形もなく消えてしまった。グレイスはうろたえて視線を巡らせる。すると、頭上のほうで何かがキィと音をたてて、みれば天窓が開いている。

グレイスは呆けたように窓をみつめた。空が赤い。太陽はじきに沈むだろう。気づけば口はカラカラに渇いていて、目についた水差しが強くグレイスの胸を打った。ニンフとすごした最後の夜、彼はグレイスのためにこれで水を注いでくれた。

「情に囚われて、真実を見逃すことでもあればどうなさる！」

まるで昨日聞いたかのような鮮やかさで、ニンフの声が蘇る。きっぱりと立ちあがり、グレイスは隠し小部屋を後にした。

6　血と笑顔

あまりに強く打つ鼓動のせいで、ゼンの体が前後に揺れる。じっとりと噴きだした汗が、尖った顎を伝って落ちていく。

ゼンは木の棒を握り直した。空いたもう片方の手で、背後にいるユアのローブをぎゅっと掴む。恐ろしいのだ。仲間の存在を確かめることで、なんとか気を持たせておかないと、小便を漏らしてしまいそうになる。ユアにはそんな心情などまるで汲み取れないらしく、うん？　と相も変わらず間抜けな声を出している。

一体どうすればいいだろう。隙なく視線を配りながら、ゼンは考えを巡らせた。どう切り抜ける、この窮状を。一方へと心を決めて、棒を振り回しながら駆けぬけるか。迷路にだって出口はある。ここでじっと睨みあっているよりも、運を頼って走り回った方がずっといい。

ゼンは馬鹿だ。間抜けだ。ここにきて、未だ老人の裏切りがあったことに気づいていない。老人の言葉を信じ、化け鼠のあの威勢は上っ面だけだと、こちらが強気に出れば、きっと彼らは逃げ散るに違いないと、まだそう思っているのだ。ゼンは大のお人好しであった。というよりも、素直すぎたのだ。強にぶつかっては強になり、柔に触れては柔となる。弱きをみれば放っておけなかったし、笑顔には笑顔で答えて然りだと思っている。そういう男だ。傍からみれば粗雑で乱暴で、教養の足りない子どもと思われるかもしれないが、何事にも真正面から向き合い応対するという点で、彼は類稀なる善人といえる。

しかし、善き心の持ち主だからといって、それこそ粗雑で乱暴極まりない化け鼠共が、彼を愛するはずがない。奴らは肉食なのだ。何十という数の鼠にふたりの少年。きっと、これまでの人生を顧みる暇さえ与えないうちに、彼らは骨まで食われるのだろう。

「おい」

ゼンはユアに囁いた。唇が震える。
「いいか、あっちだ。俺の右手にある穴、ちょっとばかり大きいやつ。あそこに向かって走るぞ。俺の合図で、同時によ」
「どうして？」
どうして、とくるか。ゼンはため息をついた。
「当然だろうが、逃げるのよ。棒を振り回しながら、出口までさ」
「それは――」
無理じゃないかなあ。ユアがそう呟くのを、ゼンは聞くことができなかった。それより早く、どんと強く押し倒されていたからだ。

第六話　血と笑顔

ぬかるむ地面に背を打ちつけ、ゼンは情けない声をあげた。泥はマントに容赦なく絡みつく。
なにしやがる、と叫ぼうとした口は、しかし半端に開いたままで固まった。目の前に化け鼠が迫っていたのだ。その間に滑りこんでいるのは、わずかにユアの剣一本のみ。ゼンは悲鳴さえあげられない。抜き身の刃と黄色い門歯が競り合っている。よほど力が均衡しているのか、剣も門歯も小刻みに震えて。
「サルマン」
ゼンはただただユアの背中をみつめる。うん？　とやる声とはまるで違う響きの、しかし間違いなくユアの声だ。彼はいま、いったいどういう顔をしているのだろう。
と、不意に頬を撫でる風が起こったかと思うと、信じられないことが起きた。ユアの持つ刃が、突然炎に包まれたのだ。均衡は破れた。化け鼠は金切り声をあげ、燃え盛る赤から逃れようと飛び退いたのだ。
「なんだっ！？」
ゼンが叫ぶ。慌てて跳ね起きると、泥が辺りにべちゃりと散った。
答えを求めたわけではなかったのだが、ユアは不用心にもふり返

ると、にへらと笑ってこう言った。魔法だよ。サルマン、火の精霊。ユアの言葉に誘われるように、ふわりと姿を現した者がいる。女だ。白い肌に、燃え立つような赤い髪。そして彼女は浮いている。ゼンは今度こそ固まった。

炎は獣の天敵だ。化け鼠共は、突然噴きあがった火の手に混乱し、ギィギィと耳障りな鳴き声をあげた。しかしそれで獲物を諦め切れるわけではない。自ら巣穴に転がりこんできたご馳走なのだ。小さな炎に怯え、みすみす見逃すようなことがあってはならない。

「ううん、それじゃおれたちまで焦げちゃう。だめだよ」

突然、ユアが突拍子もないことを言った。焦げるだって？　会話のようだが、いったい誰と話しているというのだろう。ユアがサルマンと呼ぶ火の精霊は、一言も喋っていないというのに。

「うん？　うん、いいよ。ラジネを呼ぶ」

「おい、ユア」

うん？　とユアがふり向く。ゼンはこの状況も忘れて思わず訊ねた。あんた、誰と話してるっていうの。

「精霊と」

ユアはにっこり笑う。いや、あんた一人で喋ってるじゃない。ゼンは続けてそう言いたかったが、静かなユアの声がそれを遮った。ラジネ、と今度は言うのだ。

次はなにが起こるのかとゼンが身構えると、刹那、唐突に周囲の地面が盛り上がった。ゼンとユアが立つ場所を避けるようにして、広間の床が、ぐんぐんと天井目指して上っていく。これはいったいどうしたことだ？

「ななっ、なんだよ、なんなんだよ！」

ユアはやっぱりふり返って律儀に答えた。だから、魔法だよ、と。

「ラジネは地の精霊なの。地面と友だち」

転げ落ちんばかりに見開かれたゼンの目は、壁に開いたたくさんの穴に釘付けだ。せり上がる地面から逃れようと、たくさんの化け鼠が通路へと逃げこむのだが、そこに飛びこんでしまったが最後、

穴は慈悲もなく埋め潰されてしまうのだ。ヂュッという身が竦むような声が聞こえた。化け鼠はどうやら巣穴もろとも押し潰されてしまったらしい。ゼンの肌は粟と立った。

みれば、崩れていく壁の傍を、緑の衣をたなびかせて舞っている人影がある。こちらは褐色の肌に黒の髪と、ゼンを含めた多くの召使階級の者によくみられるいでたちであるが、ただ、この世の者とは思えないほどに美しい。先に老人の屋敷で見かけた美人など、もはや木偶かと思ってしまうほどだ。

ユアは燃える剣を捨て、代わりに腰の鞘を引きぬくと、あたかも弓を構えるように左手にそれを持った。そして右手をそっと添え、力をこめて引き絞る――と、なにも掴んでいないユアの右手から光の筋が生まれた。ゼンは息を呑む。炎の矢だ。

逃げ遅れた化け鼠たちは、迫る炎に慌てふためく。既に壁の穴は残さず潰れており、ラジネは中空にふわりと腰を落ち着けている。逃げ惑う化け鼠を眺めているのだが、彼女が指をちょいと動かすたびに、またも地面が動くのだ。ゼンは立っていられなくなってその場に伏せった。

大地の震動は化け鼠の退路を阻み、炎の矢は次々に化け鼠の体を貫いていく。地面にぴたりと体を押しつけたまま、ゼンはぎゅっと目を閉じた。木の棒を投げ捨て、耳を塞ぐ。そうしないと、化け鼠共の断末魔の悲鳴が、鼓膜にきんと刺さるのだ。ゼンはもはや生きた心地もしなかった。

「ゼン」

肩を掴まれ、ゼンは涙に濡れた声で叫んだ。

「ゼン、おれだよ、ユアだよ。ねえ、ここから出ようよ」

ゼンがようやく顔をあげると、そこには困ったように笑うユアの顔があった。もともと垂れた眉がさらに垂れ下がり、なんとも情けない顔になっている。あの殺戮の直後とはとても思えない表情だ。

「出るったって……」

ゼンは自分が泣いていることにさえ気づかない。茫然とユアを見

あげている。
「どこから。逃げ道も糞も、もうねえよ」
「あたらしく穴を開ければいいんじゃないの」
ユアは高い天井を指さした。とたん、盤石の重みを感じさせる天井が、まるで芋がスープに蕩けるように、簡単に崩れていくではないか。ゼンは足をふらつかせて立ちあがった。やがて割れ目から光が差しこむ。土煙が差しこむ陽光に照らされる。
ゼンは足もとが妙に振動していることに気づいた。上ばかり見あげていた顔を、ふと足元に向ける。地面はぐいぐいと持ち上げられていた。まるで新芽が下から突き上げてくるように、地上への割れ目に向かって伸びていく。
「すげえ……」
ゼンは感嘆の声を漏らした。魔法。話には聞いたことがあったが、実際目にするのはこれが初めてだ。奇跡の業と言われていたが、まさかこれほどのものとは。
驚愕がゼンを包んでいると、ふと、地面の動きが止まった。ゼンは目が覚めたかのように、ひとつ大きく身震いした。
ふり返ると、なんとユアが倒れている。ゼンは短い悲鳴をあげて、足音荒くユアに駆けよった。うつ伏せに横たわるユアの体を抱きかかえる。
――血。
ユアの口元には、はっとするほど赤い血がべっとりとついていた。みれば、元より白みのユアの顔が、いまや羊皮紙のような色をしている。息は荒く、額には大粒の汗が浮かんでいる。しっかりしろ、とゼンが揺すると、ユアは力なく咳をした。そのはずみに新しい血がこぽりと口の端から零れる。こけた頬を伝い、血はゼンの手を濡らした。温かい。
「ユア、おい、ユア！」
返事はない。ぜえぜえと、喉で妙な音を鳴らすばかりだ。
ゼンはうろたえて辺りを見回した。ふたりの精霊は消えている。

助けになる者はいない。割れ目まではあと少し。手を伸ばせば、指先が地上の空気に触れられるほどだ。精いっぱい高く跳び上がれば、そのまま脱出することも可能だろうが、とてもユアを抱えて飛べる距離ではない。彼は病的に細いとはいえ、背丈において、ゼンよりもずっと優れているのだ。だからといって、まさかユアを置いていけるはずがない。先にはいけ好かない妙ちきりん、次には似た境遇で育った哀れむべき少年、そしていまや、彼はゼンの命の恩人である。放っておけるわけがない。

焦げくさい臭いが鼻をつく。炎の矢に射られた化け鼠が、壁に張りつけられて燃えているのだ。うかうかしていては、この足場さえ火に呑まれかねない。

ゼンはきっと空を睨んだ。ゼンにはユアのような魔法の力などない。なにもできないのだ、彼は。速く走れるわけでも、流麗に剣を扱えるわけでも、巨岩を抱えられるわけでもない。ゼンは棒で地面を削り、土くれを集めて一カ所にまとめてぺたぺた固めた。まるで幼児がやるお城造りだ。できあがったのはちんけな小山である。しかしゼンは諦めない。地面のあちらを、こちらを削り、小山を慈しむように育てていく……。

ユアが目を細く開けたとき、ゼンは暮れ始めた空を睨んで膝を抱えていた。唇を横一文字に引き結んでいる。ユアが身じろぎすると、ゆっくりとふり返った。

「……俺たちは騙されたんだ」

掠れた声だった。ユアは目をぱちくりとしている。

ゼンの後方には、倒木や岩の類で塞がれた巣穴の入り口の跡があった。明らかに人為的な仕業である。あの糞老いぼれ、はなから俺たちを殺す気だったんだ。ゼンは苦々しげに呟いた。

「あんた、病気かい」

ユアはゆっくりと首をふる。

「呪い」

物騒な言葉だ。しかし、ユアは妙に涼しい顔をしている。
「罰なの」
「罰」
「おれ、悪いことしたから」
「……そっか」
納得せざるを得ない。これ以上追及しても、きっとユアは答えられないだろう。ゼンは困ったような笑みを浮かべた。呪いというのがどういうものか、魔法と縁のない人生を歩んできたゼンには、これっぽっちも分からない。ただ、弱々しく咳きこむユアの、苦悶に満ちたあの表情。たくさんの命が弱りに弱り、役目を終えた火種のように消えてしまうところを、ゼンはもう何度目にしただろう。そんな彼だから分かってしまう。きっと、ユアはもう――。
「まあ、ありがとよ。ユアのお蔭で助かった。あんたすごいよ。悪いことをしたんだって、でも、俺にとって恩人であることには変わりない」
ユアは嬉しそうに笑った。風がさわさわと吹いていく。
さて、どうしたもんかねえ。ゼンは少しとぼけた口ぶりで言った。
「もしも俺たちが生きて逃げだしたことを知ったら、あの耄碌野郎、どんな顔するかね。……それにしても、ああ。俺の小粒金……」
こつぶきん。口に出しても、あまりその価値の大きさが湧いてこない。銅貨の数に置き換えて初めて、ああ大金なのだと実感できる。淋しいことに、ゼンにとって金という値は、夢ですら触り得ないような幻なのだ。
戻ったところで、まさか報酬が払われるはずはあるまい。それどころか、元よりこちらに害意のあった人間だ、これは仕損じたと再び襲ってこないとも限らない。こんな仕打ちを受けたと吹聴したところで、なにを馬鹿なと笑われるのはきっとゼンのほうだ。そういうものだ。財力が物を言う世界である。金持ちの言うことはいつも正しく、その日暮らしの乞食の言葉は嘘と臭気に侵されている、というわけだ。戻るだけ無駄足だろう。ゼンはため息をつき、首を振

って大金の誘惑を追いやった。考えるだけ惨めだ。
「だめだよ」
しかし、よそへ行こうというゼンの言葉は、ユアにあっさり打ち消された。
「だめだよ。嘘つきはよくない。悪いやつには、お仕置きしないと」
お仕置き。ゼンはユアの言葉をくり返してみる。なんとも子どもじみた、愉快な響きではないか。
考えているうちに、なんだか心が妙に陽気になってきた。そうか、お仕置きか。うん、悪くない。あの老人は、きっと言葉で責めてもうんともすんともならないだろう。理で押し詰めようが、情に訴えようが、お金様の権力には敵わない。しかし、ちょっとしたお仕置きを与えてやる分にはどうだろう。すまんかったと謝ってくれるとは思えないが、それでも少しばかりあの老いぼれを驚かせるには足りるかもしれない。
「よし。いっちょ、懲らしめてやるとするかね」
ぽんと膝を打って立ちあがり、ふたりは連れ立って山を降りはじめた。向かうは老獪なじじいの屋敷である。

美しい女をそばに侍らせ、老人は夕餉を楽しんでいた。食卓を彩る話題は、もちろん例の浮浪者ふたり組である。見た目も中身もちぐはぐなこの組み合わせは、哀れ、今頃は化け鼠の腹に収まっていることだろう。
「いや、傑作じゃった。みたか？　あのチビ助の舞いあがりよう」
女は口元に手をあてて、ふふ、と上品に笑う。
「どうせ死ぬならと最後にいい思いをさせてやったらつけ上がりおって。石鹸を、丸々ひとつ溶かしてしまいおった。しかも湯桶の汚いこと！　彼奴が歩いた床は後から滑(ぬめ)りおるわ」
「もう。そこいらで止めておしまいになって。せっかくのお酒が臭くなりますわ」
「んん！　違いない！」

老人は上機嫌に手を打って笑った。顔をすっかり青くした下男が、転びながら走りこんできたのはこのときだ。
「たっ、大変でございます！　かの乞食風情が生きて――ああっ！」
注進も半ばに、下男は恐怖に顔を歪めて逃げていく。老人は椅子を鳴らして立ちあがり、女共がきゃっと叫んで飛び退いた。果物を盛った盆が落ち、床に当たってけたたましい音をたてる。その衝撃で房からもげた葡萄の実がひとつ、ころりと転がって汚いズックのそばに止まった。腰をかがめ、ゼンはそれを拾い上げる。そしてふっとひとつ息を吹きかけると、なんでもないようにそれを口に放り込んだ。
「いい御身分だね糞じじい。いたいけな少年を鼠に食わせ、自分は優雅に晩餐か」
「貴様ら……」
老人の声はわなわなと震えている。恐怖のせいか、それとも怒りのせいか。
甘いなあ、さすがバレリアの果実などと目を細めなどするゼンの後ろから、のそりのそりとユアが来る。彼のそばには目を惹きつける美女がひとり控えており、なんと彼女は空を飛んでいるのだ。おお、と老人は声を漏らした。白い肌に凛々と輝く青の瞳。あれはフレスコ画にみる水の精霊、アキュロスではないか。召使共は、彼女に怯えて逃げ去ったのだ。
ゼンとしてはいい気分である。まさに虎の威を借る狐というやつ。ユアを――正しくはアキュロスという精霊を――従えて歩くだけで、人々はぎゃっと叫んで逃げ出すのだから。慌てるあまり、青銅の像にぶつかってしまう者などもいて、ゼンはせいぜい声をあげて笑った。これほど面白いことなどない。
「ユア様も仰せられておるぞ。嘘つきはよくない！」
「よくない！」
舌っ足らずにユアが繰り返し、アキュロスはころころと身を震わせて笑った。

老人はバレリアでは高い部類の教育を受けている。魔法に関する造詣も深い。全部で六の種類に分けられる精霊だが、水の精霊アキュロスは、火の精霊サルマンと並んで好戦的と聞く。さらに戦向きの精霊として、闇の精霊ヴァネッサが挙げられるが、彼女は超越種と呼ばれる特別な存在で謎が深く、老人も彼女についてまではよく知らない。とにかく、アキュロスが戦い好きであることに違いはなく、丸腰の老人など――そもそも魔力を持たない人間などは、彼女の前では塵芥にも等しいのだ。

しかしゼンとしては、老人に腹をたてこそすれ、害そうなどという気はさらさらない。やられたらやり返す、というのは当然の公式にみえるが、そうはいかないのが人間の持つ良心のなせるところ。それに、見よ。老人の、衣を通してさえ分かるあの震えようを。失禁すらしかねない。好々爺の皮はとうに剥げ、醜い強欲の姿も、いまとなっては崩れ落ちてしまっている。残っているのは恐竦ばかり。

「なあユア、もう満足かい。え？」

そう言ってゼンがふり返るのと、鋭い水の柱が伸びていくのは同時だった。え、とゼンは間抜けな声をあげる。刹那遅れて、老人の悲痛な声が広間に響いた。

「ぎゃあああああぁ！　腕が、腕があっ！」

ぎこちなく老人をみやると、彼の右肩には、槍にもみえる水の棒が深々と突き刺さっているではないか。そうとみるうちに水は飛散し、一瞬ばかりみえた黒い穴からは血が噴き出した。堪らず老人は膝から崩れ落ちる。ゼンはぺたりと座りこんだ。その横を、ユアの足がすっと通りすぎようとする。ゼンは思わずその足にかじりついた。抱くようにして押しとどめる。

「うん？」

ユアはいつもの調子だ。ゼンの身が竦む。しかし負けじと声を奮い立たせる。

「なにするのさ！　こんなの駄目だ！　あんた、あいつを殺す気かい！」

ユアはぱちくりと瞬きする。そして必死の形相をみおろし、首を傾げてこう言うのだ。
「うん」
「駄目だ！　それだけは駄目だ！」
ゼンは必至だ。馬鹿な。たとえ殺されかけたからとて、ではこちらも殺しますかとなっていいはずがない。ユアの足をしっかと捉まえ、駄目だ、駄目だとくり返す。ユアは口を尖らせた。
「なんで。みんなおれに言ったじゃない。悪いやつ殺せって。言ったじゃない、お仕置きだって。いけないいけない！　悪いやつ殺せ！　悪いやつ殺せ！」
ゼンはぎょっとしてユアをみた。ユアは、笑っている。
「いけないいけない！　殺せ！　悪いやつ殺せ！」
ゼンの鼓膜がぴぃんと張る。なぜ、こいつは。こいつの笑い声は、なぜ――こんなにも、澄んでいる？
「悪いやつ殺せ！　悪いやつ殺せ！　いけないいけない！　悪いやつ殺せ！」
笑いながら膝を折り、からかうような調子で、ユアはゼンの肩を叩いた。叩きながら、悪いやつ悪いやつ、とくり返す。ゼンは震える口を半ば開いたまま、なにも言うことができない。
逃げ散る召使共の足音も聞こえなくなり、広間には老人の荒い息遣いだけが満ちた。アキュロスが楽しそうに天井の辺りを舞っている。ユアは相変わらずゼンの肩を叩いていた。悪いやつ、悪いやつ。
血がじんじんと流れていく音を、ゼンは耳の奥で聞いた。薄絹に隠れる国の追放者、恐るべき魔力。吐き出された赤い血に、背中に刻まれた呪いの薔薇。そして、柔らかくあどけない笑顔とこの狂態……。
ユア＝A＝フロイアント。彼はいったい、何者なのか？

7　大国の干渉

ローハーの空に、こんこんと景気のいい音が響く。故人を悼み、その立像を作っているのだ。技師たちが集う作業場に、一度だけグレイスはねぎらいに訪れたことがある。作業はちょうど、土で築いた礎の上に布を巻きつけ、それを漆で固めているところであった。木を打つ音が聞こえるということは、ついに心木を差しこむ段階まできたのだろう。ならば完成は目前だ。

脱活乾漆の像以外にも、石像ひとつに塑像がふたつ、合計で四の像が目下制作の途中にある。中でも石のものは大作で、完成後、これは一〇一ある石段の脇に立てられるのだ。皇一族の長は、生きては皇城の中にあって臣民を守り、死しては皇城の外に立って国を守る。歴代皇帝を模った三十五の石柱が、厳かな顔つきで石段の両脇に立っているのをみると、ああ自分もいずれここに並ぶのか、とグレイスは妙な気持ちになる。かつての家族、二十二年も前に捨てさせられた彼の生家は、この石段を登ることさえ気が引けてしまう“C”階級の庭師家系であったというのに。

つと大臣が寄ってきて、グレイスに新しい書類を捧げた。手に触れただけで、他よりもずっと高級な羊皮紙らしいと分かるような代物だ。どんな重要事項かと心もち緊張しながら目を通してみると、行儀よく並ぶのは全て人名らしい。それも女ばかり。逐一添えられた説明文を見るに、どれも名家のご淑女である。グレイスはわずかに顔をしかめた。

――なるほど、そういうことか。つまり、この中から伴侶を選びなさい、というわけだ。

「どうかなされましたか？」

やや間延びした声でヤマが言う。愚鈍な子だが、これでなかなか人の表情をみる能力には長けているらしい。わずかにみせたグレイスのほろ苦い顔に、目敏くも彼は気づいたようなのだ。ぷっくりと

した指をもぞもぞと動かし、どうにも心配そうな義弟をみていると、グレイスはふと肩の力が抜けるのを感じた。本当に、芯からいい子に育ったものだ。父を亡くして最も純粋に悲しんでいるのは彼であろうに、健気に義兄を気遣いなどする。よし。ここはひとつ、その顔を綻ばせてやろうか。

「ヤマ。そろそろ私はおまえの義姉様(あねさま)を選んでやらねばならぬらしいぞ」

「義姉様を？　私の？」

ヤマは目をぱちくりさせている。てんで意味を解していないらしい。皇帝の戯れに少しばかり苦々しい顔をして、大臣が代わりにこう言った。

「グレイス皇帝には、近く、皇后となられる御婦人を御迎えしていただきたく……」

聞いてヤマの顔がぱっと赤らんだ。ようようその意味を知り、一人前に恥じらっているのだ。

グレイスの口元が優しく弧を描いたが、しかしそれも一瞬のことで、書類に目を戻した彼の顔は再び険しさを増してしまう。どれも劣らぬ名家の中で、錚々たる存在感を放つ名をふたつ見つけたのだ。ユナ・イーシアにミーガン・ウォッシュ。彼女らはそれぞれ、ユリシアとレジアの王女ではないか。

第七話　大国の干渉

新皇帝が誕生してから五日が経つ。例の通過儀礼を終え、グレイスの仕事もようよう通常の波に乗ったというところ。

やはりまだ若い皇帝では不安だったとみえ、皇尊突然の御崩御にうろたえきっていた大臣らも、ここにきてようやく平常に復した。くだらない雑務も滞りなく済ませるグレイスの手腕を、深く認めたということもある。立ち直りの早さにかけて秀でていたのは、皇城内よりむしろ外の方。臣民たちは戴冠式、および葬儀の日でも、む

しろ今こそ商売時とばかりに忙しく立ち回っていたのだから。国中の花が空を舞うかとばかりのあり様だったから、きっと花売りの娘は嬉しい悲鳴をあげたに違いない。やはり彼らは頑丈である。今日も城下町は賑やかで、訃報を嘆く声よりも、新しい世代の到来を楽しんでいるようにみえる。その気配を感じると、不肖グレイスの身も引き締まるというもの。彼らに負けてはおれぬ、と。

しかしどうしても気が進まない事もある。今日の会食などがそれだ。太陽が中天に近づくにつれ、グレイスの憂鬱は厚貌のうちに募っていく。しかしそれをおくびにも出さないあたり、皇帝の肩書も板についてきた証拠である。

じきにユリシアとレジアの両国王が船でやってくる。皇城の上階から東に目をこらせば、よく晴れている今日だから、立つ靄の向こうに緑黛（りょくたい）の影がみえる。盤石たるバレリアの山々である。そのずっと裾のほう、一層靄がたちこめるあたりに、きっと青や赤の旗が揺れていることだろう。国王らの率いる大船団だ。こちらに渡るのを、いまかいまかと待ち構えているに違いない。

「警吏らを呼び集めねばなるまい」

グレイスは東の海に目を凝らしたまま言う。は、と従者が答え、グレイスは鷹揚な動作で彼に向き直った。

「義母上には私から申し上げよう。おまえは警吏長と右大臣にこれを伝えよ」

「はっ」

紋章に手を添えるだけの略式の礼をし、従者は踵を返して廊下を歩いていく。グレイスは彼とは逆の方向に足を向けた。ひとりの従者がそれに続く。ダレスの元に向かわねば。

「できませぬ」

ダレスはきっぱりと言い張った。口を真横に引き結び、てこでも方針は変えぬといった態度だ。

「御気持ちはよく分かります。しかし、ああも警吏らが走り回るの

を見ましては、両国王も困惑されましょう。当国の貴族らならばともかく、彼らはよく事情を知らぬ外の人ですから」
「ではよくよく御説明なされませ。皇帝殺しの罪人が、いまも生きて逃げ回っておるのです。御見苦しくて申し訳御座いませんが、それを捕らえねば亡き人の御霊も静まりませんでしょうから、と」
十分に予測できた展開とはいえ、グレイスの吐息に疲れが滲むのも仕方ない。
ダレスはひとり躍起になっている。というのはユアの逮捕に。もはや彼がレザフを弑したことに疑いの余地はない。かの夜を限りに、彼は忽然と姿を消してしまったからだ。これでは自ら罪を認めるようなものである。
ダレスが彼に固執する理由を、漠然とだがグレイスは察している。彼女は面白くないのだ、全てがグレイスの追い風のようなこの状況が。
実際にそうなのだが、ダレスはグレイスがユア逃走の手引きをしたものと睨んでいる。そう思うのは彼女の直観と偏見だろう。証拠はない。こそりと彼女が調べさせてみると、やはり典医はグレイスの不調を証言したし、当日、彼が眠る前にその寝室を訪れて薬を処方したことまで明言した。これはグレイスの供述にぴたりと嵌まっている。又、これも内密に探らせたことだが、その夜にローハーから消えてしまった者は、ユアひとりしかいなかった。これがダレスには納得いかない。あのユアが、人殺しの法しか教わらずに育ったユアが、ひとりで逃げ得るはずがない。そもそも、人を殺めて罪と思わない彼だから、逃げようと考えることすらあり得ないのだ。すると彼を舟に誘い、さあおいでとバレリアまで運んでやった人物がいるはずだが、何度調べさせても減った臣民は彼以外おらぬ。ではユアを届けた後にまたローハーへ引き返したか、となるわけだが、夜にまぎれて往復できるほど二国間の海は狭くない。
そう。ダレスはユアが国外に逃亡したものと考えている。実際にそれしかあるまい。五日間、警吏に衛兵までも雇って国中を虱潰し

に捜させているものの、ユアの足跡をみつけた者すらいないのだ。ローハーは狭い島国である。まだ捜索の目が届いていないのは嶮山に洞窟がせいぜいで、いくらユアといえど、魂吸いの呪いを背負ったままに、力ある魔族らが住まうとされるその秘境で生き延びられるとは思えない。となれば疑念は当然隣国バレリアに向けられるのだが、この線も、先の考え方でいくとやはりあり得ないのだ。

まさに生殺しの体である。犯人は明らかなのに、間違えようがないのに、彼の逃亡先をこれと断言できないのだ。断言できないから追及の手を広げられずにいる。貿易を始めたとはいえ、ローハーはまだまだ閉鎖的な国で、その国の大警吏団が突如バレリアに現れたとなれば、混乱を招くのは必定である。大臣らはそれを恐れ、バレリアにユアの姿を探せと騒ぐ皇太后を、押しとどめるのに必死である。ダレスとしては、綿で首を閉められるに似た心地であろう。

「罪人は必ず捕らえさせましょう。そうしなければ、私も義父上に合わせる顔が御座いません。しかし、どうかこの半日だけは」

グレイスがそう言った時である。空をわずかに震わせる音がして、例の大船団がどうやら笛を吹き鳴らしているらしい。前進の合図だ。はっとしてグレイスはダレスをみやる。ダレスは、窓からみえる東の海をみていた。

「……いいでしょう」

グレイスはほっと息をつく。

「ただし条件があります」

「なんでしょう」

「国王様方が御帰りになられましたら、バレリアに警吏を送る御許しを戴きたいのです」

グレイスの筋肉が緊張に強張る。

彼らが帰るのは明日と聞く。夕の会食の後皇城に眠り、半日ほどローハーをみて回っていくのだと言う。グレイスとしてはあまりいい気がしないが、しかし、ユリシア国王たっての願いである。仕方もない。全世界にあるただ三つの魔法学校のうち、二つを有するユ

リシア国だが、残る一つ、最強と噂される学校であるが、これがローハーにあるのだ。皇城に次ぎ、贅の極みを集めたこの魔法学校を、ぜひ覗いてみたくなるのは当然だろう。かの百隻戦争で鬼神のごとき活躍をみせた魔導師たちは、どれもみなこの学び舎を卒業した者ばかりである。

鉄の表情を崩さないまま、グレイスはユアとニンフに思いを馳せる。彼らはうまく逃げのびただろうか。警吏の追及すら届かぬような、ずっと遠くへ逃れられただろうか。

「……分かりました」

いずれ来ると思っていたことだ。

「では、両国王が帰られます際、その護衛の体で警吏らをつけましょう。彼らを見送った後、そのままバレリアの地に留まって罪人を探させます」

「いい考えですわ。そうすれば彼らもこれは厚遇と喜びましょうし。さすがは切れ味鋭い青冥皇嗣――いえ、青冥皇帝でしたわね。これは失礼いたしました」

グレイスはにこと笑う。なんとでも言うがいい。

ユリシア国王アルバルト・イーシア、レジア国王ファン・ウォッシュを乗せた船が港につくと、そこには一種異様な空気が流れた。先帝レザフの敬弔と、新帝グレイスの祝福を謳ってやってきた一団である。無碍にするわけにいかず、グレイスは華やかな音楽隊の演奏をもってこれを迎えさせた。花売りの娘共は、これまた売り時とこぞって港に詰めかけたが、しかし思うほどの成果は得られなかった。花を買い求めるのは、せいぜい十人に一人といったところだ。馬車に乗りこむ国王陛下らに、嬉しそうに花を投げるのは若い少年少女ぐらいで、老人らはただ淀んだ目で彼らをみつめるばかり。中には涙をこぼす者すらいる。かの戦争は、決して過去の出来事ではないのだ。

皇城前の石段は、六大国の王といえどもその足で歩かねばならな

い。三十五の石柱に睨まれながら、アルバルトとファンは威厳に胸を膨らませて石段を登る。
　レジア国王ファン・ウォッシュは、既に六十も近いというところ、昔は豊かだったろう黒髪は、いまやすっかり干上がっている。白いものもちらちら覗き、とても格好のつく容貌ではないが、洒落た帽子でうまくそれを隠している。ひぃふうと息をつきながら石段を登る彼の隣で、しかしユリシア国王アルバルト・イーシアは涼しい顔だ。それもそのはず、壮年のレザフを思わせる逞しい彼は、御歳四十三。肩幅広く、胸は隆起し、腕は職人のそれかと目を見張るほどに太くて強い。足腰もしっかりしたもので、ローハーの嶮山すら登ってしまいそうだ。彼こそが後に、その堂々たる体躯に秘めた黒い渦のような強欲を吐き、このエルヴァニア世界を揺るがす戦争を捲き起こすのだが――もちろん今のグレイスがそれを知る由もない。玉座に構え、悠然たる足取りでこちらに向かう彼をじっと見つめている。彼もまたグレイスの瞳を正面からみて逸らさない。グレイスはふと、彼にただならぬ影を感じた。えもいわれぬ恐ろしさに身が竦む。
「ユリシア国王アルバルト・イーシア様、並び、レジア国王ファン・ウォッシュ様、御着き！」
　声の好い侍臣が大声で呼ばわる。グレイスは思わず立った。立ってから、しまった、と思った。あくまで強固な姿勢であろうと決めていたのに、両国王の――いや、もはやファンの姿はグレイスの目に入っていない。アルバルト・イーシアが放つ緊張感が、グレイスをして震えさせたのだ。いくら優秀で通っていても、やはり彼はまだ若い。十代で王として起ったアルバルトである、彼からみれば、グレイスなど世間も知らぬ子ウサギにすぎない。よく灼けた顔に浮かんだ笑みは、傍から見れば国王らしからぬ人懐っこさのようにも取れるだろうが、グレイスにしてみれば、己の負けを宣告されたかのような心地であった。事実、彼はこのとき負けたのだ。
「こうして御会いできる日を、どれほど待ち望みましたことか」

鷹揚に頭をさげてアルバルトが言う。グレイスはその言葉の真意を窺う。
「この度は御即位、誠におめでとうございます。先帝の御霊にはよく御休みになられ……」
お決まりの挨拶である。ファンも彼に続いて口上を述べた。気難しげな顔の老国王は、その声までも鉄のように強張っており、ああやはり職人が集う国の長、といった風情であった。
玉座の間での初見が済み、場所を大広間に移して会食となると、アルバルトは公的な顔をかなぐり捨て、いやに親しくグレイスに話しかけてきた。
「いや、噂には聞いておりましたが、まこと背丈に優れていらっしゃる。ああ、本当にいい男振りだ」
手放しに褒めるものだから、グレイスとしては面映ゆい。おべっかは彼の嫌うところだ。しかし、豪放なアルバルトの声には厭味がない。聞いていると、むしろ清々しいほどだ。
一方のファンはどうにも無口で、その場の誰もが申し訳程度にしか食事に手をつけないのをよそに、彼はひとり黙々と魚料理を口に運んでいる。ユリシアとバレリア、それから商賈（しょうか）の国シリスに囲まれた、レジアは内陸国なのだ。海を知らない。新鮮な魚は、そう頻繁に食べられるものではないのだろう。
「純白のローブも御似合いですな。その若さで御立派なことだ。……レザフ殿も、碧雲のかなたで御目を細めておられることでしょう」
「義父（ちち）とは御懇意でしたか」
思わずグレイスは口を挟む。殿、などと幾分気軽に呼び合える仲までとは。ええ、とアルバルトは頷いた。
「公的な場で御会いしたことは御座いませんが――分かるでしょう――内々には三度、四度と親しく卓を囲ませていただきましたこともありますれば」
含みある言い方に、グレイスは内心苛々としてしまう。なにが「分かるでしょう」だ。百隻戦争の遺恨を恐れてこそこそ隠れなけれ

ばならなかったのなら、その原因はユリシアにある。
　グレイスのくすぶりになどまるで気づいていないのか、それともすっかり分かった上で素知らぬふりをしているのか、アルバルトは相も変わらず上機嫌だ。ダレスはその様子をじっとみつめている。その視線を感じたのか、アルバルトは彼女をふり向くとにっこり笑った。それからグレイスに少し体を寄せた。
「しかし、優れたその御姿ですと、女共が放ってはおきますまい」
　きた、とグレイスは気を引き締める。婚約者の話である。
「そろそろあなたも御身を固められる頃合い。我が身を捧げんというご淑女は多いでしょう」
「さあ、どうでしょうか」
　グレイスは空とぼけてみせる。
「御謙遜を。娘はユナと申すのですが、花を愛する我が長女です、あなたの御噂を聞くにつけ、頬を上気させてもっと続きをとせがむのですよ」
　グレイスは曖昧に笑ってみせる。ダレスの視線がより強く向けられるのを感じる。
「今度のことにも、ぜひわたくしも御連れください、と言ってなかなか聞きませんでした。まったく、我が儘な娘ではありますが、それも偏にあなたを想う余りかと思えばしおらしくて」
「ユリシアの女性は皆雪のように白い肌を御持ちと聞きます。雪の女王ユーリスの名残でしょうか」
　うまくはぐらかしながらグレイスはデカンターを手で示す。豪奢な飾りつけのガラス瓶は、毒のように赤い酒で満たされている。
「バレリアから取り寄せている代物です。あの国の果実は甘い。どうぞご賞味ください」
「いや、これはあり難い」
　グレイスの目配せを受けて、給仕女が恭しくデカンターを捧げる。アルバルトは杯を受けながら、しかし目だけはじっとグレイスをみて離さない。グレイスは微笑を浮かべたまま、とろとろと注がれる

葡萄酒をみていた。

どうなさるおつもりですの。

長旅御苦労です、と準備してあった豪勢な客室へと二人の国王を案内してしまうと、ダレスは待ち切れないというように切り出した。

「なにがです」

「とぼけなさるおつもり？　無論、あなた様の御結婚についてのお話です。見ましたでしょう。アルバルト様は、御息女をあなた様に娶わせたい御気持ちで一杯のようですよ」

「そのようですね」

「他人事ですか。彼は夕の会食でもきっとその話題に触れられましょう。どうなさいますの」

「私は……」

珍しく歯切れの悪い口ぶりだ。

グレイスとて分かっている。彼も二十八、もう所帯を持っておかしくない年頃だ。むしろ、十代での婚礼も珍しくない皇一族の中では、随分と遅れていると言ってもいい。なにせ、皇尊が平生の内どうあっても彼の結婚を認めなかったのだ。先帝が稀に洩らす我が儘には大臣らも慣れっこだったが、この身勝手さにだけは手を焼いた。子離れがどうなどという問題ではない。それでもどうにか黙っていたのは、彼が五十を過ぎても血気盛んで、まだまだ国政は彼に委ねられると思われたからだ。このような形で終幕を迎えることになるなど、過去に誰が予見しただろう。

「考えられません。他国の人間を妻とすることなど。ましてユリシアとくれば」

昼間、港についたユリシア国王を迎える臣民らの様子は、既にグレイスの耳にも入っている。昔の諍いは忘れて手を取り合いましょう、と言われたところで、その手にはまだ血の臭いが染みついているのだ。

ふん、とダレスは鼻を鳴らした。彼女の目に余るこの不機嫌は一

体どうしたことだろう。
「亡き夫には」
とダレスは言う。苦い物を口に入れた時のような顔で。
「皇后にはぜひユナ・イーシアを、とのお言葉でした。もっとも、御自分の御目が黒いうちはならぬとの仰せでしたけれど」
吐き捨てるなり、ダレスは尻を振り振り退出してしまった。慌てて彼女の従者がそれを追う。呆気に取られるグレイスに頭を下げることも忘れない。
グレイスはそれに頷いてやることもできなかった。ダレスの言葉が耳に刺さっている。妻に、ユナ・イーシアを？　ユリシアの人間を迎え入れよと、本当に義父はそう言ったのか？
グレイスはますます混乱する。もはや彼が信じてきたことなどとうに崩れている。善き皇帝、頼れる君主、全臣民の父。かの名君レザフ＝E＝ロウの姿は幻か？　ユリシアと近づき何とするつもりなのか。また、ユリシア側もそれを強く望んでいるらしいことは先の会食でもよく分かった。ローハーとユリシア。片や一騎当千の魔導師を抱える孤立の島国、片や広大な領土に優れた文明を誇る北の大国である。この二つが結びつくとなれば……戦争。
――まさか。
グレイスは心の中で義父に呼びかける。義父上、あなた様は一体なにを御考えです。
「きみは知りたいはずだ。皇尊の遺徳の影にちらつく不穏な姿の真実を」
二日前、グレイス以外知り得ないはずの隠し小部屋で、リヒィ＝ミヒィという謎の少年が言ったことを思い出す。彼はあれきりまるで姿をみせない。
「『永遠の子ども』……」
「はっ？」
グレイスはわずかに眉をしかめる。
「不思議な少年と話す――夢をみた。彼は永遠の子どもと名乗った

のだが、この言葉に聞き覚えはないか」
「永遠の子ども、ですか。申し訳ながら、私は」
「そうか」
浮かない顔の皇帝に、従者はさっと気を利かせる。
「よく当たると噂の夢占い師を知っております。すぐに呼びつけ、彼に占わせてはいかがでしょう」
「占い師か」
それで生計を立てるとなれば、長く生き、多くの知識を有する者だろう。リヒィ＝ミヒィについて何か知っているやもしれぬ。
「もしも凶夢であった場合に、大ごととなると面倒だ。内々にいたせ。城に呼んではならぬ。信用のおける召使を一人選んで彼の元に向かわせよ」
「はっ」
「彼にも他言無用と念押しすることを忘れるな」
「かしこまりました」
だが、彼のこの計らいは、結局無駄足となるのである。というのもこの夜、再びあの少年が彼の元を訪れ、その口で自らについて語ることになるわけで……。

8　確信に満つ

昼になりきらないうちは、まだ人の足が道を蹴り散らしていないために、埃っぽさはあまりない。

空気の粒が静かな顔でしんと佇んでいる朝に、闇色のマントは大層目立つ。元よりユアに身を隠そうなんていう気はさらさらないらしく、マントをぴたりと体に巻きつけ、すいよすいよと眠っている。罪を犯したという意識はないらしい。長い睫毛が行儀よく並んでいる。色の薄い、ぽってりとした唇。朝日を受けて白に輝く細い髪が、半ば開いた口のそばに垂れている。

そのあどけない寝顔をみるにつけ、ゼンの胸は妙に騒ぐ。一夜明けた今だって、老人の悲鳴はゼンの耳にこびりついて離れない――。

「いたい」

ユアがむっつりとした声をあげる。

「いたいってば」

今度は言うだけでなくゼンの手を払いなどする。

そうされて初めて気づいたことに、二人はとうに老人の屋敷を飛び出していた。立っているのは住宅街の外である。結構な距離を走ったのだろう、息があがり、肩が激しく上下している。

ユアは手首をさすっている。白くて細いユアの手首。常に空腹ではありながら、細々と働き回るゼンとは痩せの種類がちくと違う。不健康そのものの体つきだ。そこにゼンの手形が赤黒く浮き上がっている。みるにまあ痛々しい。

「悪ぃ」

ゼンは浮ついた声で謝る。荒い息はまだ収まらない。狂ったように跳ねる心臓は、なにも我武者羅に駆け回ったためだけではあるまい。

そこまで思いだしてから、ふと、心配になってゼンは横たわるユアの口元に手を近づけてみた。湿った息がかかる。だらしなく弛ん

だ唇の端に、血の跡が残っているのが目に痛い。彼は昨夜、また少なくない量の血を吐いたのだ。そしてそのまま昏々と眠って覚めない。

ゼンの体がぶるりと震える。寒さのせいではない。昨夜、痛みに絶叫する老人をみつけるユアの目ときたら――いつもと、まるで変わりなかったのだ。笑いながらゼンをみる目と、まるで。青い目は秋晴れの空のように澄みわたり、曇ることがない。それがゼンには恐ろしかった。

――こいつは本物の人殺しだ。

かの老人のように、いずれ消える命ならばと、己の欲望のために使ってやろうと企む“ちょんぼり”の人殺しとは訳が違う。何者かによって殺人の法を教えられ、それでいて死の持つ意味も恐怖はてんで知らず、血の臭いにも怯まない、根っからの人殺し。

そのとき、ゼンの腹が情けない音をたてた。ぐ、ぐぅ、と本当に切なそうな声で鳴く。

「おい、ちったぁ場の深刻さをわきまえねえか」

呆れながら腹を叩くと、ぐうう、と再び返事がくる。

ゼンは一直線の眉を垂れ下げた。仕方ない。恐怖で人はめったに死なないが、空腹では死んじまう。生への執着、そして美味の渇望に、乾杯。

第八話　確信に満つ

飯屋は朝から活気に満ち満ちている。食堂よりは割安で、なおかつ量はたっぷりときているから、住み込みでない奉公人やら工人やらでごった返すのだ。騒がしい店内に入っても、小さなゼンは給仕女の目には入らないのか、いや彼女の気を引いたところで「いらっしゃいませ」などとくすぐったいお愛想が向けられることはあるまい。

どのテーブルも同じ話題で賑わっている。どうやら、隣の港町に

それは素晴らしい貴人が来ているらしいのだ。なんでもローハーに渡る途中だそうで、この朝にも港を発たんという様子らしいが、出発を待つその船団が、これまた目が転がり落ちそうなほどの規模だという。

「なんてったって、おめぇ、ユリーシャとレージャの王様ってんだぜぇ！」

がらがら声の男が言う。馬鹿野郎、と隣の男がすかさず彼の頭をぽかりとやった。

「ユリシアとレジア、だ。何度言ったら分かんだ、この足りない脳みそはよぅ」

ぎゃははと下品な笑い声があがる。それに負けじと大きな声で、でっぷりと太った給仕女が「オムライス一丁！」とやった。

ああいい空気、とゼンはにやついた。屋敷での豪勢な食事は夢のように美味しく、またそのもてなしぶりは後にも先にもない丁寧なものだったが、やはり自分の生きる場所はここにある、とゼンは思う。それからきょろきょろと店内を見回し、カウンターにわずかながら隙間があるのをみつけると、タタンと軽い足取りでそこへ駆けあがった。尻のでかい男が座る椅子の縁に、足を引っ掛けて飛び乗るのだ。千切ったパンをひたすら口に放り込んでいた男は、ぎょっとして手を止めた。

「おい皆！　ちょっと聞いとくれ！　身も震えあがる化け鼠との大決戦。立ち向かうは恐れを知らぬ美麗の剣士と、背が高いばかりで生っ白い細身の男。巣穴に飛びこんだ二人を、腹を空かせた獰猛な獣が囲む。さあさ結末やいかに！」

ぱんぱんと手を叩き、ゼンは大声でがなりたてる。

聞くに鮮やかな口上ではないか。これには理由があって、一度だけだが、ゼンは旅の雑技団の口上役者をしたことがある。もちろん、一団には専属の口上役者がついているのだが、その時ばかりは性質の悪い熱を出して喉を嗄らしてしまい、急きょゼンに役目が回ってきたというわけだ。呼び込みの芸はその場で習ったのだが、ゼンは

元より口がたつ。それもあって雑技団の舞台は客の大入りだったというわけで。
突然聞こえてきた呼ばわりに、賑やかだった空気が一瞬だけ静まり、視線がゼンに集中したかと思った――のも束の間、ばしりという大きな音が響いてゼンは悲鳴をあげた。
「あんた！　そこは御立ち台じゃない、食べ物様が並ぶ場所だよ！　さっさと降りな！」
例の給仕女である。おそらく店主のおかみだろう。カウンターの奥で野菜を炒める店主は枯れ木のように細いというのに、彼女は丸太のように逞しい。その彼女に嫌というほど張られたのだから、ゼンの尻には、きっと手形がくっきりついたに違いない。
「いってぇ！　なにしやがる岩女！」
「おや言ったね！　もう一発食らいたいかい！」
五本のかっと開き、おかみはゼンを睨みつける。そう言われてはいどうぞと尻を差し出すのは物好きの仕業。ゼンはさっさとカウンターから飛び降り、体の小ささを生かして溢れる客の合間を縫って逃げ出した。しかし店の外まで行ってしまう訳ではない。せっかく一声ぶったのだ。客の興味はゼンに向けられている。これを手放す謂れはない。
「おい兄ちゃん。なかなか巧い語り口だなぁ。続きも聞かせろよ」
「おうおう。国王様の話よりも面白いならの話だがよぅ！」
ゼンはするりと男らのテーブルに入りこんだ。おかみはちらと彼をみたようだが、しかしもう追ってはこなかった。口より先に手が出るが、しかし火が消えるのもまた早い。おかみはバレリア国民の典型ともいえる類の女らしい。それになにより忙しいのだ。“小さい”ことに構っていられる余裕はない。
「へへ。面白いに決まってら。ドキドキ、ハラハラ、ワクワク、全部含めて一気にポン、ってなもんよ。聞くだけで尻がソワソワ、やる気も勇気もグイグイ上がる、聞いて損はない冒険譚だわな」
ゼンは拳を握って力説する。男の好奇心は刺激される一方だ。

「えぇ分かった！　おい、おかみ！　ここにカレーひとつ！」
「じゃあ俺はビールだ、ビールも一杯この御方に持ってきてやってくれ！」
ちょっと待った、とゼンは慌てる。
「酒なんかいらねえや。腹の足しにもなりやしねえ。それより――肉団子。肉団子のスープを作ってくれないか、ほうれん草をたっぷり入れてさ」
――おれ、この丸っこいの好き！
ゼンの脳裏をふとよぎる記憶。老人の屋敷で御馳走をふるまわれた際、嬉々としてスプーンで皿を叩くユアの言葉である。きんきんという耳障りな音に顔をしかめて見てみると、“丸っこいの”というのはどうやら肉団子らしい。厚いステーキや新鮮な魚に比べるといささか見劣りするスープだったが、ユアはにこにことそればかり食べていたっけ。

ユアを置いていくことなど簡単にできたはずだ。なにしろ彼は眠りこけている。ゼンが飯屋からそのまま帰らず、ふいと足を別の道に向けたところで気づかなかっただろう。なのにゼンは戻った。木の陰に隠すように引っぱっていったユアの元に、すっかり湯気の消えたスープの皿を抱えて。
俺もつくづく馬鹿だなあ、とゼンは呟く。うっすら感じてはいたけれど、俺って案外お人好しなのかね、と。
ユアが普通の――つまり、ごく一般的な生活をしているということ。朝起き、まっとうな仕事をして夜眠る、という――人間でないことは分かっている。気高く美しい精霊たち、ゼンと化け鼠の間に一瞬で割って入る身のこなし、それに戦慄の悲鳴にも動じないあの不敵さ。
もしかすると、彼は暗殺を稼業とする者なのかもしれない。人を殺せと教えられ、下される命令の是非を疑いもしない、それは非情で忠実な。

そうと考えれば説明がつく。なぜ、ローハーを追われたのか。それに、彼が言っていた「悪いことをしたから」受けたという呪いの罰。血を吐くほどに恐ろしい呪いだ、そうそうのことで与えられる罰ではあるまい。だが、彼がした“悪いこと”が、決して犯してはならない殺人だったとしたら。命令に従わなくなったから国を追い出されたのだとしたら。たくさんの疑問がぴんと音をたてて繋がる。あの圧倒的な力も、食堂の店主の凄みも恐れなかった気楽さも、すべてはおぞましい修羅場を知っているからこそではないのか？　そんな生を送ってきたからではないのか？

だとしたら、とゼンは考える。

あいつはきっと――俺も殺す。きっかけさえあれば。

ユアはどうやら目を覚ましたらしい。寝ころびながら、肘をついて上半身だけを起こしている。木の側（がわ）を向いているから顔はみえない。ゼンは小さくため息をつく。普通じゃないと分かっているのに、彼の異常を恐れているのに、どうしてこう戻ってきちまうかねぇ。

「おい」

呼びかけると、ユアは矢のような勢いでふり向いた。いつものあの、どこか抜けたような動きとはまるで別物である。ゼンはちょっと怯んだ。

ユアは恐ろしく張り詰めた顔をしていた。小さく揺れる目を見開き、唇を噛みしめて。

「め、飯だけど……」

ゼンはすっかり気押されてしまう。勝手に作り上げた暗殺者としてのユアの像が、しだいにくっきりと輪郭を現していく。が、次の瞬間、ユアは崩れるようにふにゃりと笑った。それだけでゼンの恐怖は蕩けてしまう。

「どこに行っちゃったかと思った」

鈴のような声だ。いつの間にか止まっていた足を、ゼンは再び前に進める。

「……飯を調達してたんだよ。ほら、あんたの分」
「うわっ、丸っこいのだ」
手放しに喜ぶユアは、子犬のように無垢だ。しかし、嬉しそうに綻ぶのと同じ口が、昨夜は呪いの言葉を叫んでいたのだ。いけないいけない、悪いやつ殺せ。ゼンはもう一度体を震わせた。それに気づいたのか、ユアが皿から顔を上げた。そして肉団子を頬張ったままの口で、にっこりと笑ってみせたのだ。
――あんた、一体何者なわけ。
喉まで出かかった疑問は、そのまま呑みこむことにした。答えを聞くのが怖かったのだ。仮にユアが「おれは人殺しです」と認めたところで、ではさようならと逃げられるか？　――いや、とゼンは首を振る。できない、できそうにない。こんなにもか弱く、世間を知らず、先の命の短さを思わせる少年を、ひとりで放っておける訳がない。目を離せばゲボリと血を吐くのだ。それに何より、彼は命の恩人である。
ユアはきっと、俺を殺す。きっかけさえ与えれば。
やはり躊躇いなく、もしかすると、唇に薄い笑みさえ浮かべて。
――それは駄目だ。
ゼンはぎゅっと口を引き締める。それは駄目だ、絶対に。人を殺しちゃいけない。ユアを、このままにしておいてはいけない。
その時、遠くの方から、高々と吹き鳴らされる笛の音が聞こえてきた。鼓膜を突き刺す高い音に、ゼンは思わず耳を塞いだ。ユアは持っていた木のスプーンを取り落とす。これがスープの入った皿でなくてよかった、とゼンは思う。身ぶり手ぶりの大演説で手に入れた食事だ。もし彼がこぼそうものなら、昨夜の恐ろしい出来事など忘れ、その頭に拳骨を見舞っていたかもしれない。
ゼンにはちょっとした甘い考えがあった。こいつは、ユアは、どうやら俺に少しばかり懐いているらしい。あの老人のように明らかな害意さえみせなければ、俺には手を出さないかもしれない。そんな考えがあったから、ゼンはここに戻ってきたともいえる。人懐っ

こい笑みを向けられると、この少年も自分にとっては脅威でないと思ってしまうのだ。やはり、彼は過ぎたお人好しであった。

さてどうしよう、と町をぶらつきながら考える。朝餉は食った。で、昼餉はどうする？

四六時中食事のことを考えなければならないのが日暮らしの性だ。ある時は飯をかっ込みながら、もう次の飯はどうと考えなければならない。常に飢えと背中合わせの生活なのだ。

隣を歩くユアは暢気なものだ。どうやら癖らしい鼻歌をうたいながら、通りすぎる人をちらちら窺いなどしている。雑踏が珍しいのか、どうも先ほどから落ちつかない。

「よう、ユア」

「うん？」

「あんた、体は平気かよ。その、血を吐いたりとかはさ」

ユアはからりと笑う。

「今はへーき」

「本当かよ」

「うん。分かるの」

午時（ひるどき）の商店街は賑やかだ。誰もが目的をもって歩いている。ぶらぶらと当てもない風でいるのは、ゼンたち“なんでも屋”くらいのものだ。彼らは滅多に自分から動かない。飢えが募ればそうもするだろうが、こちらから声をかければ、どうしても足元を見られがちになる。多少の差にみえるが、声を掛けるのと掛けられるのでは、その後の展開に大きな違いが出てくるのだ。長い日暮らし生活のお蔭で、その辺りの知識は豊富なゼンである。

時々耳に飛びこんでくる噂話を聞いてみると、どうやら先ほどの大音響、かの貴人率いる船団があげた、出発の合図であるという。あれは敬弔の訪いではないか、と推測する知識人がいた。どの船も黒の旗を掲げていたらしいのだ。それを聞くとゼンの大きな鼻がひくひく動いた。ほう、儲け話のにおいがする。

「おうおう、あんたの言うとおり、ありゃ敬弔でローハーに向かう船だよ。あんた、よく分かったねぇ」
　ちんちくりんの坊主にあんた呼ばわりされた男は、幾分むっとした様子である。しかしゼンの口ぶりには気になる部分があったらしい。引っぱられるようにして向き直る。
「その言いようだと、おまえさん、先にそのことを知っていたらしいね。その上、あたしよりもちっとばかし詳しいことだって御存知のようだが」
「知ってるともさ。俺はね、ローハーの誰が死んじまったかっての も知ってるよ」
「そりゃ、あたしにだって察しはつくさ。大方皇帝さんだろうよ。あれだけの大船団だ、そうじゃなきゃ割に合わない」
　男が着るゆったりとしたローブは、この国の学者が好む衣服だ。ゼンはにやりと笑みを浮かべる。人間というのは、これがどうして、賢ければ賢いほど知識に貪欲であるらしい。これは釣れたも同然の獲物である。
「そうそう、皇帝さ。あんた流石だ、切れる頭をお持ちのようだね」
　学者風情の眉間が曇る。なんだ、この少年は。みたところ薄汚い乞食のようだが、これでなかなかローハーについて詳しいらしい。
　ゼンは知る由もないが、この男、ローハーを長年調べている学者である。しかし、探し歩けど見つけられる事実など知れたもので、精々が百隻戦争の断片的な記録くらいのものだ。“秘鑰の国”とはよく言った二つ名である。闇に包まれたかの国は、このエルヴァニア世界を揺るがす鍵を握っているような気がしてならない。謎に惹かれるのが学者の性分。そういう理由で、ローハーを研究材料とする学者は多い。この男もそのうちの一人だ。
「俺はね」
　と、ゼンは声を潜めた。つられる男は顔を近づける。ユアまで迫ってきたものだから邪魔で仕方ない。ゼンは彼の頭をぐいと後ろに押しやった。

「ローハーにちょっとした……知り合いがいる」
「なんと！」
ゼンのにやり笑いが深みを増す。ユアが余計なことを言わないよう、その胸をしっかと押しとどめながら、ゼンは止めの一言を放った。
「へへ。秘密だよ、旦那。その知り合いから聞いた話、あんたにだけは教えてやってもいいぜ」
かくしてゼンは昼餉の獲得に成功したのである。

「おい、いいな」
押し殺した声で言うと、やはりユアはいつもの「うん？」である。
「この先、あんたは何も言うなよ。全部俺に任せておけばいい。分かったか？」
「なにも言わない」
「そう。にこにこ飯を食ってりゃいい。了解？」
「りょーかい」
二人は男の家に招かれた。どうあっても他人に聞かれたくない、という男の申し出のためである。万が一同志に聞かれることがあってはとの思いからだろう。ゼンとしては食事にありつけさえすればいいのだが。
屋敷とまではいかずとも、割かし大きな家である。そうもあろう。勉学はゆとりのある者が興じる娯楽のようなものだ。ゼンなど学校に行った例がない。
もう一度小声で、黙ってろよ、とユアに念を押してから、ゼンは大芝居をぶち始めた。つまり、嘘八百を並べたわけだ。
ユアから得られた知識など僅かなもの。元より彼に頼るつもりなどなかった。皇帝の名前がレザフということだけは事実だが、それ以外はてんで口から出まかせだ。しかし手八丁口八丁のゼンが喋ると、これが確からしく聞こえるのだから恐れ入る。学者はほうほうと頷き、目を好奇心に輝かせて聞き入るから、ゼンとしても真実を

話している気になってくる。それで余計に弁が立つ。ユアはただ、おとなしく言いつけを守ってにこにこしていた。
「それでな、このレザフ皇帝、散々悪事を働いた末に御臨終ときたわけだが、これがただの死に方じゃねぇのよ」
「ほう。どんな」
話の真偽など確かめようもないのだ。どうせなら華々しくて話題性のある嘘をと、ゼンはことさらに息まいた。
「これがね、なんと暗殺だったわけ。夜の内に――ぐさりよ」
学者は息を呑んで唇を噛む。
「それも酷い殺され方だったらしくてね。骨は折られるわ肉は裂かれるわ、そりゃ目も当てられないあり様だったらしいよ。おまけに恐ろしいのは、レザフを殺したのは彼の懐刀の――」
そこまで一気にまくしたてると、ゼンはぴたと口を閉ざした。学者は一声も漏らさずにその続きを待つ。
黙りこんだゼンの心臓が、とくりと渇いた音をたてた。適当にでっち上げた話だったが、いやまてよ、と心が制止をかける。何か、何かが強く引っかかる。記憶が、ユアの言葉が蘇る。
――呪い。
ゼンはごくりと唾を飲む。温い汗が頬を伝うのを感じる。
――罰なの。おれ、悪いことしたから。
“悪いこと”。
ゼンは心の中で呟いた。
――おまけに恐ろしいのは、レザフを殺したのは彼の懐刀の――ユア＝A＝フロイアント。皇帝殺しの禁忌を犯したかの少年は、呪いの罰をその身に受けて……。
欠けて離れた取っ手とカップが、ぴたりと合わさったかのような感覚。ゼンの中で、なにかが確実に繋がった瞬間だった。溜飲が下がる――いや、そんな清々しいものではない。むしろ、余計胸が騒いで落ち着かない……これは。
もう一度唾を飲みこみ、パンを咀嚼するユアに目を向ける。ゼン

の視線にも気づかず、ユアはコーンの粒を執拗に追い回している。
たどたどしい扱いのユアのフォークは、鮮やかな黄色をしたその粒を、うまく捉えてやることができない。
なんなのだ、あまり勿体ぶるなと先をねだる男の声が、ゼンには随分遠くに聞こえた。

9　スージーの裏切り

忠実な彼の従者が一通の便りを差しだしたのはその二日後、ユリシア並びレジアの両国王が帰途についた翌日のことだった。

「足の頑健な者を選んで遣(や)りましたが」

御待たせしまして申し訳ございません、と詫びる従者に、グレイスは手をあげて応えた。かの夢占い師、どうも辺境の地に住んでいるらしく、往復するには二日でも大仕事だっただろう。

皇帝が赤い椅子に腰かけるのをみると、従者は深く頭を下げて部屋を辞した。なにを言わずとも察してくれる彼の気配りがありがたい。グレイスよりも二十ばかり年上のこの男は、彼が皇一族に迎え入れられた当初から傍に付き添っている。まだ年若いがその勤めの実績をみるに、従者長(ずさちょう)の職に就いても不思議ではなく、現にグレイス自身がそれを示唆したこともあったが、彼は頑としてこの出世話を呑まなかった。そうしてしまうと、グレイスの傍で働けなくなるからだと言う。ニンフがいなくなってしまった今、つい彼に父親の像をグレイスが求めてしまうのは、きっと仕方がないことだ。時折気づいて情けなくなることに、彼はいつでも父親を探していた。

安物の羊皮紙は端が汚れ、手にとるだけでも占い師の庵の粗末さが想像できようというもの。そこに並ぶ文字は角々と縮こまり、きっと偏屈者らしいことが覗えた。

書付にはこうある。

『　永遠の子ども　其リヒィ＝ミヒィ也　』

グレイスは驚いた。逸る目で続きを読む。

『　永遠の子ども　其リヒィ＝ミヒィ也

天に仇なす　呪われた御子

四亜種を侍らせ　その力　地を揺るがす

火の絶対者にして　最強の魔導師也　』

四亜種。火、水、地、風の精霊を指す言葉である。この他に光と

闇の精霊もいるのだが、この二種は他と一線を画す力を有し、彼女らを使役できるのはそれぞれただ一人であることから、四亜種とは別に超越種と呼ばれて恐れられている。グレイスはその先を読んだ。

『　夢の吉凶　判別つけ難し
　　彼　輪廻の外より見守る者
　　彼笑う時　光降り注ぎ
　　又　彼笑う時　闇が現れる　』

言葉はそれで終いだった。グレイスは羊皮紙を折りたたみ、美しく切り整えられたガラスの皿にそれを乗せると、おもむろに火を点けた。思わぬ御馳走に、火は嬉々として齧り付く。

揺れる小さな炎を見ながら、グレイスは昨夜のことを思いだしていた。

第九話　スージーの裏切り

「やあ。ごきげんよう」

前触れなく呼びかけられ、グレイスの肩は跳ねあがった。これほど不躾な挨拶があるだろうか。

ふり返れば、やはりというべきか、リヒィ＝ミヒィが立っていた。私室の窓には鍵がしっかと掛けられていたはずだが、どうやら彼にとってはさして問題でもないらしい。この寒い中でも裸足で平然としている彼の後ろで、開いた窓がキィキィと音をたてている。

「どうだ、少しは落ち着いたか。それとも息をつく暇もないか？」

ん？　と言いながら、すくうようにグレイスを窺う。グレイスはじり、と半歩下がった。

「ふふ。それはともかく、あのことについては考えてくれているよな。僕たちの今後の関係について？」

友人としてどう、という話である。グレイスの心臓は暴れ回っていたが、しかしそれは毛ほども感じさせない鉄の顔。ただ、耳の後ろがじっとりと汗ばむのはどうしようもない。

「断じて――貴様を友人とは呼べぬ」
リヒィ＝ミヒィの笑みが強張る。吹きすさぶ雪風に凍りついたかのようだ。
ただし、とグレイスは言葉を繋いだ。
「取引相手としてなら認めてやろう。個の情はなく、互いの利益のためだけに成り立つ関係として」
「ふむ」
リヒィ＝ミヒィは感心したように唸った。うまい具合に逃げるな、と。
「だが僕の分け前はどうなる。きみに知識を与えたとして、その見返りは？」
グレイスは言葉に詰まる。不気味を体現したかのようなこの少年が、金やそれに準ずる贅沢品で動くようには思えない。ならば何を望むと言う。地位か？　名声か？　それとも生贄、か？　――あり得る。
「おいおい、馬鹿な想像はよせ。僕は血なまぐさい魔族とは違うぞ」
考えを読まれた。早く息を呑みすぎたため、グレイスの喉がひゅうと音をたてる。
「貴様、悟りか」
「今度は言うことまで馬鹿とくれば。僕は魔族とは違うと言った口も閉じぬうちだぞ。悟りの力を持つのは、優れた魔族の内でもごく一部。魔に造詣の深い国の長がそれを知らぬとは言わせんよ。しっかりしたまえ、青冥皇帝」
グレイスの眉が苦みに歪む。口の利きようは老獪な大年増を思わせるが、姿形は間違いなく幼い子どものそれだ。言いくるめられると、それで余計いい気がしない。リヒィ＝ミヒィはくっくと喉を鳴らした。薄い唇がめくれ上がり、尖った、小さな歯が並んでいるのが覗く。
「まあいい。取引相手としておくか。僕はただ、暇潰しができればそれでいいのだから」

「暇潰し」
「言葉の綾だ。気を悪くしたなら言い直そう。僕はただ、面白いことが見られればそれでよい。――これで満足かな」
「どちらでも構わん。さっさと本題に入れ」
鉛のように重い体を椅子に沈ませ、グレイスは長々とため息をついた。酒のせいではない。ダレスの予見どおり、アルバルト王は夕の会食でも縁談話をしつこく勧めてき、それですっかり参ってしまったのだ。
「ほう。リヒィ＝ミヒィを前にして、こうも尊大であれる人間などそうはおらんよ。きみはなかなか見込みがあるな。ただ、老婆心で言っておくと、それも過ぎれば早死にするぞ」
額に当てた指の隙間から、グレイスはじっと彼を睨みつける。笑う口元は相変わらずのようだ。
リヒィ＝ミヒィはふわりと浮きあがる。グレイスはもう驚かない。これをみるのは二度目のことだ。しかしやはり体は強張る。彼の緊張に気づいているのかどうか、リヒィ＝ミヒィはテーブルの上にちんまりと腰かけた。短い足を所在なさげに揺らす。
「さてさて、なにから話そう。やはり優先すべきはきみの御父上についてかな」
グレイスは身を起こした。膝に拳を乗せ、背を伸ばす。
「ローハー国第三十六代皇帝、レザフ＝E＝ロウか。彼は哀れな人間だったな。一世一代の恋は実らず、強欲女に付き纏われ、果ては子飼いの犬に食い殺されるとは。哀れを通り越し、もはや滑稽」
「口を慎め。あの御方は臣民を心から愛する、立派な皇帝であられた」
「だが近頃はその像も揺れて心許ない。そうだろう？」
言われてグレイスは黙りこんだ。その通りだ。彼の抱いていた名君たる養父の姿は、いまや靄の向こうに霞んでしまっている。
「はっきり言おう。彼はユリシアと結びたがっていた。それも、かなり性急に」

「……」
ユリシア。かつてローハーを多くの血で染め上げた、憎き大国。
「強大な力を持つ国同士が手を取り合う。その先に何があるかはきみにだって分かるだろう」
「――戦争」
「ご名答。それも、エルヴァニア全土を巻き込む大きなものだ。楯鉾の国レジアも抱えようという辺り、ユリシアも抜け目ない。これが敵となるか味方となるかで、戦士の質は変わるからな」
「しかし、なぜ……。彼が臣民を想う姿は偽りであったと言うのか？　賊魁（ぞっかい）と添えば、我が臣民らも戦いに向かわねばならぬことは必至」
そこだよ、グレイス皇帝、とリヒィ＝ミヒィは言った。
「彼はむしろ、臣民を愛するあまり戦争の道をとったといえる。過去の災いを繰り返してはならんとな。百隻戦争は、ローハーが小さな島国と侮られたからこそ起こったと、彼はそう考えていたのだよ。この際一気に領土を広げ、盤石たる礎を築き、ローハーの力を絶対不可侵のものとしようと」
「馬鹿な。血の染みついた礎の上に立つ国に未来などあるものか。戦争は起こさせぬ。私が臣民を守る」
ふふふ、とリヒィ＝ミヒィは不敵に笑う。楽しげに揺れていた足が止まった。
「幻想を抱くな。血濡れてない歴史などあるものか。無論この国も例外ではない。ただ、きみが何も知らぬだけでな」
グレイスは怒りにまかせて立ちあがる。白い月光が、彼の優れた身体を背中から照らした。しかしリヒィ＝ミヒィは動じない。やはり可笑しそうに笑っている。
「戦争は起こる。ちっぽけなきみが望もうが望むまいが。ユリシアは着々と準備を進めているぞ。不可避の戦争を前にして、賢明な皇帝はどちらを選ぶ？　勝者側につくか、敗者の側に立つか」
握り締めた拳が震える。あまりに力を入れすぎたため、手の平が

破れ、ぬるりとした血がグレイスの指を伝った。
「きみの御父上最大の罪は、力を求めすぎたことだろう。その罪の結果がユアだ。ああ哀れ、地下牢で生まれた情のない子どもよ」
「地下牢で？」
眉間を曇らせ、思わずグレイスは訊き返したが、みつめる先にリヒィ＝ミヒィの姿はなかった。一抹の風と共に、彼は背後の窓際へと移動していたのだ。彼の背丈の四倍はあろう窓枠に手をかけ、それを押し開きながらリヒィ＝ミヒィは言った。
「今日はこの辺りまでとしよう。じきに夜明けだ。明日も朝浴のあとは会食だろう、皇帝陛下」
「待て。地下牢で生まれたとはどういうことだ。ユアはどういう身の者なのだ？」
しかしリヒィ＝ミヒィは行ってしまう。しっとりと絡みつくような夜闇の中に、小さな姿はまたたく間に消えてしまった。ただ短い言葉だけを残して。
「鍵は一人の女が握っている。スージー＝R＝ホメール。耳に懐かしい名前だろうが」
グレイスは張りつけられたようにその場に突っ立った。心臓がどくりどくりと音をたてる。
スージー＝R＝ホメール。代々皇城の庭師として働いていた家の男の元に嫁いで姓を改めた彼女こそ、ダレスの最も憎む女性にしてグレイスの生母、スージー＝C＝イスケだった。

青と赤の旗で飾り立てた大船団が行く。その左右を固めるように、ローハーの警吏団の船も。
グレイスはそれを見送ることもなく、湧くように出てくる書類に目を通していた。治水工事の推進計画、魔物討伐の是非、許可なく貿易に手を出した大臣の処罰、などなど。グレイスは淡々と雑務をこなしたが、時折その手がふと止まることがあった。目は何もない一点を捉えて動かない。

「なにか御気にかかることでも？」
見かねた大臣が訊ねてみても、彼は首を横にふるばかりだ。
グレイスは戸惑っていた。思いもかけず聞いた生みの母の名前。しかも、彼女が鍵を――何の、という明言こそなかったものの、恐らくはユアの身元に関する――握っているという。これでは上の空にもなるというものだ。
スージー＝C＝イスケ。いや、結婚前の旧姓、R＝ホメールとしてのほうが、ローハーの臣民には馴染みがあるだろうか。
彼女は類稀なる才女であった。ローハー臣民には欠かせない紋章を作る工匠の家に生まれ、ほとんどの工匠階級がそうであるように、彼女もまた皇城には入ることすら許されない下二位の身分であった。ただ金だけは人並み以上に蓄えていたので、彼女の才を見こんだ両親は、我が家の光となれと、彼女を魔法学校に入学させたのだ。そしてスージーはその期待に見事に応える。
ごく一般的な教育しか受けてこなかったのだ。入学当初は、元より専属の家庭教師に学んできた金持ちらに敵うはずもなかったが、スージーは学年が上がるにつれてその頭角を現し、卒業時にはなんと全生徒の頂点に立っていた。奇跡の才能とひたむきな努力、それから彼女のあくなき好奇心が、階級の壁を打ち破った瞬間だった。
彼女の両親は涙を流して喜んだ。階級が絶対であるローハーだが、魔法学校の上位卒業者だけは例外級の扱いを受けることがある。レザフ皇帝の妻となることだって夢ではなかったのだ。
スージーに周囲が息を呑むような美貌はなかったが、代わりに人を惹きつけてやまない愛くるしさが備わっていた。ほほ笑みかけられれば、それだけで抱き締めてしまいたくなるような。そんな彼女だから、レザフ皇帝も興味をもった。あどけなき奇才の噂は先に聞いている。
彼女を含めた成績上位者は、卒業後、皇一族を表敬訪問する機会が与えられるのだが、その会食で、レザフはすっかりスージーの虜となった。緊張に染まった柔らかそうな頬、肩の上でふわりと揺れ

る小麦色の髪、意思の強さを秘めた空色の瞳――本当にこれが“風の奏者”と恐れられた希代の天才魔導師だろうか？　火の精霊サルマンを使役し、彼女の劫火を弓矢に変えて、一度に三本の矢を放つ大技で有名なダレス＝S＝タバサに並ぶと、スージーはまるで無垢な子どものようにさえみえた。話しかけられる度にうろたえて耳を触る仕草も、レザフの庇護欲をかきたてる。

当時、レザフは二十の半ば。逞しい体に偽りを許さない鋭い目の男前である。権力に知性、金に、女を魅了する容貌まで備えた皇帝に、スージーの方とて惹かれぬわけがない。この会食で、彼女の皇后の座は決まったかのように思われた。だが、皇后誕生かと国中が熱に湧くこの日の夜に、彼女は取り返しのつかない罪を犯す。事もあろうに皇城の庭師の放蕩息子、ローザ＝C＝イスケと交わったのだ。

書物庫に続く階段は、季節を問わず渇ききっている。革のブーツがたてる足音もどこか軽い。

二十二年も皇城に暮らしながら、グレイスは一度として書物庫に入ったことがない。どこか暗く、陰鬱な雰囲気の書物庫には、グレイスでなくとも近寄りたくない気配があった。事実、管理の者が手を抜きさえすれば、すぐに埃でまみれてしまうような閑古鳥の巣である。

グレイスが書物庫へ行くと言いだしたとき、彼の従者はうろたえた。どのような書物が御入り用ですか。私めが御取りして参ります、と。しかしグレイスは頷かなかった。自分の足で尋ね、目で探すことが必要だと信じたからだ。彼は知らなければならない。この国の真実、隠された秘史を。

「御言葉ながら、グレイス皇帝」

書物庫の管理長である老人が進み出て言う。グレイスは手にしていた書物から目を離した。

「ここからは、なるべく早く御離れになられた方がよろしいかと存

じます」
「なぜ」
「……不吉で御座いますから」
わずかに眉を顰め、グレイスは言葉の続きを待つ。しかし老人は言い淀むばかりで、結局、グレイスが口で促してやらないまでは喋り出さなかった。
「ここは、この書物庫は……不義の者が足しげく通っていた場所に御座います」
ぼかした言い方をする。はっきり述べよと、グレイスはやや強い口調で言った。
「つまり、その……ユアめが。ユア＝A＝フロイアントが、なぜかしら、よくこの書物庫を訪れていたので御座います」
「ユアが？」
思わず声が大きくなる。老人ははっとしたように彼をみた。ユアは皇尊を殺した張本人である。彼の名をグレイスの耳に入れるのはやはり間違いであったと、老人は深く恐れ入った。が、グレイスの思惑は別のところにある。
「なぜ彼――魂食らいなどがこの場所に。あれは字も解さぬとのことではなかったか」
「その通りに御座います。文字など貴奴にとっては絵柄同然でしょうに、適当な書物を広げては、日が暮れるのも構わず眺めなどしておりました」
ですからどうか、長居は控えられますよう。老人は唇を震わせて訴える。グレイスは難しい目で書物を睨み、それからぽつりと、分かった、とだけ呟いた。
結局、私室に持ち帰ったのは、ローハーの建国からを書いた歴史本と、皇尊レザフの私記、それから百隻戦争の記録が書かれた合計三冊である。ただでさえ雑務で字を追ってばかりの上に、そのうえ過去の歴史まで学び直そうというのだから、大臣らは彼の姿勢に唸らされた。彼らにはただ、皇帝は、長たるためにこの国をより深く

知らんとしているようにみえたのだ。その裏にある黒い影を探ろうとしていることなど気づく由もなかった。
　机に向かい、真新しい革の表紙をめくる。すかさず従者が机上のランプに灯を入れた。揺れる灯りが中表紙に描かれた皇一族の紋章を照らす。ついぞ見ることができなかった養父の側面を求め、グレイスは長い指で頁を繰った。
　彼は不世出の天才と呼ばれたスージーの実子である。文字はその明晰な頭脳に、滲みるように入りこんでいく。

　抗おうと思えば抗えたはずだ。なにしろ、スージーは魔法学校の首席卒業者なのだ。いくら不慮のこととはいえ、気を取り直してウィンディーネを呼びだし、ローザを襲い――殺してしまうことだって――簡単にできたはずだ。しかしそれをしなかったのは、偏に彼が、絶世の美男子であったためかと思われる。
　ローザ＝C＝イスケは、親からも見放される道楽息子であった。あまりに優れた見目のため、彼に群がる女は絶えない。そのことがさらに彼を堕落させる。世の女はすべて自分の意のままであると、若い彼が思い上がるのも無理はなかった。
　恐れと失敗を知らない彼が、スージーを襲ったのには訳がある。これは諸人が決して口にしない秘事だが、おそらくはダレスの目論見だろうということだ。遊びしか知らない若者に金を握らせ、あどけない少女を襲えと言う。簡単なことだ。
　純潔が第一とされる皇一族が、何者かと交わった女を皇后として迎えるはずがない。まさか己の情事が世に知れるとは思いもしなかっただろうが、スージーの思いとは裏腹に、これはすぐ皇帝の知るところとなった。やはりこれも、ダレスの手によることだろう。皇帝はあまりのことに茫然自失、それでも彼女を我が妃にと言い張ったが、先代の皇帝や皇太后らに厳しく叱られ、ついにスージーを諦めた。そして彼女の代わりに皇后の座を手に入れたのがダレスである。

当初、スージーには死罪が言い渡されるはずであった。正式な決定こそなかったとはいえ、皇帝の伴侶となるべき人物が不義を働いたのだ。ローザ共々打ち首は逃れられない運命だった。しかし彼女は許された。きっとレザフの我が儘があったのだろう。ダレスと添っても、彼はスージーを諦めきることができなかったのだ。その澄んだ空色の瞳を。

ローザもまた命を助けられた。スージーが泣いて庇ったのだという。たった一夜のうちに、彼女はローザの魅力にしこたま打ちのめされていたし、女の直感だろう、身ごもったことに気づいていた。腹の子から父を奪うのですか、と泣き喚く想い人のようすを伝え聞いて、レザフもついに怒りの鉾を収めたのだった。

そして二人は結婚した。皇帝を裏切ってまで通じた仲だ。添わない訳にはいかない。遊びたい盛りのローザとしては甚だ不満であったが仕方ない。が、嫌だと言えば首を切られる恐れだってあるのだ。こうしてスージーは庭師の家に嫁ぎ、次の春には無事に赤ん坊を産んだ。グレイスと名付けられた赤ん坊は、父親譲りの端正な顔立ちに、母親の持つ愛らしいあどけなさを備えた少年へと成長していく……。

――彼女はいま、どうしているのだろう。

「会いたい人物がいる」

「はっ」

少し躊躇してから、言った。

「スージー＝C＝イスケを城に呼べぬか」

従者はぎくりと固まった。さもあらん、とグレイスはひっそり頷く。

彼女はいわば、レザフ先帝の黒い歴史の一部である。ダレス皇太后にとってもそう。いくらグレイスの生みの母とはいえ、彼女の名が皇城で口にされることは一度もなかった。もちろん、グレイスが彼女の近況を知るはずもない。

リヒィ＝ミヒィは彼女こそ鍵だと言った。いくら恋慕の情に駆ら

れても耐えてきたグレイスだったが、ここにきてついに我慢できなくなった。会いたい。わずかな思い出を取り出すにつけ、欲望は募る。母の温もりを感じたい。それに、きっと彼女は秘密の片鱗を知っているに違いないのだ。

「義母上の御気分を害することは分かっている。だから隠れて会う。今さら母子の情を確かめるわけではない。私はイスケ家とは既に縁を切った身だからな。ただ彼女に訊きたいことがあるのだ」

グレイスは嘘をついた。しかし従者は余計にうろたえる。

「それでもいけぬと申すか」

「い……いえ……そういう訳では」

「では何だ」

従者の顔は真っ青だ。グレイスが訝っていると、彼は膝をつき、音をたてるほどの勢いで頭を下げるとこう言った。

「恐れながら……恐れながら申し上げます。スージー＝C＝イスケ様は……既に、この世におられない御方なのです。ずっと御伝えも出来ず……お、お許し下さいませ！」

グレイスは言葉をなくして従者を見下ろす。泣き放つ彼の声が、どこか遠くから聞こえるような気がした。

10　殺せないのかな

訊けない。訊けるはずがない。

――ねえおまえさん、あんた、皇帝を殺しちまったって本当かい？

――うん？

ユアはきっといつもの調子でとぼけてみせてから、

――あ、そういえばそうだった。

なんて言うかもしれない。

しっかりと噛みしめたはずの歯がかちかちと音をたてる。

ゼンにはもちろん、皇帝がいかなる存在かなど知る由もない。ただ彼の貧相な想像では、それは素晴らしく豪勢な城に住み、何人もの召使に囲まれ、彼の周りはいつも笑いさざめき、毎日三食湯気のたつスープを飲める――これくらいが限度である。だが、彼がいかに地位高く、権力ある人間か程度は察しがつく。遠い国から、あれほどな敬弔団が訪れるほどだ。あれは名高い北の大国ユリシアと、バレリアの北に隣接する楯鉾の国レジアの両国王が乗った船というではないか。ゼンにはまるで無縁の、華々しい世界の住人らである。それを、ユアは殺したのだ。やはりきっと、何の慈悲もなく。確証はないが、確信がある。

相手は畏くも一国の長。多少道理に外れたことをしたとて、彼だから、と目を瞑らざるを得ない人物だ。それでいて手を出したユアには、いったいどんな理由があったというのだろう。しかも――、

とめどなく溢れる思考は、まるで濁流のようである。ごうごうと音をたてるその流れの中にいたゼンは、はっと我を取り戻した。

簡素な家の一室である。かの学者風情の男の寝室だ。この部屋ただ一つの家具といっても過言ではない中型のベッドは、ユアの細長い体に占領されている。彼の薄い瞼はひたと閉じられて動く気配を感じさせない。

事もあろうに、ゼンは彼の汗ばむ額に手を伸ばしていたのだ。湿

ってしまった彼の前髪を払い、固く絞った布で粒の汗を拭ってやろうと。ゼンはつい苦笑を洩らす。俺は一体、馬鹿なのか善人なのか。どちらにせよ、救いようがないことは確からしい。みろ、手はこんなにも震えているのに、恐怖は間違いなく全身を駆け巡っているというのに、それでも彼の額に触れようとしているではないか。彼の苦しみを少しでも薄めたい、と。

ユアは激しく喘いでいる。時折びくりと体を引き攣らせなどもする。また例の発作が起こったのだ。

今度もユアは血を吐いた。ゼンの生気すら奪われてしまうほどの勢いだった。事実、ゼンは白目を剥いて倒れそうになった。学者風情も同じく。この時に甲斐甲斐しく働いてみせ、その手腕を如何なく発揮してみせたのは、彼の家で働くただ一人の下女だったのだから恐れ入る。やはり女は強し、ということだろうか。いい具合に年を食った彼女は青褪めながら、しかし血にまみれたユアの衣服を手早く脱がせ、あまり使われてこなかったらしい来客用の部屋着を貸し与え、細い体を楽々と抱えてベッドまで運んでやると、食卓に張りついたまま泡を吹いている男二人の背中をばしりとやったのだ。最高の気つけ剤であった。

第十話　殺せないのかな

ユアは死ぬ。それも、遠い先のことではない。五日か六日、いや、今日明日中かもしれない。

「ねえあんた。悪いこと言わない、夕餉もうちで食べて行きなさいよ。どうせ当てなんてないんだろう」

例の逞しい下女が顔を覗かせる。まるでここは彼女の家であるかのような口ぶりだ。いや、ちらとみた学者との遣り取りを考えると、どうやら二人は家族同然の付き合いらしいから、割と自由も利くのだろう。もし旦那様が駄目だと言ったら、あたしゃもう一度ばしりとやってやるよ、とでも言い出しそうな女性である。

「……じゃあ、お言葉に甘えさせてもらうよ」
「ああ、そうしな。栄養たっぷりのやつを作ってやるからね」
そう言うと、熊とさえ張りあえそうな体躯からは想像もできないほどに優しく、下女は寝室の扉を閉めた。ただ、階段を下りる足音がどすりどすりと煩いのはいただけない。
まさかその振動に呼び起されたのか、ユアがぱちりと目を開けた。唐突の動きだった。
ゼンがぎょっとして身を竦ませると、ユアは顔だけを動かしてゼンをみた。そして小さく息を呑んだ。表情が心なし張り詰めてみえる。ゼンは曖昧に笑ってみせた。
「どう、して」
ユアの声は悲しいほどに掠れている。
「どうして、いるの」
「いちゃ悪いかよ」
ゼンはほとんど反射的に答えた。
「……逃げないの」
「なんで俺が」
気づいたくせに、とユアは言う。ゼンは答えず、ただ彼の血の気のない顔をみつめる。
やはりそうだったのだ。ゼンの中で、確信は常に真実に同格の意味を持っていたが、やはり実際に認められると改まった気持ちがする。ああおぞましい、皇帝殺しの罪人よ。しかし、そう思いながら、ゼンの心はどこか穏やかだった。微笑みさえ零れる。それをみたユアの目が見開かれた。かと思うと刹那それが濡れっ気を帯び、微かに震えたかと思うと、涙が一筋ユアの頬を伝った。目じりから、それは一直線に枕へと落ちた。
「おれは……おれは、ゼンを、殺せないかなぁ」
なんとも物騒な台詞である。しかしゼンはその額に手を伸ばしてしまう。そして今度こそ優しく触れ、彼の前髪を払ってやる。なぜだろう、どうしようもなく――彼を愛しく思う。

「ゼンを、殺せないかなぁ。もう、殺せないのかなぁ……」
「無理なんじゃないかな。俺はお人好しだから」
ユアの唇が小さく震えた。震えた拍子に、まるで木の実が転がるような調子で、ばかじゃない、という言葉がぽろりと落ちた。ゼンは下女が用意してくれた布を手に取り、彼の汗と、涙をそっと拭ってやった。

結局、学者の家には丸二日も世話になった。逐一下女の申し出があったのだ。夕餉を食べれば、ついでだから休んでお行きよと言うし、朝目覚めたら、朝餉はいかがと伺いに来るのだ。どうやら生来の世話好きらしい。お蔭でゼンは助かった。起き上がれるようになったものの、ユアはどうも本調子でないらしく、数歩行くだけでも危うい足取りだったのだ。
学者風情はあまりいい気がしないようすだった。仕方ない。宿賃のやの字も支払えないような乞食二人を、誰が好き好んで家に置こう。しかし文句は言わなかった。もしかすると下女の“ばしり”が一発か二発見舞われたのかもしれない。
「ありがとうございました」
たどたどしく頭を下げるユアを、下女は心配そうにみつめている。腰に手を当てた彼女の後ろに学者が控えているものだから、もはやどちらが主人か分かりそうにない。
「あんた、本当にもう大丈夫かね」
「うんっ」
元気よく答えるユアの横顔を、ゼンは静かに見守っている。大丈夫な、はずがない。
――背中をみてくれる。
ユアの涙が収まった後のことだ。呟くようにユアが言うので、背中側に回ってまじまじとみつめる。なにもない。
「別になにもついてないぜ」
「ちがうよ。せ、な、か。服じゃないの」

ああ、と言ってローブに手をかける。寒かないか、と一応断りを入れてから、真新しく草臥(くたびれ)のないローブをぺり、と剥いでやる。
露わになるユアの背中。肉がまるでついていない、それは薄い背中である。本当に、よくよく白い奴だなあ、と薄ぼんやり思っていたゼンだったが、ある一点に目を奪われて、ローブに手をかけたまま硬直してしまった。
薔薇の彫り物である。老人の屋敷で湯浴みした際、同じものをみてゼンは惚れ惚れしたことがあった。ローハーじゃこんな洒落たものを入れるのか、と。そのときユアは言ったっけ。それ、全然いいものじゃないんだよ。呪いなんだよ、と。
その時はまるで信じられなかった。その彫り物の繊細さは、物騒な響きから程遠いものに思われたから。だが今、それはすっかり姿を変容させてしまっている。よく計算されたらしいその形に変わりはない。ただ、色が。かつては白肌に溶けてしまいそうに色薄かった薔薇が、いまやくっきりと、滲むような赤に染まり上がっているのだ。手を触れれば濡れてしまいそうなほどに生々しい。
ゼンの身が竦む気配を感じたのだろうか。
「どんな色」
とユアが訊ねる。
「……別に。前と同じ、薄い色」
現状が好ましくないことは考えずとも分かる。ゼンはとっさに誤魔化した。ふふ、とユアがひっそりと笑う。衣擦れの音をたてながらこちらをふり向いたユアは、うらぶれた町のような淋しさを思わせる顔をしていた。
「ゼンは嘘がへただね」
「うるせえ」
ゼンは再び考える。
皇帝を殺し、ローハーを追われたユア。彼をどうしても手に掛けなくてはならなかった理由が、きっとユアにはあるはずだ。
以前までなら、そう、彼の手が一般の人のそれとは違い、おぞま

しい血の臭気が滲み付いたものと気づいた当初ならば、理由など考えるには至らなかっただろう。ふとしたはずみに、だとか、ちょっとした思いつきで、だとか、動機といえない動機を挙げて納得していたことだろう。だが、あの涙をみてしまってはそうも思えない。何かしらの訳がある。しかも、しかもユアは、

――こうなることを知って、あえて彼を殺したのではないだろうか。

“悪いこと”をすれば呪いの罰が身に降りかかる。それを分かった上で、ユアはこの道を選んだのではなかろうか。どうもそんな気がしてならない。誰が自ら進んで苦しみを受けるだろうかとは思うのだが、呪いという言葉を口にするユアの静かな顔、それにこの淋しげな笑み。全てを泰然自若のまま受け入れようとしている風ではないか。

「ユア」

「うん？」

いつもの声である。ただちょっと掠れているだけで。

「あんた……死にたいのか」

ユアの顔がほんのわずかだけ強張る。それから張っていたものがふつりと切れたように、情けない笑みを浮かべた。垂れた目、下がった眉、困ったような笑顔。ゼンの疑念は、悲しい確信に変わった。それ即ち彼にとっては真実である。

しかし、ユアにただ死を待つ気はないらしい。一歩一歩、踏みしめるように彼は海へと歩いていく。ゼンは訳も分からぬままそれに従うしかない。

元より不確かだったユアの足取りは、いまや一層危うさを増している。雑踏を歩けば、あちらに肩を当て、こちらに腕が引っ掛かるといったあり様。休もうとゼンはしつこく勧めたが、ユアは頑として首を縦に振らなかった。ただ、海へ、と言う。

「分かったよ、分かったから」

だけど肩くらい貸せよ、と言ってゼンはユアの腕を取る。複雑なようすで顔をしかめたゼンを、ユアは幾分か驚いたようすで見下ろす。――見下ろす。

二人の身長差は、優に二十センチメートルを超えるのだ。

「ゼン」

「あ？」

「ちーさい」

ぎゃんぎゃんと犬のように喚く声と、澄んだ笑い声が夕暮れの通りに響いた。帰宅の途につく人々は、なんだなんだと声の方に目を向ける。みれば、なんとも仲が良さそうな二人組ではないか。一方が腹をたてるのを、もう一方がうまく宥めているらしい。白いのっぽと黒いチビ助。珍妙な組み合わせの滑稽なやり取りに、それをみる人々の心はふと和んだ。

彼らの誰が気づいただろう。二人のうち少なくとも一人が、ゆっくりとだが確実に、死への道を歩いているということに。

ゼンがどうして気づけただろう。許されざる罪の下生まれたこの少年、哀れなユア＝A＝フロイアントを縛る業に、己自身も深く関与しているということに。

誰も知らないのだ。まだ誰も、何も。本当のことなど、まるで。

ゼンの肩を借りると、正直余計に歩きづらい。ゼンの支える体の左半分が、かくり、かくりと不格好に傾くのだ。ユアは喉を鳴らしてくつくつと笑った。対するゼンはむっつりと不機嫌で、しかし大真面目な顔で彼を支えようとしている。身長差をいかにして埋めんとあれこれ試しているようだ。

静かにゼンを窺っていたユアは、ふと誘われるようにして顔をあげた。これまで一度嗅いだきりだが、心にじんと沁みついて離れないにおいが、今また、風に乗って感じられる。潮のにおいだ。

「――で、背の高い――白く、まだ若い――です。緑のローブで――」

ユアの耳が、途切れ途切れに流されてきた言葉を捉える。声の元を辿ってみると、ああ懐かしい、ローハーの紋章を胸に留めたローブ姿の人間。
「ユア？」
突然肩が軽くなったものだから、ゼンが訝って声をあげる。それに構わず、ユアは男のほうへと足を向ける。ゼンは少し離れて後を追った。
冬の暮れは早い。闇は一秒を追うごとにその色を深めていく。まるでユアの身を呪いが食らっていくかのようだ。静かに、音もなく、どこか優しくさえある調子で。
男は熱心に訊き込みをしている様子だった。応対するのは果物屋の店主だろうか。朝は早くに店を開け、夕は暮れきる前にこれを閉めるという生活に慣れきっている店主は、すっかり深まった闇にどうも落ち着かないらしい。さあ、知らんねえという相槌の合間に、ちらちらと空を窺っていたが、その目がふとユアをみつけた。ユアは半端な笑みを浮かべる。
「おう、兵隊さん」
店主はぷくりと太った指でユアをさした。
「おまえさんの言う——細身で背が高い、色白の少年っていうのは——正(まさ)しくあちらさんじゃねぇのかい」
男は店主の指の先を追う。追って、ユアに行きついた。途端、
「う、うあああああっ！　たっ、魂食らい！！」
絶叫。声は嗄れよ喉は千切れよと言わんばかりの大音声だ。店主はすっかり気押されて、たるみ始めた肉に半ば埋もれた瞳をぱちぱちと瞬かせている。ユアはやはり、のんびりと笑っている。
「でっ、伝れ、伝令を……！」
「アキュロス」
「ユア、駄目だ！」
ユアの唇が静かに言葉を紡ぐ。刹那の後、体を揺さぶらんばかりの風が吹き荒れ、二体の精霊が姿を現した。片や水の精霊アキュロ

ス、片や風の精霊ウィンディーネである。ゼンの素人目からみても、その二体の力量の差は明らかであった。気高さ、美しさの桁が違うのだ。煌々たる輝きを放つのは緑雲の黒髪を持つアキュロス。ユアが使役する水の化身である。

アキュロスは清漣たる瞳に青い焔を宿し、いましもウィンディーネに襲い掛からんと牙を剥いた。力は力を呼ぶ。力は力を惹きつけるのだ。精霊は精霊をみれば猛る。竜が虎を見、虎が竜を見て吠えるのと同じ事だ。

しかしユアはそれを抑えた。手を軽くあげてアキュロスの逸りを制する。

「いかせてあげて」

――“時”が来たか、ユアよ。

ゼンにはついぞ聞こえない声で、アキュロスはユアに話しかける。ユアはただ静かに頷いた。

ウィンディーネは白い衣を振り乱し、吹きつける季節風に後押しされるようにして空を飛んでいく。仲間の警吏を呼びにかかるのだ。精霊を見慣れぬバレリアの人々は、道に飛びだしては彼女が舞う姿を追いかけた。ああ、神の遣いがきたと感嘆する老人すらもいる。

ウィンディーネを使役した男は、しかしユアが手を下すまでもなく地面に崩れ落ちた。呆けた様子だった果物屋の店主が、悲鳴をあげて店に逃げ込む。男の顔に赤みはない。

「ばかだなあ」

のんびりとさえした口調でユアが言う。

「詠唱もしないで精霊を呼びだしたりするから。いっぱん人が、そんなことして無事なわけないじゃない」

「おい、今のは一体……」

また一抹の風が吹き、アキュロスは雪のように儚く消えた。野次馬の中をどよめきが走る。彼らの視界に、苦しそうに倒れる男の姿は入っていないようである。

ユアはゼンにふり向くと、困ったように笑ってみせた。説明はな

し、というらしい。
「逃げよう」
「逃げるって」
ユアは口を開きかける。が、そこから迸ったのは鈴のような声ではなく、どす黒い血であった。群衆の中から幾筋かの悲鳴が漏れる。
「ユア！」
顔から地面に倒れ込んでいくユアの胸元に、間一髪でゼンが飛びこむ。細い体は、押し止めるに何ら苦労をかけなかった。がくりと意思なく垂れたユアの頭。糸が切れた操り人形のようである。傀儡。その言葉がゼンの胸を突く。
「ユア、ユアっ！　しっかりしろ！」
「だいじょう、ぶ……」
ゼンの肩に手をついて、震えながらユアは身を起こす。と、思いきや口を両手で押さえ、再び激しく吐血した。錆びた臭いが辺り一帯を包む。ゼンは声を涙に濡らしながら、今にも目を閉じてしまいそうなユアの体に取りすがった。薄情なものだ。野次馬共は、遠巻きにそれをみつめるばかりで動かない。医者を、という声すらあがらないのだ。あまりのことに、皆が茫然自失の体である。
ユアは青褪めた顔でにこりと笑った。汗の玉が顎の先で鈴生りになっているのが痛ましい。
「へーき」
この期に及んでまだそんなことを言う。ゼンは骨ばかりの彼の体を支えてやりながら、とにかくどこか休める場所をと視線を巡らせる。
「ここを、離れなきゃ」
「動けるような状態じゃねえだろうが！」
「だけど行くの。じゃなきゃ、おれは本当に、何のために生きてきたのか分からない」
はっきりとした語調である。いつもの、朝霞を掴まえるように不確かな声の響きではない。

「もうすこし、もうすこしだから……」
もはや自分に言い聞かせているようですらある。ユアは荒い息をつき、倒れたままの男に背を向けて歩き始めた。震える足で、ひとつ踏み出すごとに体をよろけさせながら。
ゼンはしばらく言葉を失くしてそれをみていたが、やがて気を取り直すと彼に駆け寄った。そしてユアの頼りない撫で肩を支える。ユアは浅く笑った。
「だから、ちーさいって言うのに」
「黙っていやがれ」
傍からみれば、どちらがどちらを支えているのか分からない。ユアがゼンに凭れかかっているようにも見えれば、ゼンがユアに吊り上げられているようにも見える。ちぐはぐに歩く二人の前で、雑踏がすうと開いていく。悠然たる海が、彼らの眼前で割れて道を示すかのようだ。静まり返った細い小道を、二人はゆっくりと歩いていく。たくさんの顔が得体の知れぬ二人連れを見ようとし、見れば慌てて影に引っこむ。誰もが半ば夢をみるような目つきをしていて、未知への好奇心と恐れとに心を掻き乱されているようだ。しかし、ゼンの目にもはや人混みなど映らなかった。みえるのはただ、先に続く一本の道のみ。彼を突き動かすは、それこそ得体の知れない衝動ばかり。

この日、夜が明けるのを待たないうちに、ついにローハー国の中枢が動き出す。気が触れて我を失った皇太后が、御自ら大魔導師団を引き連れてバレリアに渡ってくるのだ。
精霊ウィンディーネの力を借りずとて、この季節に決まって吹く風が彼女らの進みを助けてくれる。船団は鳥が飛ぶように海を滑り、矢の速さでユアを追う。
暗がりに身を潜め、今こそはと息を殺すユア＝A＝フロイアントは、ただただ“時”を待っていた。
――もうすこしだ。

ユアは静かに目を閉じる。世界よ。もし応えてくれるなら、今ひと時の力をどうか。

――もうすこしだ。じゃなきゃ、おれは本当に、何のために生きてきたのか分からない……。

11　強き胤

――恐れながら申し上げます。スージー＝C＝イスケ様は、既にこの世におられない御方なのです。

滅多なことでは動じない皇帝の、鉄の厚貌がさっと青ざめる。椅子に座っていなければ、きっと膝から崩れ落ちていただろう。

スージーは既にこの世の者でない。スージーは、母は――死んだ。

グレイスの耳は、外界の音を全て遮断してしまったようだ。従者が涙ながらに何か叫んでいるのだが、しかしグレイスには届かない。ただ自分の血が体内を巡る音だけが聞こえる。ざあ、ざあと、潮騒のように。

彼女は出来た母親であった。まるで家に寄りつかない夫に文句のひとつを言うこともなく、子のグレイスに涙をみせることもない。それどころかいつも笑顔で、父親の分もと彼に惜しみない愛を与えた。いいわね、グレイス。父さんは悪い人ではないの。ただちょっと、そわそわの虫がいるの。

「そわそわの虫？」

そうよ、と彼女は答えた。悪い虫でね、父さんの体の中に住みついて、時々いたずらをするの。そうすると父さんは酷くそわそわしちゃって、家でじっとしていられなくなるのよ。

「だから母さんはずっと一人ぼっちでいなきゃいけないの？」

違うわ、と優しく微笑む。あなたがいるじゃないの、グレイス、と。

そわそわの虫はどこにいるの、と訊ねるあどけない息子に――彼は目元がとてもよく母親に似ている――スージーは少女のように目を瞬かせた。ここに、と言いながら、幼いがゆえに丸い息子の腹をくすぐってやる。やめてよしてと体をよじりながら、純真の息子は明るく笑う。

近所で評判の、仲の良い母子であった。だが、成長するにつけ、グレイスには父親に巣食っているのが“そわそわの虫”などという可愛らしいものではないことに気づき始める。そわそわの虫が騒ぐくらいで、どうして母さんを打ったりするだろう。どうして僕の首を絞めたりするだろう。

なかなか子に恵まれない皇帝に、養子縁組の話を持ちかけたのはローザであろう。まさかスージーがグレイスを手放すはずがない。弾む勢いで決まったこの話に、最後まで抗い続けた彼女である。ただ一人の息子を、どうして皇一族に渡さねばならないのか。涙ながらの訴えは、しかし皇城には届かなかった。対するレザフは、だからこそ頑なにグレイスを貰い受けようとした節がある。可愛さ余って憎さ百倍、ということだろうか。かつて自分を裏切った女から大切な者を奪い取る。しかもその子が、かの女の面差しをくっきり受け継いでいるとくれば。

力なく落ちた手が机を打ち、頁が数枚はらりとめくれる。開いていた書物は先帝レザフの私記である。もちろん未完成で、後ろ四半分ほどは白紙のままだ。しかし、ちょうどめくれた白いはずの頁に乱雑な文字をみつけ、グレイスは動揺に揺れる瞳でそれを追いかけた。

――スージー＝C＝イスケは地下牢で死んだ――

グレイスは今度こそ言葉を失う。これは、この走り書きは一体、どういうことだ。

第十一話　強き胤

「グレイス様！」

大股で回廊を歩くグレイスに取りすがり、半ば泣き叫びながら従者が言う。あまりに取り乱しているため、呼び方が皇嗣時代のそれに戻っていることにも気づいていないらしい。

「御待ち下さい、グレイス様！　何となされます！」
どうにか彼を止めんとする従者を、グレイスは強引に振り払う。
従者が必死に取り付くのも仕方がない。その静かな御面氷（みおもて）の如しと言われた男が、如火烈烈の形相をみせているのだ。これが落ち着いていられようか。しかもその向かう先が彼の義母、ダレスの私室ともなれば尚更。
やはり皇帝に生母の死を伝えるべきではなかった、と従者は思う。
彼とてスージーの死がどのようであったかは知らない。ただ、その死が内々に済まされたということ、それを機に彼女の夫が姿を消したとことを噂に聞いたばかりだ。何かしら“臭う”事象であるため、皇城では誰もが避けて通る話題だ。それなのに――ああ、なんと愚かな――こともあろうに彼女の実子グレイスにそれを零してしまうとは！
「どうか、どうか御止まり下さいグレイス様！」
ダレスの私室は目前である。従者の悲痛な叫びに何事かと危ぶんだのだろう。ダレスの侍女が扉から顔を覗かせ、グレイスの様相をみた途端にきゃっと叫んで竦みあがった。グレイスは彼女を押し退け、足音荒く部屋に入る。次女や従者が控えるホワイエに似た小部屋を抜ければダレスのくつろぐ私室であるが、グレイスは挨拶もせずに扉を開ける。かつてないことだ。彼を追ってきた従者は血の気を失っている。
「無作法な！　何でございますの！」
悠々と茶を楽しんでいたらしいダレスが金切り声をあげる。小机に置いたカップが騒々しい音をたてた。傍に侍る侍女らは言葉を失って震え上がっている。
「……お話があります」
感情を抑えつけるあまり、震えた声でグレイスが言う。言いながら、部屋にいる侍女や従者らに目を走らせた。出ていけ、と目で言うのだ。侍女らはうろたえてダレスをみたが、皇帝のあまりの形相に抗えようはずがない。先を争うようにして部屋から逃げ出してし

まった。慌てたのはダレスだ。これでは味方がいなくなるではないか。
「お前もだ」
涙で顔を汚しに汚し、それでもグレイスの傍を離れようとしない忠臣は、子どもがやるようにいやいやと首を横に振った。
「出来ませぬ！　グレイス様、もしもあの御方の事で御気を乱しておらるるなら――」
「貴様の与り知るところではない！」
平伏していた従者は、半ば茫然とグレイスをみつめる。その間にもグレイスは声を荒げ、誰ぞ此奴を連れ出さんかと下知して止まない。畏れ入った者が数人ばらばらと部屋に駆けこみ、呆けた様子の彼の従者を引きずっていく。彼らが出ていくと、部屋は不気味なほどに静まりかえった。ダレスの歯が震えて鳴らす、かちかちという小さな音さえ聞こえそうなほどだ。
「義母上」
グレイスの声は静かだ。しかしそれが不気味さを煽る。
「スージー＝C＝イスケは……我が実母は、どのようにして死にましたか」
ダレスがはっと息を呑む。グレイスは彼女を睨みつけて離さない。
「どのようにして、死にましたか」
「……」
「お答え下さい」
「……わたくしが知るはず、ないでしょう」
いまやダレスの唇までもがわなわなと震えている。恐怖のためか、それとも憎き敵（かたき）の名に再び悋気を発したか。
「偽りを仰いますな。義母上が御関わりのことは知れております」
「生意気な口をお利きでない！」
グレイスの言葉を遮るように、ダレスの高い声が響く。彼女の顔は赤く染まっていた。
「何という無礼！　わたくしが、かの女の死に関与していると？

おぞましい！　わたくしはあなた様を庭師の家から拾って差し上げましたのに、その見返りがこの仕打ち。ああ、これがあなた様の真の御顔なのですわ。亡き夫にも――」
「話をすり替えられますな！」
今度はグレイスが遮った。ダレスは張りを失った目元を引き攣らせる。
グレイスは懐に持っていた書物を取り出した。先帝レザフの私記である。グレイスが開いているのは例の頁、殴り書きの文字がある部分である。
――スージー＝C＝イスケは地下牢で死んだ――
血で書かれたのだろう。文字は黒ずみながら、しかしぞっとする臭気を思わせる色をしている。ダレスの震える目がそれを追うのをみると、グレイスは次へと頁をめくった。
――皇后ダレスの陰謀である――
ひぃっとダレスが悲鳴をあげる。さらにもう一枚、グレイスは頁を繰る。
――憎しみが罪を生み、罪が運命を回し始める。穢れた血はダレスのために流された――
「馬鹿なことを！　こんな、こんな……」
「懺悔の時がきたようだな、皇太后」
濁った声でぎゃっと叫び、ダレスは声がした方をふり向いた。グレイスは驚かない。何とはなしに、予感していたのだ。彼はこの場にやってくる、と。
窓際に立っているのはリヒィ＝ミヒィである。やはり奇妙な格好をしているが、今日はそれが全て一様に黒い。まるで喪に服しているかのような。
「な、何者！　誰ぞ……誰ぞここに――」
無駄だ、とリヒィ＝ミヒィが言う。その声はすっかり笑っている。
「先からこの部屋一体にウィンディーネが気を張り巡らせている。一切の音も漏らさんよ」

「おまえ……おまえ、何者なの。まさか、グレイスがよこした刺客なの！？」
「いや、彼と僕はただの取引相手にすぎん。ああ、安心したまえ。取引といっても、きみの命はそのやり取りのうちに入らんさ」
「訳の分からぬことを申すな！　名乗りなさい、痴れ者！」
ダレスはもはや発狂の体である。グレイスはそれを冷めた目でみている。リヒィ＝ミヒィは深々と頭を下げて胸に手を当てた。いっそ馬鹿馬鹿しく思えてくる仰々しさである。
「皇太后にはお初に御目文字仕る。僕はリヒィ＝ミヒィ。永遠の子どもと呼ばれる者だ」
「永遠の子ども……」
おや御存知か、とリヒィ＝ミヒィは言う。まあいい、さっさと本題に入るとしよう。
「この字は貴様の仕業だな」
リヒィ＝ミヒィにちらと視線を向けてグレイスが言う。にやにやと笑うばかりで、リヒィ＝ミヒィは答えない。
「義母上。全て御話し下さい。あなたが母にした仕打ちが如何なるものか」
「わ、わたくしは何も……」
言いながら、ダレスは追いつめられた小動物のような瞳でリヒィ＝ミヒィをみる。彼が半歩ばかり前に進み出ると、ダレスは湿った悲鳴をあげた。
「わたくしは何もしていない！　あの女を殺したのはユア！　全てユアの仕業よ！」
グレイスの目が見開かれる。リヒィ＝ミヒィをふり返り、掠れた声で問うた。
「まことか」
「結果だけを述べるとすればな」
だが真実は隠されたままだ、とリヒィ＝ミヒィは言う。言いながら、また半歩ダレスに近寄る。ダレスは逃げようとしながら、しか

し体が言う事を聞かないらしい。手足は椅子から立ち上がろうともがいているのに、肝心の腰がぴくとも動かないようなのだ。馬車に踏みつけられ、轍に張りついた間抜けな蛙のようである。顔までそれらしくみえてくるから滑稽だ。

「さあ、話すがいい、皇太后ダレス。気を安んじられよ。前にも言ったが音は漏れん。きみの罪の告白も、やはり外には聞こえんのだ。無論――断末魔の叫びも、な」

「嫌よ！　わたくしは死にたくなどない！　死ぬのは嫌！」

気狂いのようにダレスは叫ぶ。滅茶苦茶に腕を振りまわし、なにもない空間をいたずらに引っ掻いて。ならば話せ、とどこか優しくさえ感じる声で促すリヒィ＝ミヒィに、ダレスの震える唇がついに動いた。

「あの女……ユ、ユアは……ユアは……――――」

ダレスはついに気が触れたらしい。

皇一族が皇城を出ることなど、これまで数えるきりしかなかったはずだ。しかもそれがローハーの外ともなれば。もはや論外である。今度のダレスの行動に、大臣らは驚き呆れるどころか、もはや言葉すら失っている。

きっかけはラジネの出現だ。遠く東から飛んできたらしい。バレリアの地にいる警吏団が寄越した遣いである。

――罪人の足跡を見つけまして御座います。

精霊の声は、彼女らを使役する資格のある者にしか聞こえない。一部の人間は、彼女らの姿を拝むことすらできないという。しかしローハーの人間は誰しも精霊の声を聞くことができる。彼らが自国を“神の国”と称するのはそれ故だろう。実は、ローハーの興りは“エルフ――神に愛された子――の一団が流れ着いたものというから、当たらずとも遠からず、というところ。

それはともかく、ラジネの注進はその場にいた全員の耳に届いた。もちろんグレイスにも、ダレスにも。ダレスの気狂いはこの瞬間に

顕(あらわ)になった。聞くや彼女は、騒がしい声で叫び始めたのだ。やはりあの女の血は穢れているのよ、あたしが息の根を止めてやる、と。

もはや言葉遣いも定かでない母の様子に、ヤマはすっかり怯えてしまった。大臣らはどよめき、誰ぞ典医を呼べと叫ぶ声すらする。突如起こった騒ぎの中で、グレイス一人がしんと静まりかえっていた。その顔はもはや鉄の冷たささえ感じさせない。目は空洞のように虚ろであった。

結果、ダレスは自身で魔導師団を率い、バレリアへと渡ってしまう。諌めようとした大臣が一人、彼女の使役するサルマンのために燃え滓となったという。

ダレスは魔法学校出の人間だ。そうでなくとも大臣一家の息女なので権威は高いが、皇城御抱えの魔導師らには特に広く顔が利く。その彼女が鶴の一声ならぬ鬼神の絶叫を発したのだ。畏れ集まった魔導師らは一大戦力となって、彼女に付き従いバレリアに向かうこととなった。

グレイスはこれにまるで関わろうとしなかった。何も皇太后自ら赴く必要などありますまい、御止め下されと、彼にすがりつく大臣もいたが、グレイスは何も答えなかった。こんなあり様だから、皇帝までも御乱心と噂されるのは仕方のないことだ。

「義兄様、義兄様」

ヤマは声を放って泣く。椅子に座るグレイスの前に膝をつき、その腿に齧りつくようにしながらである。グレイスは夢から醒めきれぬような目で彼をみた。

「義兄様、御気を確かになされませ。義兄様まで遠くに行かれましては、私はもう、この世に生きておられません」

「ヤマ……」

母の狂態を目の前にし、さらには心から慕う義兄までもがふよりと浮いてしまいそうなあり様なのだ。大臣は皆子どものように騒ぐばかりで収拾がつかない。ヤマは混乱と悲しみと恐れに泣いた。震える彼の肩をみるにつけ、グレイスの目が光を取り戻していく。青

冥と言われたその頭脳が、再び切れのある輝きを放ちはじめる。
「ヤマ」
呼ばれてヤマは濡れた顔をあげた。しっかりと自分をみつめ返す目。ああ、これでこそ義兄様と、ヤマの双眸に再び涙が溢れる。
「ヤマ」
優しさが零れる声で言い、グレイスは椅子から立ち上がると彼もまた膝をついた。驚き慌て、彼を立たせようとするヤマを、グレイスはやんわりと押し止める。そしてその、幾分丸みを帯びすぎた柔らかな体を――こんな事はこれまでになかった、一度たりとも――抱き締めた。ヤマは目を見張る。体は一度びくりと痙攣さえする。惜しみなく与えられる義兄の温もりを、これは幻かと疑うような目……。
「ヤマ。済まない」
グレイスは静かにそう言った。
「私はおまえを愛している。おまえは確かに私の弟だった」
それからもう一度、済まない、と繰り返した。
ヤマの肩に顔を埋めるようにしていたので、彼の表情は窺えなかった、と後にヤマは語っている。ただ、その時の義兄の声は、かつてない温かみに満たされながら、どうしようもない悲嘆に暮れているようでもあった、と。

グレイスは屹と立った。優れた身丈、揺るぎない瞳、意志を持つ唇。おお流石は皇帝よ、と人は甘い吐息を漏らすだろうが、この時の彼はグレイス＝E＝ロウの顔ではなかった。かつて母の愛の元で育った、グレイス＝C＝イスケである。
彼はついに真実を知った。赤く塗りたくられた義母の口は、二十年隠し通した罪をついに告白したのだ。
しかし、それを知っても尚グレイスは迷う。自分は、ユアを一体どうしようというのだ？
――ユアは、ユアは……。

ダレスの悲鳴にも似た告白が蘇る。
――ユアは、あの女に……スージーに孕ませた子……。
思いだすだけでもグレイスはくらりと倒れそうになる。ユア＝Ａ＝フロイアント。彼は、穢れた魂食らいは――血を分けた弟であったのだ。異なる男を父とした、しかし確かに同じ女の乳を吸って育った肉親。ああ、あの夜にみた彼の瞳。国の長を殺しておきながら、平然と鼻歌をうたっていた恐ろしい彼の瞳。あの色は、晴れた日の空のような色は、我が身とまるで同じではないか。彼ともっと言葉を交わしたいと願う心は、気づかぬままに同じ血の温もりを求めていたというのか。
しかし同時に、グレイスは酷な事実も知ることになる。ユアは、彼のただ一人の弟であると同時に、掛けがえのない母を手にかけた張本人でもあるのだ。
「更なる力を得させるためよ」
あの日、気が正常の域を振り切ってしまったのだろうか、哄笑の後にダレスは言った。
「力は力を呼ぶ。その身を食らえばユアの力は増すわ。あの女、魔力だけは人の二倍三倍とあったもの。ふふ、ましてや母親の肉よ？」
そう言ってダレスは大口を開けて笑った。この世の女とは思えない壮絶な笑いである。
ユアは母親を、グレイスの生母でもあるスージーを殺した。望んでか、そうでないかは知らない。どちらでもいい。とにかく殺した。そしてその肉を食らった。やはり望んでかどうか、それは分からない。これもやはり、どちらでもいい。
スージー＝Ｃ＝イスケは地下牢で死んだ。ユア＝Ａ＝フロイアントは地下牢で生まれた。このＡ＝フロイアントの名は偽名である。彼を皇帝の忠犬として傍に侍らすために上三位の階級を与え、適当な姓をつけてやる。姓などどうだって構わなかった。彼にとって大切なのは“ＪＵＧＭＡ”の名前。かつてそれを手にしたエルフの心を虜とし、ついには闇に堕（お）とさしめ、魔族の祖となるに至らしめた

という伝説の魔剣。一振りで十の命を奪うというこの魔剣が、皇一族が恐れた人物を消し去るためにと、二千年の時を超えて鍛え直された。それがユアの正体だ。

作られた子ども。情のない人間兵器。

哀れなスージー。先には庭師見習いのローザに犯され、後には恐ろしい魔族の男に犯されたのだ。地下牢で、幾人もの前で。

魔族の男もまた滑稽で、心悲(うらがな)しい。彼はどのようにして脅されたのか、はたまた芳しい好餌に惑わされたか。命を受けて人間の女を犯し、胤をつけ、果てには生まれてきた子どもに殺された。これもまた、力を得るべくという座が白む理由のために。その命を下したというのがダレスだ。そして更なる上手の影がここにちらつく。庭師見習いのローザだ。なんと、スージーの夫である彼こそが、この話をダレスに持ち込んだ張本人だというのだ……。

しかしグレイスにとって、それらはもはやどうでもいい事だった。起こってしまった事だ。どれだけ歯を鳴らし唇を噛もうがどうともならない。他国に逃れたローザが、いまもどこかで同じ星をみているかと思えば腸が煮えくり返る思いだったが、それよりも、なによりもまず、

――ユア。

彼に会わねばならない。それだけは声を明にして言える。だが、その先をどうするか。弟よ、とその肩を抱くのか？　それとも母の敵と言って詰るか？　――分からない。分からないが、ただ彼に会いたい。その衝動だけは押さえようがない。

ユアの命はじきに尽きる。皇一族に手をかけた者の末路は悲惨なものだ。背中に刻まれる美しい薔薇。それが、かの人の命を吸いつくしてしまう。薔薇が己の命で深紅に染め上げられるその時まで、罪人は血を吐き続けねばならぬ。それが魂吸いの呪い。そうなってしまう前に、彼が業に満ちたその生を終えてしまうまでに、どうか一目彼に会いたい。そして――心が思うままに彼と接したい。

グレイスは屹と立った。優れた身丈、揺るぎない瞳、意志を持つ

唇。だれも彼を止めることはできない。
「バレリアへ」
ローハー国第三十七代皇帝、グレイス＝E＝ロウ。彼最後の下知が、朗々と広間に響く。

12　秘鑰、穴に嵌まりて

夢を、見ていた。

第十二話　　秘鑰、穴に嵌まりて

――おかあさん。

恐る恐る、呼んでみる。

――おかあ、さん。

返事はない。

代わりに暗闇から伸びてきたのは二本の白い腕で、痩せ細り、血管が青く不気味に浮きあがり、皮膚には醜い色の斑点が浮かんでいる。どこか腐臭すら感じる。

無言の腕は、躊躇うことなく幼子の細首を絞める。悲鳴を上げることも敵わず、幼子は空気を求めてひくひくと痙攣する。細い腕とて、振り払う力がこの幼子のどこにあろう。腐臭がするのは彼とて同じことだ。

すぐに鉄と鉄が触れ合う耳障りな音が響く。

薄れていく意識の中ですら、幼子はこれに続く二つの音をありありと思い浮かべることができた。もはやお決まりの、定番化された流れである。ほら、風が切られるしなやかな音でしょう。ほら、打たれて叫ぶ人の悲鳴でしょう。ほら、ほら、やっぱり。

またある時には女のすすり泣く声が聞こえる。

――ここから出して。

涙に濡れた訴えにも、しかし応える声はない。女はそれでも声が嗄れるまで諦めない。

――お願い。私に罪はないじゃない。罪深いのはこの子よ。お願いよ、ねえ。私だけ。私だけ、ここから出して。

枯れ木のような女の声を聞きながら、幼子は薄い瞼を閉じる。も

う二度と覚めませんようにと強く、強く願いながら。涙は全部、長い睫毛が飲んでしまったに違いない。もう零れない。

「ユア」

それでも時が来れば身体は起きる。幼子の世界に、朝も夜も未だ訪れたことはない。彼が知っているのは、万年水に湿ったような地下牢ばかりだ。

「ユア」

――ああ、恨めしい……。

「おい。まさか死んじゃいねえだろうな」

「うん？」

ユアは身を起こした。――朝である。

◇

腹は減ってるか、とゼンは言った。ユアは静かに首を振る。

「そっか。ま、無理はしなくていいけど、食える内に食っとけよ。病に勝つにはまず体の健康から」

どこぞのお医者先生のような事を言う。ユアは曖昧に微笑んだ。

食えと言いながら、ゼンが齧っているのはどう見ても草の茎だ。割と太い。ユアの指二本分はあるだろうか。じっと見ていると、食うか、とゼンが茎を差し出した。先がゼンの歯のためにささくれているのを見咎めると、ゼンは決まりが悪そうな顔をして茎の上下を持ち替えた。

「ほれ」

「うん、いい。ありがとう」

意外と甘いのよ、これが。そう呟くと、ゼンは再び熱心に茎をしゃぶり始めた。

ユアはうっつらと顔をあげる。空の東端が白み始めている。

ふと、ユアの人間離れした聴覚が微かな物音を捉えた。波が押し

潰され、また新たに生み出される音。間違いない。西から船団がやってきた。
ユアは半魔である。体を流れる血の半分は魔族のものだ。その魔族の元をずっと辿れば、神に愛された子エルフに行きつく。彼らは全てに於いて他の人種から抜きん出た人々だ。身丈も、美しさも、魔力も、そして五感も。長く遠い流れを経て、それを受け継ぐユアであるから、やはり彼の耳も鋭い。無論ゼンが海の音に気づくはずもなく。
頭はなかなか冴えている。競り上がるような動悸もない。ユアは満足してにっこりと微笑んだ。
さあ、最期の時がやってくる。快く迎え入れようではないか。

◇

グレイスは青靄（せいあい）立ち込めるバレリアの大地に足をついた。清々しい空気である。
さすがは果実の国と言われるだけある。港に立つだけでも緑黛の一端を思わせる木々を臨む事ができるのだ。頻繁に石を細工するため、その粉が常に宙を漂っているローハーとは風の澄み具合が違う。木の温もりと石の冷たさ。二者はこのような部分にもその違いを現すのかと、グレイスは少し検討外れの事を考えた。
「ダレス様には、とうに御着きのようで御座いますね」
なるほど、船が幾艘か並んで繋がれている。見張りらしい兵士がグレイスらをみつけ、膝を折って頭を垂れる、最上級の礼をした。彼らは見るからに驚き、うろたえている。それに構わず、グレイスは右手をひらと振っただけで、声の方に顔を向けた。静かな目で傍に立つのは、あの日彼が怒鳴りつけた従者だ。おまえなど付いて来ずともよかったものを、とグレイスが言うと、忠実な従者はにこと笑った。
「命は義に縁りて軽し、で御座います」

「何も戦争に赴く訳ではない」
「しかし二度と帰らんと御決意なさっていることに変わりは御座いませんでしょう」
グレイスは息を呑んだ。目を大きくして従者をみる。
「二十余年、畏れ多くもあなた様の御傍に控えさせて頂きました身です。不肖ながら、あなた様の御考えも、少しばかりは御察しできますかと」
ふ、とグレイスは微笑んだ。言いおるわ、と。
「止めぬのか」
「無駄骨でありましょうや。ですからここまで傅いて参ったのです」
あなた様は今御隠れになってよい御仁ではございません。明けゆくバレリアの冷える空気に、従者の声が穏やかに滲みる。グレイスは静かに目を細めた。

◇

「――『喧騒と慈愛に満ちた国に朝が来る』」
リヒィ＝ミヒィである。彼はある屋敷の、あろうことか屋根の上に断りもなくよじ登り、朝日を見ながら好い気分で嘯きの真似事をしている。
「『狂った宴はより一層熱を増しながらその終焉へと向かう。グレイス、ゼン、そしてユア。抗いがたい運命に導かれ、三人の男はついに同じ厚載の上に立った。それぞれに思うところ在り、又その抗いがたい衝動が突き動かす処に拠って』――どうだい、ヌエ。こういうのは」
怪しい笑みに口を歪め、ふり向く先には一人の青年。ヌエと呼ばれた彼もまた、屋根に腰かけて憚らない。鬱蒼と茂る森のような髪は絡み、色もまた珍妙で、淡い紫をしている。所々に白と黄にそれぞれ染め上げた髪が混じっていて、ひどく目立つ。着ているローブは質素なもので、その上あまり清潔そうではない。リヒィ＝ミヒィ

とまではいかずとも、彼もまた、相当に不気味ないでたちである。
「くどいな。それに『抗いがたい』を二度も使っている。だが最初の一文はなかなかいい。……そうだな、私ならばこう書く」
――喧騒と慈愛に満ちた国に朝が来る。饗宴は静かに終幕へ向かう。
グレイス、ゼン、そしてユア。三人の男はついに同じ大地の上に立った。それぞれの思いを胸に抱き、その衝動が突き動かすのに従って。
「ふうん」
リヒィ＝ミヒィはつまらなさそうに鼻を鳴らす。
「それよりも、みたまえ。ユア達が動き始めた。――ああ、いい具合。北西からダレスがやってくるぞ。皇帝は……おや、まだ港ではないか。急がねば祭りに間に合わんぞ。このままいけば、そうだな、彼らはスプダイの外れで鉢合せすることになろう。ヌエ、これはあなたの御膳立て通りか？」
「さあ」
ヌエは曖昧に呟いた。
「私は予見者ではないからね。ただ時々道を示してやれるくらいで。私の仕事は見届けること、そして書き残すこと。それだけ。なるべくこの世界に関与したくはない」
「ふうん。そうかい」
生の輪廻すら超えた者、そしてその輪廻を回し始め、この世界に命を吹き込んだ者との会話が、屋根の上で静かに交わされる。やがてどちらともなく黙りこむと、“時”が来る瞬間をみようと息を潜めるのだった。

◇

ゼンの顔は青褪めている。唇は戦慄（わなな）き、足は震え、目は左へ右へと動いて忙しない。

二人は叢(くさむら)の中にいる。普段はおよそ好んで寄る場所でもあるまいに、いまやどこをみても人、人、人である。しかも先日の野次馬共とはまるで違う。上質のローブを着込み、腰には業物と知れる剣を佩き、胸に紋章を光らせ、いかにも知識と力に満ち満ちた男たちが、群生する葦のように屹立しているのだ。これで怖れ入らぬはずがない。

「な、何だよこいつら……」

まさに一瞬の出来事であった。熱病にうなされたように海へと進み続けるユアに仕方なく従い、この叢に差しかかった途端、待ち構えていたように人垣が立ちあがったのは。

そこ、この国の首都にして最大の港町、スプダイまであと丘を一つ二つというところ。バレリアに決まった王はいない。一族の特性にならい“緑”や“風”などの名を冠した諸侯が群立しているのだ。彼らは互いに手を取り合い、バレリア各地に一定の勢力を守っているのだが、このスプダイだけは中立点とされている。訪う者を拒まぬ土地だが、何人の支配も受けぬ聖域でもある。ここでは全街人こそ王なのだ。砂漠のオアシスにも似た街である。貧は貧を呼び、細民街は細民街を生むが、富も往々にして貧を招くあたりがこの世の面白み。この一帯も例外ではなく、やはり乞食や浮浪者の類が多く集まる。それでこの囲い、乞食崩れの強盗団かと思ったゼンだがそうでもない。みよ、彼らの容貌。その伸びた背筋を見る限りでも、卑しい身分とは格が違うと感じられはしないか。

ユアは神妙にしている。突然の来襲にも動じていない様子だ。石のように静かで、彼がそうである限り、どうやら山のような者共も動かぬ腹でいるらしい。それがゼンの混乱を何とか限界の一手前で押し止めている。

彼らは一様に、ある人物を待っていた。その、ある人物というのが。

「――あら、まあ。何年振りかしら」

不意に、甘ったるい声が響いた。それだけで、まるで彫像が並ん

でいたかのようなこの空間に、ふとある種の人間臭さが生じる。傀儡に、魔女が命の息を吹き込んだに違いない。
「御久し振りですこと。地下牢以来ですわね、魂食らいのユア＝Ａ＝フロイアント」
ダレスだ。ゼンにとっては思いもかけぬ、女人の登場である。男ばかりが集う中で、彼女の存在は一際目立つ。ダレスとユアを忙しく交互に見遣りながら、ゼンはぽつりと呟いた。
「たまくらい？　いや、それよりも――あのおばさん、一体誰よ」
おばさんとは。畏れ多くも隣国の皇太后に向かってこれである、さすがはゼンの黒き舌よ。いくら知らないとはいえ、万が一彼女の耳に入っていれば――幸い、距離は十分に取られていたため、その突飛な台詞はユアのみ楽しむところとなったが――彼など一瞬で燃え滓とされることだろう。何せ、サルマンを使役して紡ぎ出す三本の矢は、光のように速く飛ぶのだ。一度刺されば、その肉をすっかり焼いてしまうまで決して抜けぬ。尤も、今度ダレスがその矢で射止めんと心に期しているのは、憎き血を継ぐユアただ一人であるが。
ゼンの言葉に、ユアは一頻（ひとしき）り笑った。ダレスは丁寧に整えた眉をしかめる。面白くない。いくらユアが知能の足りない愚か者とて、これだけの人数に囲まれては萎縮もしよう。そう思っての布陣であったのに、その中心にあってなお大笑の余裕とは。
「おばさんはないよ、ゼン。あれはね、あの女は、レザフのお嫁さんなんだよ」
「は？　レザフ？」
前の皇帝、とユアが言う。はあ、前の、ね。ゼンは曖昧に繰り返したが、刹那遅れて絶叫した。
「皇帝の嫁！　じゃあ、あれ、皇后かよ！」
「こーたいごー」
それが“皇太后”を指しているのだと気付くまでに、ゼンはしばらくの時間を必要とした。いや、それよりも。
皇后か皇太后かなどは正直どちらでもいいのだ。問題なのは、レ

ザフ――ユアに殺された一国の長――の妻が、こうしてここに現れたということ。なぜ、となれば、導かれる答えなど一つしかあるまい。

――ユアに引導を渡しに来たのだ。

ダレスはゆったりと微笑むと、わざとらしく鼻を手で覆いながら言った。

「お友達も御一緒ですのね。随分と小さなお子だこと。それに肌黒くて……みるからに臭そう。ここまで臭いそうですわ」

「なんだと！　も一遍言ってみやがれ、この口裂け毒女が！」

言ってから、しまった、と口を押さえるも既に遅い。持ち前の悪い舌が、考えるよりも先に反応してしまったのだ。ゼン一生の不覚である。ダレスの顔がみるみる引き攣っていく。それこそ毒の女かのごとき形相。怯えで泡すら噴きかねないゼンの隣で、ユアがけたけたと笑い転げた。息をするのも苦しそうだ。

まさか彼の言葉をきっかけにした訳ではあるまいが、ゼンがひたと口に手を当てると同時に、不動かに見えた軍勢が揺れた。手に手に剣を抜いている。禍々しい刃が朝陽を受けて白く輝く。しかしこれはただの威嚇に過ぎない。裁きを下すは飽くまでダレスが望むところ。

一際小高くなった丘に立つダレス皇太后は、滑らかな詠唱の後に、地獄の劫火もかくやの威厳に満ちた火の精霊、サルマンを現世に呼び出した。いや、最後こそスージーにその座を譲ったものの、やはり長く魔法学校の頂辺を務めた女である。現れたサルマンの美しさよ。魔導師団から感嘆が漏れる。静かだった空気は渦巻く熱風と化してゼンを襲う。

「なんてこった。あの腐ればばあ、魔導師かよ……」

ゼンの膝から力が抜ける。あの女、どうやら訓練を受けたらしい魔導師である。化け鼠とは訳が違うのだ。しかも加えてこの軍勢。ユアの力は数度目にしただけで常人のそれでないと分かる程であったが、やはりそれにも限度がある。その上今や彼の命は風前の灯火。

薔薇が深紅に染め上がるのは時間の問題である。
火の精霊サルマンはダレスの傍に侍り、下知や今と待ち構えている。だがダレスは動かない。どうやらゼンの表情を恐怖が満たしていく様を見て楽しんでいるらしいのだ。つくづく醜い女である。
「スージー」
うっとりとした声音で、ダレスは今は亡き学友に呼びかける。
「愉悦の“時”が来たわ。あなたにこのあり様を見せてあげられないことだけが残念」
左の拳を鼻の先に突き出し、添えていた右手をゆっくり引き絞る。サルマンの姿が一度揺らめき、ダレスを取り囲んだかと思えば、やがて光は集束して彼女の手元へ。ゼンはその構えに見覚えがあった。あれはかつて、ユアが火の矢を放った時と同じ体勢ではないか。射止められ、壁に貼りつけられたまま燃えて、塵となった化け鼠の姿が脳裏に蘇る。だが、ユアはしんとした目でダレスを見据えて離さない――。
「静まれ！」
突如、凛とした声が張り詰めた空気を切り裂いた。ゼンを、立ち並ぶ魔導師共を、そしてダレスさえ震え上がらせる、有無を言わせぬ強い声。
ゼンは声が放たれた方をみる。二人を囲っていた人垣の一部が割れ、朝日を背に受けた一群が、そこを悠然たる足取りで進んでくるではないか。
先頭に立つ身丈の優れた一青年。腰まである小麦色の髪を揺らせ、空色の瞳を意志に燃やし、薄い唇を引き結ぶこの男こそ、ローハー国第三十七代皇帝、グレイス＝E＝ロウである。ダレスの率いる魔導師団にどよめきが走る。彼らもやはり、皇帝を絶対と崇める一臣民なのだ。動揺が色濃く立ちこめる。若く、気高き君主の姿。それは彼らに囁きかける悪魔の声音を薄れさせた。
グレイスは鷹揚な足取りで歩を進める。その傍に従者がぴたりと添う。グレイスの視線は躊躇いなくユアを正面から捉える。ユアも

また彼に向き直る。同じ色をした二対の瞳が交錯する。
「これはこれは」
ダレスは腕を下ろさない。ユアに狙いを定めたまま、細められた目だけをグレイスに向けて。
「グレイス皇帝。朝早くから御苦労な事で御座いますわね」
「義母上にも」
対峙するユアとダレスの中間地点に差しかかると、グレイスは静かに足を止めた。義母に向き直り、胸に手を当てて軽く頭を下げる。
いっそ粛々と進む時の中、ついに混乱が頂点に達したのはゼンである。次々に新手が現れるのだ。ゼンにとっては全て新顔である。加えてあの長身の男、グリースだかグレイスだかと呼ばれたか、事もあろうに彼は……皇帝だって？
「義母上にはかつて見ぬ勇猛な御姿ですな。して、何とされる御つもりです」
「知れたこと。あなた様の弟君の呪われた心臓を、ちくと刺してやろうと思いますのよ」
ダレスは妖魔のごとく美しい笑みを浮かべる。それでこの台詞さえなければ、ゼンはうっかり見惚れていたかもしれない。流石、老いても尚美しいかつての才女である。
「ん？」
ゼンが何かに気づく。
「弟君？」
グレイスを指さし、それから今度はユアを指す。ユアは薄っぺらな表情のまま。
「え？　ユアは皇帝の弟なわけ？」
ダレスが艶のある声で笑う。
「正しくはしがない庭師の家の二男坊ですわ、臭い御方。――グレイス皇帝といえども所詮は取るに足らぬ家系の出。その上、後に穢れた血を世に生み落とした女の腹で育ったとなれば」
まるで取って置きをひけらかすかの口ぶりであるが、しかしてん

で事情を知らないゼンがそれを理解できるはずもない。むしろ、その言葉に動揺したのはローハーの臣民らであった。悲鳴にも似たどよめきが上がる中、ダレスはついに腕を下ろし、代わりに声を張り上げた。

「皆の者、今こそ真実を聞け！　下賤なる魂食らい、ユア＝A＝フロイアントの生みの母は、かの高名なスージー＝C＝イスケ。見目麗しいグレイス皇帝の、実母にあらせられる御方ぞ！」

どよめきは今度こそ悲鳴に変わる。グレイスの傍に控える従者すら狼狽えた。当然だ。頑なに秘められていたユアの身元が、今ここに、ついに明らかとなったのだから。それも、グレイスとは血を分けた兄弟であるという。これが驚愕せずにおれようか。

「グ、グレイス様……」

取りすがるように呼び掛ける従者を、しかしグレイスは見返りもしない。ダレスを睨みつけながらただ一言、事実だ、とだけ言った。怒りを丁寧に噛みしめたかのような声である。そこではっと気付いたことに、握り締めたグレイスの拳から、つと朱の滴が垂れているではないか。きっかけさえ与えれば、彼は猛犬のように踊り狂って、ダレスの喉元に噛みつくのではなかろうか。そう思い身を竦ませるほどの拳の震えようである。

憎しみと混乱。怒りと愉悦。様々な感情がごうごうと渦巻き、その隙間に一瞬の静寂が訪れた、その時。

「――は、は、は」

弾む毬のような笑い声。場違いに澄んだ明るい声は、ろんろんと草の上を跳ねる。

ゼンは呆気に取られてユアをみつめる。身を屈め、肩を震わせ、腹を揺らしながら狂ったように笑うユアの姿を。

「はは、は。あはっ、あはははは！」

「ユ、ア……？」

高らかに響くユアの哄笑。今こそこの場を支配する感情はただ一つ。

――恐怖である。
圧倒的な恐怖が、ユアは笑っているにも関わらず、抗いがたい力で諸人に襲いかかる。ついには剣を取り落としてしまう者すら現れるとなれば。
ゼンは気付いた。ユアの、目。血を前にしても変わらず澄んでいた空色の瞳が、困ったように笑っていたその顔が今や、
「……狂って、いやがる……」

13　揺るる灯火

「滑稽だ」
地の底から湧き上がるかのごとき声である。
ゼンはぎょっとしてユアを見た。笑いに震える身体を抱き締め、ユアは小刻みに揺れている。ようよう上げられた顔は正に狂易の様。そのあまりに壮絶な彼の顔に、ゼンはこれまでを共にしたユアが、かつてどのように笑っていたかすら思い出せなくなる。ゼンの名を呼ぶ彼の声がどのように響いたか、ゼンにはもう分からない――。
「恐ろしく滑稽だ。痴れ者が。皆、絶望のうちに死ね」
狂気、怨咎（えんきゅう）、憎悪、そして又狂気。ユアが呟く呪いの言葉に、大魔導師団の威勢は跡形もなく打ち崩された。集団とは脆いものである。一人挫ければ悪病は瞬く間に周囲にまで伝染する。我を忘れて諸手を振り乱し、逃げ散る者は数知れない。輝く剣が地に落ちる様は、夜空を流れる星のようにさえ見え、幻想的で場違いなこと甚だしい。ユアはくつくつと喉を鳴らした。
「グレイス」
呼ばれてグレイスは身構える。足の先から頭の頂辺までを、細かい震えが駆け抜ける。
ぞっとするほど冷たい声で、しかし口調だけは平生の彼らしく、ユアはにことこう言ったのだ。
「血文字の言伝ては読んでくれたかな」
はっとグレイスが息を呑む音は、ゼンの耳にまで届きそうな。彼の噛み締めていた唇が薄ら開く。場の異常さを堪えんとしてか、大地を踏みしめるように広げられた両足から、すうと力が抜けていくらしいのをゼンは認めた。
「血の……まさか、おまえ……」
代わりに呟いたのはダレスである。ユアは張りついたような笑みをグレイスから逸らさない。

そうだよ、とユアは答える。
秘鑰はついに鍵穴に嵌まったのだ。血濡れた秘史は今こそ陽の照る元へ。ユアの甲高い笑い声は、深く閉ざされた扉が軋む音のよう。
「――あれを書いたのはおれ。無知で阿呆なユア＝A＝フロイアントの姿は虚像、隠れ蓑に過ぎない。皆皆、よくもまあ騙されたものだね。目隠しされたまま歩き回る君達は、本当に馬鹿馬鹿しかった。お蔭でたっぷり楽しめたよ」
ユアは笑う。気狂いの哄笑。
「おれは全部知っている。スージーの罪、ローザの罪、レザフの罪、ダレスの罪、グレイスの罪、おれ自身の罪、ローハー全臣民の罪。それから」
ユアはくるりとゼンにふり向く。それだけでゼンの身が無意識に竦みあがる。
「ゼン。きみの罪」
「俺の……」
ユアはこくりと頷く。そう、きみの罪。生まれ出でたこと、それがきみの罪。おれと同じ、穢れた血が背負う業。
ユアはゆっくりと鼻から息を吸う。ああ清々しい、バレリアの空気。果実の甘みを含んだ風が、ユアの肺を巡っていく。ユアはうっとりと目を閉じる。この瞬間、この“時”。どれほど待ち望んだ事か。どれほど、どれほど……。
さあ御立ち合い。穢れ切った命を掛けた、ユア、一世一代の種明かしを始めよう。

第十三話　揺るる灯火

かの人の声は、風に乗ってやってきた。
「だれ？」
ユアは顔をあげて問いかける。微かに自分の名前を呼ぶ、くすぐるような柔らかい声。

「だれなの？」
しかし返事はない。
ユアの妙な様子を見咎めたらしい。彼の教育係が立ちあがり、しなる鞭を手にやって来る。びしりと壁を打つ音に、ユアは小さな身を震わせた。痩せ切った両手を交叉して顔を庇う……。
声は執拗に呼びかけてくる。次の日も、その次の日も。ユアは鞭で打たれることを恐れたが、優しい誘惑に抗うことができない。新しい傷をいくつもこさえる内に、ユアは唇を動かさず、喉を震わすことすらもなく、その微かな声と意思を交わす術をみつけた。ユアの顔が嬉しさに綻ぶ。
――きみはだれ？
不思議な声は、ユアの耳元だけで楽しげに弾む。
――僕の名前はリヒィ＝ミヒィ。永遠の子どもだよ、ユア。
――えーえんって？
――悲しいことさ。
――ふうん。
ユアに出来た、唯一の話し相手である。血の臭い、精霊の輝き、鞭の音に加えて、この優しい声がユアの友だちとなった。ユアは食い物を貪る餓鬼ように会話を求め、楽しんだ。
ある日リヒィ＝ミヒィが言う。
――ユアよ。きみは囲われた世界で暮らして幸せか？　なにも知らず、ただ好いように使われるだけで満足か？
ユアには彼の言うことがよく理解できない。しあわせ、まんぞく？　なんだろう、それは。
――僕はきみに新しい喜びを見せてあげることができる。楽しい祭りにだって参加できるさ。
――たのしい、まつり。
――そうだよ、ユア。きみには世界に復讐する権利がある。ふくしゅうするけんり。ああ、きれいな言葉。
――真実を知るのだよ、ユア。真実の意味は分かるか。甘く、時

に苦いものだ。噛めば噛むほどその舌触りを確かにする。どうだ。この珍味、味わってみたくはないか。

「リヒィ＝ミヒィ」

声の芯まで震わせて、ダレス。

「あの男が……呪われた御子が、おまえに知識を与えたというの？この国の真実を？」

「そう。彼がおれの目を覚まさせてくれた。おれだけが唯一、彼のお蔭で、ローハーの眩惑の中から抜け出すことができたんだ」

「そんな……なぜ……」

なぜという言葉は彼に通用しない。ユアは静かにそう言った。

「リヒィ」

呟くようにゼンが漏らすと、ユアは彼にふり向いて薄っぺらに笑った。

「呪われた御子。最強の魔導師。輪廻の外より見守る者」

グレイスの脳裏をかの人の姿がよぎる。薄汚れた衣服、不気味な被り物、耳まで裂けたかのような口。彼が、彼こそがユアをこの場へ導いたのだ。痛みばかりの真実を教え、怒りにレザフ皇帝を殺させ、その身に呪いを受けさせて。

ユアが言う通り、彼になぜという言葉は無駄だろう。問えばきっと、彼はこう答える。

――暇潰し。

グレイスの身がぞくりと震えた。リヒィ＝ミヒィ。永遠の子ども。遍く蔓延る不幸を食らい、世界の終焉に目を凝らす男。

ユアは言う、罪がその裁きを受ける“時”がきたと。甘美な酔いに浸るかのような声である。

「おぞましいダレスにレザフ。憎悪の女に愚かな男め。きみ達最大の罪は、人間と魔族を交わらせ、穢れた血をこの世に生み落とさせたことにある」

ユアの細い指にささされ、ダレスはひぃっと悲鳴をあげた。

「スージー。希代の才女にして愚者。我が子を手に掛けんとした子殺しの罪」
グレイスがはっと息を呑む。地下牢で生まれたユア。そこで死んだスージー。まさか彼女はユアを、我が子を殺そうとし、その末に……。
「庭師見習いのローザ。子を売り、妻を売り、強欲の女に悪魔の提案を囁いた罪」
いっそ厳かでさえある静かな語りが、隠された罪を暴いていく。澄んだ朝陽の元に晒していく。諸人の渇いた口は動かず、ただユアの面を見守るばかり。息の気配すら身を潜め、ついに開かれた重き扉の前に、身じろぎもせずに佇んでいる。
「第三十七代皇帝、グレイス」
ごくりと音を鳴らして唾を呑む。ユアの瞳が――血の繋がりを感じさせて止まない、母の面影を残す瞳が――グレイスをひたと捉える。
「望まれざる血を継ぐ者。母に愛され、臣民に愛され、陽に愛されて育った罪」
突然、ユアは腹を震わせて笑った。笑いながら、グレイスを睨みつけた。
「ただ、義父の歪んだ愛情だけには参っただろうね。あの女に似ていたことが災いの始まり」
グレイスの体がびくりと跳ねる。嫌な汗が噴きだし、顎を伝って垂れた。
「十のつく日の秘め事。警衛の兵は皆知っていたよ、グレイス。男の身でありながら、義父の愛を受けいれなければならない、見目麗しい皇嗣の苦痛は」
「……」
グレイスの視界が白む。熱くなった血が耳の奥を流れる音が聞こえる。その彼の傍で従者が唇を噛んだ。あまりに強く噛んだために皮膚が破れる。彼は知っていたのだ。常にグレイスの近くに侍る彼

だからこそ、十のつく日の翌朝は、グレイスの体から麝香の匂いが漂っていることに気づいてしまった。そしてそこに見つけてしまったのだ。スージーを諦めきれなかったレザフが、養子たる彼に強要した、許されざる情事の跡を。

一頻り笑い終えると、今度ユアはぎりりと歯を噛んだ。穏やかでさえあった声が激しさを増す。グレイスを睨む目に憎悪の炎が宿る。二人を繋ぐ、切れる事のない血の交わりが、ユアの怨嗟をより一層強く深めるのだ。

「だがその程度の痛みで許されると思うな。おまえの罪は、真実を知らない罪！　無知のまま生を享受する罪！　血濡れの玉座に悠然と座る罪！　目を塞がれ、耳を塞がれ、人の手に守られて生きる罪！　おまえが息をし、その心臓が一つ震えるだけでもおれは――」

かっと開いたユアの口から、大量の血が噴き出でた。鎖が切れたように、魔導師の一団がざわめきを上げる。あれこそが皇一族を包む最強の守り、恐るべき魂吸いの呪いの実態である。血を、命を、枯れるまで吸い尽くす美しい薔薇。一度身に刻まれれば焼かれても消えぬ、深紅の薔薇。

グレイスは目を見張る。青い草の上の朱の溜り。あの夜、彼の回りが動き始めた十のつく日の夜、レザフ先帝の寝室でみた血溜りとはまるで違う――息が詰まる程な鮮やかさ。あの血。目に飛びこむあの赤い血こそ、穢れ、嫉み、悲しみ、策謀、屈折した愛の果てに生まれ、そして我が身の半分を今も流れ巡る、血。

崩れ落ちるユアにゼンが取り縋る。正気の沙汰ではない。ユアは全てを知った上で、全てを承知した上で何もかもを嘯きで通した、知能的な殺人鬼なのだ。スージーの冴える頭脳は彼の中にも生きている。ユアは何も知らない傀儡ではなかった。無垢の皮をかぶり、笑みの奥にぎらつく刃を秘め、衝撃と恐怖の裁きを下すこの“時”だけを待ち、生きてきたのだ。有能ぶる大臣らでさえ見破れなかった、諸人の想像の範疇を超えた、彼は類稀なる策略家なのであった。

しかしゼンにそれを考える余地はない。彼の行動規範はただ一つ、

己(おの)が信じるままに動け。目の前で苦しそうに血を吐く殺人鬼がいればどうする？　――助けたいと、思う。
「ユア！　しっかりしろ、ユア……！」
悲痛な声だ。涙に濡れている。その場にいる全員が茫然と立ち竦む中、ゼンの震える声だけが響く。ユア、ユア、しっかりしろ……。
ユアは汗にまみれた顔をあげた。灼けた肌に幾筋もの線を描き、ゼンの顔は見事なまでに間抜けだ。その顔にもはや恐怖の色はない。ただ救いを求める人間に、ユアに向けられる慈愛の念のみ。ゼンの生き様が、ユアの呪われた過去が築いた壁の向こうから、そっと手を差し伸べる。
「ゼン……」
駄目だよ、とユアは言う。ユアはその手を取ることができない。なぜって、
「ゼン。きみの罪はね」
その身体に流れる不浄の血。ユアは首だけを動かしてグレイスをふり仰いだ。
「おおまえの父が、家族を悪魔に売り渡した男が、その後どうなったか。教えてあげようか。海を渡り、バレリアの地へ辿りついた男は、事もあろうに――新たな胤を残した」
静寂。ユアは自嘲的な笑みを浮かべた。
「ゼン。ゼン・デイアフォード。きみのその姓は偽りの姓。本当の名は……イスケ。ゼン＝C＝イスケ。バレリアに逃れたローザがこの地の女と交わって出来た子、それが、きみ」
――ゼン。皇帝グレイスを中に据えて、おれたちは、おれたち三人はね、呪われた血に縛られた兄弟なんだよ。
罪人に罰を。呪われた血に永久の眠りを。
「なんと……」
グレイスは思わず声を漏らす。声は恐怖に、驚愕に震えているが、

それを今さら気にかけてどうなろう。血と血、憎しみと憎しみがぶつかるこの場で、皇帝の威厳を着込む必要がどこにある。
あの子ども。ゼンとかいう黒肌の子ども。まだ成長の最終段階にも至っていないような彼が、血を分けた、もう一人の実弟だと？
ゼンは崩れるユアの肩を抱きとめたまま動かない。ユアの言葉が耳に刺さっている。刺さっているのに、その意味をまるで理解することができない。
――呪われた血に縛られた、兄弟なんだよ。
呪われた血。スージーの、そしてローザの。思い出話にしか聞いた事のない、ゼンが生まれる前に病を得て死んだという父親が、今の悲劇の幕を開けた張本人、ローザだというのか？　そしてその血を継ぐ片割れが、現ローハー皇帝。まさか。ゼンはしがない日暮らしだ。乞食同然の“なんでも屋”だ。女手一つで彼を育て上げ、働きすぎた末に呆気なく死んでしまった母親に、あの世でどやされるのはご免だからと、生にかじりつく毎日を送る浮浪者だ。秘鑰の国から海を渡ってきたおぞましい呪詛が、この身に刻まれているだなんてことは、
「あり得ない。そんなこと、あり得る訳が……」
「でもそれが真実だよ。真実は時に信じがたい苦み辛みを含む」
「だけどそんな」
言いかけてゼンは口をつぐむ。真っ直ぐに向けられたユアの瞳。青いガラス玉のような目に浮かぶ、これは憎悪と殺意の光。その鋭すぎる光に、ゼンは確信せざるをえなくなる。これほどの怨念、まさか虚像の上に生まれるはずがない。ああ、ああ、俺は――俺は、憎しみに満ち溢れた血の輪廻の、最後に行き着いた果てだったというのか。
――おれは、ゼンを殺せないかなぁ。
あの日、涙ながらユアが漏らした言葉の意味を、ゼンは今こそ知る。
「この……」

震えた声である。ダレスの、醜く肥えた身体の内から絞り出されるような声。
「穢れめ。揃いも揃って不吉な。今ここで、全て刈り取ってやるわ！」
絶叫である。サルマンの衣が風をはらみ、三本の矢は再びユアに向けられた。地獄の劫火がユアの心臓を狙う。ユアはゆっくりと立ちあがり、まだ取り縋って離れないゼンの胸を、右手で強く押しやった。
「ユア！」
「彼を守れ！」
ローザの血を継ぐ二人の男の声が重なる。刹那、青い草を千切って風が舞う。
グレイス率いる精鋭の魔導師団が、彼の願いに応じて白の扉を開ける。瞬く間に姿を現す何十もの精霊達。赤に白、青に緑と、目に鮮やかな薄衣が宙にたなびく。
奇声と共に放たれたダレス自慢の三本の矢は、風を切ってひょうと飛び、ユアの痩せた身体を貫くかと思われた。が、一瞬早く彼を囲んだ精霊群が、身を挺してそれを防ぐ。炎の矢は火花となって散り、それに射られた女たちも、金切り声だけを残して消え失せてしまう。彼女らを使役していた魔導師は、力を失って次々に倒れる。
緑煙のように優しくゆらめく精霊らに包まれて、ユアはその青い目を見張った。
――どうして。
「邪魔立てなさるおつもり！？」
赤い唇の端に泡など浮かべながら叫ぶダレスに、グレイスはまるで応じない。魔導師の一団を残し腰の剣を抜きさって、ユアの元へと駆けてくる。ただ一人の従者が、こうなればどこまでも、と彼の後ろをひた走る。
――なんで。
復讐の念に満ちたユアの心に一握の砂にも似た空白が生まれる。

が、それも束の間であった。息を切らし、熱気に顔を染めたグレイス皇帝。跳ねる小麦色の髪、ユアを映す空色の瞳、ああ――母の面影。この首を締め、この身を捨てて己だけ助かろうとした、許しがたい女。忌まわしい記憶が蘇ると共に、隙間は湧いて止まぬ憎しみに再び埋め尽くされたのだ。

「浅ましいぞグレイス！　恩を売って裁きを逃れようという気か！」

「馬鹿な」

風を受けずとも揺れる精霊の衣の間をくぐりながら、グレイスはふと笑みさえ漏らす。握り締めていた剣を放り捨て、あの夜、あのおぞましい夜、触れたい衝動に駆られながらもついに動けずにいたあの肩に、今こそ、両の手を伸ばす。細く、頼りない肩。これまでどれ程の重みがこの肩に圧し掛かり続けたことだろう。想像もつかぬ。幾つの夜を、この肩は震えて過ごさねばならなかっただろう。想像もつかぬ。

今、それを抱く。

勢いを余らせて飛び込んできたグレイスの身体に押され、ユアは大きく仰け反る。朝暾（ちょうとん）が照らすユアの瞳は、驚愕に打ち震えていた。力なく開いた口は、戸惑いの声すら漏らさない。

許される罪ではないと、死を以てしても償いきれる罪ではないとは分かっている。だがどうしても体が動く。愛を知らずに育った、母親にまで疎まれ殺されかけたこの少年を、この弟を、抱き締めたいと思ってしまうのは、これは罪の上乗せだろうか。少しでも温もりを与えてやりたいと、彼はきっと見た事もない憎しみのない世界、春の風のような心地よさを感じさせてやりたいと思う、この願いは欲深い己の傲だろうか。

それでも。

ユアの背を掻き抱く手に力をこめて、グレイスはその髪に顔をうずめる。

血濡れた皇一族の歴史。その上に立つこの浅ましい身。全てを捨てようとグレイスは思う。このような少年を犠牲にし、ようやく成

り立つような下らない国なら、そんなものは全て。
「離せ！」
気を取り直したユアが叫ぶ。腕を我武者羅に振り回し、まるで予想だにしない行動をとるグレイスを引き剥がそうとする。しかし彼は離れない。元より体躯に歴然の差を持つ二人だ。胸板厚いグレイスを、ユアの細腕がどうやって押し退けよう。
誰もが呆けたように二人を見守る。ダレスは両手をだらりと下げたまま。精霊でさえ、この哀れな兄弟の結末やいかにと様子を窺っているようだ。ユアばかりが気迷いに満ちた声で叫んでいる。
「触るな！　おれに触るな！」
どこか懇願するような響きですらある。
「今更理解ある振りなどするな！　おれはおまえを殺すぞ！」
「それでおまえの気が済むのならそうすればいい」
ユアの騒ぎがぴたりと止まる。
「おまえの言う通り、私は罪深い男だ。目晦ましの中にあえて身を置き、真実を探そうともせず、用意された居心地のいい椅子に座って」
許してもらうつもりなどない。ただ、言わずにはおれんのだ。
「済まない――おまえを、愛してやれなくて」
ユアの喉がひゅうと音をたてる。
震える手がゆっくりと持ち上がる。この、体を包み込む確かな温かさ。地下牢の冷たさに身を伏せて眠った幼児期の記憶が、じわり、じわりと溶かされていく。
――おまえを愛してやれなくて、済まない。
ユアの手が更に大きく震える。しかしなぜ震えるのだ。なぜグレイスの背に伸びようとする？　この温もりを、この優しさを、まさか受け入れたいと思っているとでも？
ユアは歯を食い縛る。唇の端が切れて血が滲む。小刻みに揺れる歯の隙間から荒い息を吐き、同時に己の腰に手を伸ばす。驚いたゼンの口が開くよりも早く、光の速さで抜いた剣を、素早く逆手に持

ち替える。
――愛してなどほしくない……愛してなどほしくない！
「ユア！　駄目だやめろ！！」
ゼンの絶叫が走る。しかし剣は振り下ろされる。まるでユア自身の迷いを断ち切るかのように、より一層その勢いを増して。
鮮血が、舞った。

14　説法懇懇

鮮血が舞う。赤い霧がゼンの顔にまで散る。身を竦ませる臭気が、光り輝く叢を走る――。

グレイスの腕からついに力が抜けた。ユアを掻き抱いていた手がだらりと下がる。その脇腹を、煮え湯のように熱い血がぬらりと流れていく。

「おまえ……」

掠れた声。弱々しい皇帝の声に、彼の従者は困ったように少し笑った。そしてそのままどうと倒れた。彼の体重がユアの手から剣をもぎ取る。朱の糸が跡を引く。

忠実な彼の従者は、凶刃をその身に突き立てたまま横たわる。ユアの狂気が牙を剥く寸分前、彼は皇帝に覆い被さってその身を守ったのだ。皺が目立ち始めた彼の顔には、どこか満足げな表情さえ見える。グレイスは膝を折り、震える手で彼に触れた。

「おまえ、どうして……」

従者は伸ばされた君主の手に己の手をそっと重ねる。年季を経て固くなった彼の肌から、一秒、一秒を追うごとに温もりが引いていく。

「あなた様は、私の、月に御座いました。気高く、御美しく……触れることは、叶わず」

そう言ってにこと笑う。緩んだ唇から血が一筋零れ落ちる。

「御許し……下さい。私は、最後まで、あなた様の御心を……開いて差し上げることが、出来なかった。鉄と言われたあなた様の厚貌を、取り除いて、差し上げることが……」

グレイスは従者の手を握り締め、自らの頬に押し当てた。青の瞳がさっと潤み、涙が――初めて先帝に抱かれた夜に枯れてしまった涙が――ぽろりと落ちた。震える唇は愛する従者にかけてやる言葉すら見つけることができない。

「ああ、しかし今際の時に、ようやく……ああ、ああ……グレイス様。私は先に、あなた様の御感情を揺すぶる魂食らいが、羨ましく……妬んだことが御座います。しかし、もう……満足です。私めの人生にも、あなた様の御涙が、意味を、与えて……下さった」

ユアは数歩よろめき、草の上に尻をついた。浅い呼吸ばかりを繰り返す。

青褪めながら言葉を紡いでいた従者の唇が、ついに石のように固まった。グレイスは俯いたまま、彼の手をその胸の上にそっと置いた。

誰も動くことが出来ない。ゼンも、ダレスも、魔導師団も。彼らは皆、見世物小屋を出た直後のような一種の高揚感に浸っていた。偉大な臣民が一人果敢無くなったのだ。それを見世物に喩えるとは何たる不義か。だが事実、この恍惚とした場の空気は、間違いなくその形容に当て嵌まるのだ。ああ、何と美しき主従愛。魔導師団の何人もがこう思ったろう。願わくは我が身の幕引きもかくあらん、と。だが実際にその場に立てば、その内のどれ程が彼に続いて愛を貫き通す事が出来るだろう。四半分にも届くまい。そういった意味合いでの見世物である。舞台と客席の間には、僅かに空気が漂うだけでありながら、超え難い一線がいつも引かれているという事。

誰もの目がうっとりと細められた、その空気を打ち砕いたのは、一つの甲高い笑い声であった。

第十四話　説法懇懇

「はは、は！　馬鹿馬鹿しい、まるで喜劇だ！　これはおまえの脚本通りか、グレイス。おまえは周りの者に、命を投げ出す事こそ美徳と教え込んだのか！」

ユアは笑う。笑う事で己の震えを隠そうとする。

彼には理解できない。これまで多くの貴人官人を手にかけてきた。その誰もが、彼が使役する精霊らを前にすれば、床に伏して命を乞

うたではないか。高潔の士と謳われた人物でさえ。人間は人間を踏み躙る。人は何故結び合うのか？　他を陥れるためだ。己の苦痛さえ感じなければ、どんな悪業にも顔を顰めることすらせぬ。思いだせ、地下牢に響く女の声を。

――罪深いのはこの子よ。私だけ、私だけここから出して、お願い……。

誰もが亡骸の上に立って尚平然としているのだ。人は誰しも己が身が一番可愛い。そうだろう？

「その男もあの老人も、哀れなものだな！　自ら進んで、血濡れの皇帝の為に身を捧げるとは！」

「……ニンフのことか」

覚悟はしていた。叢に、ユアと見知らぬ少年だけが立つのを見た時に、もう。

あれは老いという言葉の似合わない男であった。年を得て益々壮健なかの老成は、その頑固さ岩の如しといった堅物である。元より覚悟あっての事、いくら魂食らいが恐ろしいとて、途中で逃げ出す人物ではない。その姿が見えないとなれば、

「おまえが、殺したのか」

「そうだよ。おれが殺した。朽ちかけた骨を全て折って皮膚を焼き、爪を剥いでローハーの海に捨ててやったよ」

グレイスが唇を噛む。湧き上がる怒りが彼を芯から震わせる。

「全部おまえが悪いんだ！　おまえが皆を殺させた！　おれが地下牢の床を掻いている時、おまえは柔らかな羽根布団に包まれて眠っていた。おれが鞭打たれている時、おまえは音楽の調べに耳を澄ませていた。おれが誰かの心臓を抉っている時、おまえは肉団子を食べていた……！　おれが、おれが――」

リヒィ＝ミヒィの声が蘇る。やがて皇帝の椅子に座る男は、半分はきみと同じ血を継いでいるのだ。きみを殺そうとした、あの女の魂を体に宿し、その愛を受けて育ったのだぞ。対するきみはどうだ。知っているのは鉄の扉の冷たさばかり。どうだ、憎くはないか。こ

れが、同じ運命の元に生まれてきた兄弟の、あって許される姿だと思うか？
「おれが母親に首を絞められていた時！　おまえは温かな笑顔の中にいた！　死ね！　おまえなど死んでしまえ！　おまえなど」
しかし、恐ろしく鈍い音が彼の言葉を遮ってしまう。獣のような素早さで立ち上がったゼンが、ありったけの力を込めた右の拳でユアの頬を殴りつけたのだ。突然の事態を呑みこめぬまま、ユアは横っ跳びに飛ばされる。薄っぺらい彼の体は、いっそ面白いほどに宙を舞う。
「自分の不幸を売り物にするなよ！」
ゼンが叫ぶ。それを聞き、ユアはようやく頬の痛みの理由を知るといったあり様。
「呪われた過去を押し並べて、それであんた満足かよ。ああ可哀想なことだねえって泣き真似の一つでも貰えりゃ、あんたそれで満足かい？　身を投げ出して、ただ少しだけでもあんたを愛してやりたいって膝を折った皇帝さんをさ――あの人、兄貴なんだろうが――それを殺して、あんた本当に満足かい！」
草を散らして跳び上がり、ゼンはユアの胸倉に掴みかかった。が、途端にその勢いがふっと崩れる。溜息のように力なく、ゼンは言った。
「あんた悲しいよ。勿論その過去も悲しい。だけどやっぱり、あんた自身が悲しいよ」
「おれが、悲しい？」
「ああ悲しいよ。涙が出るね。だってあんた、逃げてばっかじゃない」
ユアは眉を顰める。逃げる？　おれが？
「逃げてなんかないよ」
「いいや逃げてる」
「逃げてなんかない！」
「逃げてるんだよ、あんたは！」

上半身を起こし、ユアもまたゼンを捩じり上げ、揺さぶらんという勢いである。だが体勢の上でやや有利のゼンが力勝った。
「あんた復讐って言葉に逃げてるんだ。復讐の檻だよ、あんた進んでそこに隠れてるんだ！　確かに檻の中まで鞭は届かないだろうよ。隅で耳を塞げば罵詈雑言も聞こえやしねえ。だけどあんたの頭を撫でよって手も届かねえんだ、あんた可愛いねって声だってそこじゃ聞こえねえんだよ。あんたが逃げてるから、あんたが復讐の念に囚われたままだから、あんた誰にも愛されなかったんだ。違うか？　あんたが隠れ続けたばっかりに、悲しみが新しい悲しみを生んだんだ。違うかよ！」
「違う！　おれは逃げてない、おれは悪くない！　悪いのは――」
「そういう言い訳が逃げてるって言うんだよ！」
ユアはびくりと肩を竦ませる。熱気に火照るゼンの顔。かつてこれほど激しい叱責を受けた事があっただろうか。ユアが知るのは裂けるような痛みと、打ち据えるような冷たい声ばかり。ゼンの言葉に暴力はない。なのに、ユアは痛みを感じる。痛い、痛い……だけど、どこが？
「なあ、ユア」
ゼンの声から煮え湯の熱が消える。残ったのは舌に甘い白湯の温もり。
「確かにあんたは悪くない。あんたが生まれた事は全然、悪くないんだ。誰もあんたを責められないし、あんたもあんたを責めちゃいけない。だけどね、いけないのはその後だ。あんたが言う“真実”ってやつを知ってさ、靄の中から抜け出してさ、あんた、どうした？　――あんた、それから逃げたんだよ。正面から向き合うのが怖くて、よくよく考えるのも嫌で億劫で逃げたんだよ、復讐って言葉を都合よく使ってさ。だって、そうだよな。辛い悲しいって過去を並べて見せてさ、だから復讐するんですって言えばさ、誰もあんたに同情せずにはおれんだろうよ。いや、だからって結局どういう“だから”だい、あんたは一体何をどう怨んで裁きを下そうっていう

んだいって、そんなこと言う奴いないだろうさ。確かに許しちゃおけない罪もあったさ。俺自身聞いてぞっとする悪事もあったよ。だけど根本的な部分で、あんたやっぱり逃げてる。考えた事はあるか、え？　皆に愛されて育った罪って、あんた言ったけどさ、あんたその言葉の本当の意味を、考えた事はあるのかい？」

ユアは茫然とゼンをみつめる。ゼンが今言うような事を、ユアは聞いた事がない。教わった事がない。穏やかなのに、静かなのにこれ程体を震わせる声を、ユアはこれまで聞いた事が――。

「あんたね、さっきからずっと『愛されたい』って叫んでるんだよ。愛してくれ、抱き締めてくれって」

「そんな事……言って、ない」

「言ってるよ。俺にははっきり聞こえたよ。気付いてないのは、ユア、あんただけなんだ。あんた考えることを捨てて、本当に欲しい物から目を背けてさ、罪だ復讐だって言葉に大切な事を摩り替えて、さっさと檻の中に隠れちまったね。だから自分じゃ気付けなかったんだよ。ユア。あんたはずっと、『愛してくれ』って言っている」

「言ってない！　愛してなんかほしくない！　おれは、おれは……」

悲鳴のようなユアの声は、今やすっかり湿っている。彼は今、夜の海にいる。いつ沈むとも分からない小舟で、荒れ狂う波に揺られている。月はすっかり雲に隠れ、己が信じていた“真実”という道標はもはや見えない。風鳴りのようなゼンの声が、ユアの小舟を左右に揺さぶる。逃げるな、ユア。あんたはずっと、愛されたかったんだ。違う、とユアは叫ぶ。そんなはずがない、おれが求めていたのは裁きの“時”だけ。幸福だった奴らの顔が、恐怖と苦痛に歪むのを見たいだけ……。

「ユア、聞いたろ、皇帝さんの言葉をさ？　あんたになら殺されても構わないって、あの人言ったんだ。あの人あんたを抱き締めただろ。愛してやれなくて済まないって、あんたにそう謝っただろ？　ほら、ちゃんと聞こえてるんだよ。あんたの声はさ、あんたが逃げさえしなければさ、ちゃんと響くんだよ『愛されたい』って」

ゼンの言葉が冷たい鉄の扉を叩く。優しく、気遣うように、コンコンと。檻の奥で淀むような影が、一つ小さく身動ぎする。闇との境目すらあやふやな人影は、青年と呼ぶにはまだ幼さを残す、赤い膝小僧の少年である。痩せ細り、飢え、泥に身を汚した少年は、恐怖に瞳を揺らして身を抱き締める。未知という恐怖、新しい風が彼を震え上がらせる。

事切れた従者の傍らに膝をついていたグレイスは、やおら立ち上がると彼らに向かって足を進めた。彼の歩みに合わせ、所在なく漂っていた精霊らがその道を開ける。静寂の、叢。

「おまえが私を見た時」

グレイスは言う。

「憎悪に満ちた目で私を見た時、私の体は震えた。恐怖と――喜びに。変な奴と思うかもしれぬ。だが確かだ。始まりの夜の靄越しのような姿ではなく、真正面から私に向き合ったおまえを、私は嬉しいと感じたよ。……今ようやく、私の心が知りたいと言って死んだ彼の気持ちが分かった気がする。我々はどこか似ていたのだね。私もずっと逃げていたよ、取り繕った冷静と無知に。彼やニンフは、私を檻の外へ連れ出そうとしてくれていたのだね」

ユアはますます怪訝そうに眉を顰める。グレイスが近づくに連れ及び腰になる彼の瞳は、得体の知れない物音に怯える小動物のようだ。グレイスはその傍にしゃがみ込んだ。

「私はずっと、おまえに惹かれていた。訳も分からぬままに。だがあの夜に大木の元へ、そして今この叢に私を呼んだのは、他ならぬ母の血だったのだね。呪われていようと、穢れていようと私には構わぬ。それが私を導き、おまえとこうして正面から語らう時間を与えてくれたという、それだけでいい」

「なんで……」

「家族だからじゃねえの」

ゼンが続きを請け負った。

「俺は頭が悪いからね、だからあんたが言う入り組んだ“真実”に

ついちゃ正直よく分からない。ただね、これだけは知ってる。家族っていうのは、その本当の姿は、愛しながら叱ってくれる、何度手を振り払おうと抱き締めてくれる、馬鹿なお人好しの集まりなんだよ。血の繋がりはね、憎むためにあるもんじゃない。温かく鼓動を打つものだ。あんた、そのこと知ってたかい。復讐の色眼鏡抜きに、俺たちのことを考えたことがあったかい？」

……そんなこと、リヒィ＝ミヒィは教えてくれやしなかった。馬鹿なお人好しの集まりだって？　そんなこと、彼は一度でも言っただろうか。己が血を憎め、怨め、呪えよと。ユアが実際に触れ得た家族の記憶は、彼を害さんとする二本の腕のみである。その彼が、どうしてそれを愛ある温かき者共などと思えよう。

罪人に罰を。呪われた血に永久の眠りを。

ユアの海に月はない。だが、小舟の下の、泥かと思われた荒波の奥底が、それは美しい光を放っている事にユアは気付く。強い、しかしどこか優しい光が彼を誘う。ユアはもう一度空を見上げる。重く厚い雲に覆われた、体に粘りつくような深い闇。彼はようやく悟るのだ。目晦ましの靄から逃げ果せたと、一人真実の海を知り得たと思い込んでいたその場所こそが、実は汚泥にまみれた地下の底であったのだ。そこでは全てが歪曲し、憎しみに染まり、甘みさえも苦みに変わる。ユアはその、悪意の海とでも呼ぶべき魔の暗闇で、復讐の檻で、世界を逆さまに見せられ、そう教えられ、己の身が傷付くことを恐れて膝を抱え続けてきたのだ。ああ、真実を知らないのは、世界の優しさを知らぬは彼の方であった！

太陽の光さえ差さなかった檻を、今柔らかな光が包み込む。長い年月をそこで暮らし、すっかり凍りついた二本の足を、兄弟の手が優しく温める。彼を、ユアを憎悪に繋ぎとめて離さなかったのは、地下牢ではなく、母親の裏切りでもなく、彼自身であったのだ。檻の鍵を閉めたのは、他ならぬ彼の細腕。逃げることを選んだ彼の、弱さが彼を閉じ込めたのだ。

ユアの手が、無意識の内に持ち上げられる。足元を照らす光に触

れようと。彼の心がそれを求める声に従って。
が、その指先が、今しも一つの新たな悲しみを呼び、まだ温い血に濡れたその指先を見た途端、ユアははっと躊躇した。この手は、この魂はもう朱に染まり切っている。それを今更、それこそ今更、おれ自身が許しを求めてどうするのだ。
素早く下ろされかけた彼の手を、しかし寸分早く、二つの手がしっかと握った。黒の手に、白の手。ゼン、それからグレイス。怯えて震えるユアの手の平を、彼らはただ黙って握り締める。ユアの喉が苦しげに音を漏らす。――ああ、どうして、この人たちは。
がちゃりと重厚な音がして、錆びついた鉄の鎖子が外される。少年はおずおずと檻から這い出る、小舟から波間へ――かつて見ぬ世界へと――息を止めて飛び込む。ざんぶという波の音。合わせて流れたのはただ一粒の、ユア純真の涙であった。

――ぱち、ぱち、ぱち。
間延びした、厭味たらしい拍手が響く。三人の兄弟は夢から覚め、それぞれに息を呑んだ。――ダレス。
「いい物を見させて頂きました。三流役者の下手な芝居よりは楽しめましたわ」
ユアはゆっくりと立ち上がる。その両脇を固めるように、ゼンが、グレイスが。
「ああ、素晴らしき兄弟愛。一国の長と、一族子飼いの暗殺者、それにみすぼらしい乞食とくれば。ふふ。なんともまあ珍妙で滑稽な取り合わせですこと」
この思いもかけぬ告白劇と、それに続く真実の絆の有様(ありよう)に、魔導師共はすっかり戸惑い、畏れ、狼狽えて、自失の渦に囚われている。全く役立たずとなった彼らを、ダレスはまるで顧みない。
「グレイス皇帝。あなた様が弟君を想う気持ちはよく分かりました。国に帰りましたら、急ぎ臣民にも教えて差し上げねばね。おまえ達の君主は、かの恐ろしき魂食らいの前に膝をつく男ぞと」

「好きなようになさるがよい」
元より皇帝の座に執着はない。引き摺り落としたければそうするがいい。
ユアの意識を白濁が侵す。残された時間の儚さを、ユアは全身で感じ取る。それでも彼は両の足で立つ。噴き出る汗を拭い、妖艶に微笑むダレスを正面から睨み据える。
「あの女は」
呟くようにユアは言う。
「おれと、同じだ」
彼女を包む、黒の炎のごとき念。憎嫉の世界をしか知らずに育った、哀れで醜く、孤独な女よ。
「終わらせないと」
血の呪いを？　――違うだろう。血が血を呼び、憎しみが憎しみを呼ぶ、負の感情の亡者が巻き起こす悲しみの連鎖こそ、終わらせねばならぬ悪弊である。
「ユア」
邪魔な虫を追い払うように、味気なく手を振ってみせるユアの背にゼンが呼び掛ける。ふり返ったユアの表情は、まるでさっぱりしない、それは情けない物だった。
「おれはやっぱり君達を殺すかもしれない」
「……」
「君達を殺す事が、おれにとって唯一の夢だったんだもの。でも」
最後に「おかあさん」と言ったのはいつだったろう。応えのない呼び掛け、何も掴み得ない虚しい手。母を、肉親を、怨むべき対象と据え改めることで、与えられない愛の言い訳にした。淋しさを感じる己自身からも逃げた。だが今、彼はついに世界と対峙する。
「まず“おれ自身”と向き合ってみる。それから君達を殺すかどうか考える。だから離れて待ってて。答えが出る前に死んだりしたら、迷惑だから」
ゼンは思わず苦い笑いを浮かべる。これで、よかったんだ。俺が

こいつに出会った事、いや、今となってはユアの白々しい演技に導かれた必然の出会いだろうが、それでも俺は後悔しない。俺はきっと、己の血に課せられた使命を果たし終えたのだ。なんだろう。銅貨が詰まった布袋を手にした時よりも、ずっとこう……柔らかい、そんな満足感が、体を芯から温めている。

ああ、もう死んでもいいかなあ、などとは欠片も思わない。笑顔の下で、ゼンをどう殺さんかと考えていただろうユアである。だが、時折響く彼の笑い声が、根から澄んでいた事はなかったか。なかったとは言わせない。偽りの顔さえ超えて、ひと時でも腹の底から笑い合ったのだ。そうでなければ、かの朝にユアの涙は零れなかっただろう。だから、グレイスのように自己犠牲に身を挺してまで彼を慰めようなどとは思わない。易々と殺されてなるものか。だが少しばかり、今となってはあの世の母も、百泉の下で俺を迎えても頭ごなしに叱りはすまい。そう、思う。

中途半端な笑みを浮かべたままのゼンの肩に、グレイスがそっと手を乗せる。救えない父を共に持つ兄弟である。ゼンは小さく頷くと、グレイスの促しに応じた。

二人が十分に距離を取るのを目の端で追うと、ユアは体ごとダレスに向き直る。ダレス。淋しい世界の虜となった女よ。彼女もまた、檻の中で膝を抱える少女である。ではユアは、彼女に手を差し伸べると？　――残念ながら、ユアは紛れもなく残忍な魂食らいなのだ。兄弟の思いに涙したとて、彼の身に滲みた血の不浄が清められるはずがない。檻があるなら壊すまで。鉄も鎖も憎しみも、全てこの手で焼き尽くしてくれよう。

「サルマン」

彼は詠唱も行わない。長ったらしい言霊など、彼には必要でないのだ。

「ラジネ。アキュロス――お願い」

木偶のごとき魔導師団から、畏怖と感嘆の声が漏れる。大地が揺れる。ただ一つの身で、四亜種の三体までを使役するこの男。ＪＵ（ユア）

ＧＭＡ。長い眠りの時を経て、現世に鍛え直された悲しき伝説の魔剣。エルフを地に堕とさしめる魅惑の呪い。その力が今、彼の生命の全てを掛けて鞘から抜き放たれる。刀身に朝陽が映る。精霊らの舞う姿、剣の一閃を辿るかのごとし。

「ようやく御覚悟が出来ましたのね。すっかり待ち草臥れましてよ」

――世界よ。

今日、やっと再び見つけ得た懐かしき、温もりある世界よ。

――もし応えてくれるなら、今ひと時の力をどうか。

どこまでも青い厚地は言葉を発さぬ。彼の深慮など人間如きの知る処ではない。だが、目を開いたユアに迷いの色はなかった。

ユアの心臓がどくりと震える。熱い血潮が全身を巡る。彼は今、生きている。

最終話　バレリアの朝霞に星は降りて

最終話　バレリアの朝霞に星は降りて

片や奇才と呼ばれた魔法学校の才女にして現皇太后、片や唯一彼女を下した女の血を継ぐ魂食らいの半魔である。慎みないが、彼らの他を挟まぬ命がけの対峙は、魔導師共の好奇を駆り立てて止まぬ。およそ自分などが入り込む隙のない戦いに、彼らは皆一様に息を呑むのだ。命と命の鬩ぎ合い、個と個の偽らぬ対話である。その壮絶さは時に、一種の恍惚を伴って、敵味方の概念すら溶かす。

先ずダレスが動いた。

彼女が使役する火の精霊サルマンは、命や輝けとその炎に勢いを加え、細腕を翅翼のように羽ばたかせてユアを襲う。それを迎え撃つは同じく火のサルマン、水のアキュロス、地のラジネである。数で勝るユアであるが、魔法とは言わば己を映す鏡である。彼の命さえ心許ない今、三体の精霊は春先の残雪のように儚い。

「食い殺しておしまい！」

敬われるべき身分の女とは、とても思えぬ口の利きよう。だがダレスの気迫はサルマンに乗り移り、水の精霊アキュロスを襲う。

サルマンが噴き出す烈火の炎を、アキュロスは辛くも避けた。胸を反らせた鮮やかな後転。だがその足先を恐ろしい熱が焦がす。鳥のような声で叫び、アキュロスは身を捩らせた。

間髪入れず身を急旋回させ、再び襲わんと体勢を立て直すサルマンだったが、ラジネはこれをよく翼衛して防ぐ。長い爪と爪とが絡み合い、互いの身から火花が飛んだ。競りあいながら、サルマンの衣は伸びてラジネの細首を締めんと揺れ動く。

強く噛み締めるあまり、ユアの奥歯が削れていく。切れた唇から血が垂れる。だが息をつくことは許されぬ。魔法は心の戦いなのだ。隙を作れば脆くも崩れる。

「サル、マン――サルマン！」
身を切るようなユアの叫びに、彼のサルマンが勇躍する。火と火のぶつかり合いである。噴き上がる灼熱は、地獄がこの世に口を開けたかという有様。叢は彼女らの放つ熱気に中てられ、萎れていく。さながら身を燃やす鳳凰が二羽、空を舞ってようであるが、それが鋭く交差する度に赤い光が散る。それはまるで彼女らが流す血のようだ。
一見拮抗して見える力量であるが、彼女らの姿には歴然の差がある。生命力の違いだ。ダレスが使役するサルマンは、唇の端に余裕の笑みを浮かべなどする。その性質上、戦いに身を置くことの多いサルマンは、肉躍り血沸き立つこの闘争を、心から愉しんでいるようなのだ。
ダレスもまた、この戦いを面白がっている。かつて己を下した女の遺子を、手の平で転がしているも同然なのだ。彼女に敗北の意識はない。それは決して思い上がりではなかった。正常であれば彼女に劣るユアではない。が、彼の身は一秒ごとに呪いに食われつつある。薔薇は濡れそぼつ花弁の色を、一刻一刻深めているのだ。事実、ユアは端から防戦一方である。
喉の奥で咳き込み、一瞬息を詰まらせると、ユアは鮮やかな血を吐いた。手で口を押さえるも、指の隙間から朱は零れる。ユアの視界が白む。鋭すぎる彼の五感も、もはや煙に巻かれたように不確かだ。ゼンが何か叫んだ声も、きっと彼には届いていまい。
だがユアは倒れなかった。震える膝を鼓舞し、彼は立ち続けた。ダレスから目を逸らさなかった。荒く手を振れば、五本の指の先から血の滴が飛んだ。
「頑張るのね。いいわ、期待以上よ」
ダレスは大口を開けて笑う。既に狂狡の体である。荒ぶるサルマンの狂気が、使役者である彼女をも食らっているのだ。
「死を前にして、惨めに踊り狂うがよい！　下賤なる魂食らいめ！」
サルマンがさっと身を引き、ユアを囲うように叢を走る。グレイ

スはゼンの首根っこを掴み、氈鹿のごとき跳躍で後ろへと飛び退った。その直後、彼らがいた場所を炎が駆け抜ける。ゼンは息苦しさすら忘れて目を見張った。これが、これが精霊同士の戦い。燃え盛る炎は、青草の瑞々しさなどまるで感じさせない。彼らが蓄えていた命の水など、地獄の劫火が一瞬で奪ってしまったのだ。

炎の壁がユアを取り巻く。熱風が彼を襲う。

吹きつける熱から身を守らんと、ユアは反射的に手を交差した。

――と、その瞬間、濁流のごとき勢いで蘇った記憶がある。うなる鞭に怯え、両腕で顔を覆った幼少の頃。冷たい壁、陽の差さぬ地下牢、そして血の臭い。

ユアの瞳が力を取り戻す。精霊は再び舞い上がった。

「ラジネ！　地を砕け！」

命を受けて地の精霊が舞う。彼女の飛翔に伴って大地が揺れた。命ある者のように立ち上がった土壌が、草を食って憚らぬ火に圧し掛かる。まるで大地そのものが、彼が育む命を蝕む害虫に怒り、身を震わせたかのようである。

「アキュロス、水を！」

土の勢いに怯んだところを、続けて冷えた水が襲う。小さくなった火は助けを求める手のように揺れ、だが逃げることも敵わずついに消えた。それを見たダレスの目が見開かれる。この男、不死身かと。

「いいえ、まだよ！　サルマン！　何度も彼を炎に包みなさい！　柱を、炎の柱を！」

両手を広げ、空を仰ぐダレスの姿は、神の名を隠れ蓑に狂った蜜を吸う教祖のようだ。すっかり我を失った皇太后の姿に、魔導師共は心臓を縮み上がらせる。

「饗宴よ！　さあ、宴の席に火を！」

サルマンは再び地を這う。掘り崩されたばかりの新しい土も、彼女の前では意味を成さない。炎の壁は、前よりも更に勢い、高さを増してユアを囲う。前後左右、彼にもはや逃げ場はない。

「ユア！　くそっ、焼け死んじまう……！」
ゼンの足は震えて止まらぬ。猛る炎に射すくめられたように、彼はその場から動けない。仮に動けたとて何になろう。ユアやダレスほどの者同士の戦いとなれば、魔法を知らぬ者は、その上ゼンのように身体能力に絶対の信を置ける訳でもない者は、口を挟むことすら許されないのだ。その隣で、グレイスは瞬きもせずにユアを見つめる。炎の向こうに揺れる、我が弟の、細い背中を。
――やはり私は罪深い男だ。
グレイスは思う。
――いくら肉親とて、彼が殺めた臣民の魂は数知れぬというのに、それでも彼に――打ち勝って欲しいと望むとは。
彼は無意識に、ユアの姿に己を重ねているのかもしれぬ。義母の、陰湿な厭味や仕打ちに耐えるしかなかった、いや、耐えるという“可哀想な自分”に逃げてきた、臆病な自身の姿を、彼に。
――今誓おう。もう、私も逃げぬ。
彼がそう心で約する相手は誰か。ニンフか、かの従者か、それともユアか。
勝て。勝て、ユアと。その気持ちは手放しで受け入れられるものではない。ユアに殺された者の遺族は、声を嗄らしてダレス様よ勝て、と叫んだろう。断ち切れぬ兄弟の繋がりが何だ。我々は彼に愛する者を奪われたのだ、と。
戦いはいつも一つの正義の元に起こるとは限らない。二つ、いや三つ四つの思いが絡み、誰もが神の加護を信じて剣を取る。ダレスとて、哀れな女に違いはないだろうが、自身が正義と信ずる世界に生きたという点において、彼女ほど一途な人物もそうおるまい。
ダレスが手を掲げると、飼い馴らされた鷹のように、サルマンは彼女の傍らへと舞い戻る。それが肩の辺りを漂ったのも束の間、ダレスの動作に合わせてサルマンの身が揺れる。
――来た。
ユアに火を消し去る力はもはやない。ローブの端を火に焦がしな

がら、しかしユアはしっかりと見た。ダレスが弓を引き絞り、炎の矢が三本番えられるのを。
自尊心の高い彼女である。抵抗の余地もないほどにユアを苛め抜いた後で、彼女が絶対の信頼を置くこの技を繰り出すことは、容易に想像できた。ユアはただ、この一瞬を待っていたのだ。反撃し得る可能性を孕む、この唯一の時を。
ユアは腰の鞘を引き抜く。目の前に構え、添えた右手をゆっくりと引く。サルマン、アキュロス、ラジネの三体が僅かに身じろぎし、一筋の光に姿を変えるとユアの周りを取り囲む。その時、ユアははっと息を呑んだ。
「おまえ達……」
温かいのだ。彼を取り囲む憎悪の炎とはまるで違う、撫でるように優しい。
「そう……おれはずっと、気付かなかったんだ、おまえ達の温もりにも」
淋しげな笑みを浮かべる使役者に、精霊らは柔らかく微笑む。そして一層輝きを増すと、それぞれ一本の矢となった。火、水、地。彼の全てを掛けた三本の矢。奇しくもダレスの技と同じである。
「――小癪。打ち破ってくれるわ！」
絶叫と同時に解き放たれた炎の矢。風を切り、唸りながらユアを目掛けて一直線に飛ぶ。ユアも引き絞った右手の五指を弾く。燃え盛る壁を突き破り、三種三様の矢が空を駆ける。
蕩けるような温もりを残してそれらが放たれるのを見送ると、ユアはついに膝から崩れた。力なく開いた口から鮮血が迸る。
――ごめんね。
薄れていく意識の中で、ユアは思う。
――おれは嘘つきでした。最後の、最後まで。
地の精霊ラジネ。緑の光を宿した彼女は、ダレス第一の矢と当たって砕ける。――相殺。
――本当は……。

水の精霊アキュロス。冴えた青の矢は、続く第二の矢と正面から絡み合う。空気が裂けるような音と共に、二本の矢は大小の火花となって散った。

――本当は、最後にこう言いたかった。

たくさんの命を奪った。望まない殺戮も、自ら選んだ殺生もあった。許される身ではない。なのに助けようとした、愛すると言ってくれた君達は、やはり本物の馬鹿らしい。まるで身勝手極まりない。臣民を愛すべき皇帝が、それを害して憚らぬ魂食らいを想うだなんて。愚かだ。まだ出会って間もない、実質的繋がりのない兄のために、目を腫らして泣くだなんて。だけど、

「ありがとう……」

色のない唇が微かに震える。彼の言葉は、しかしついに空気を震わせることなく――消えた。

火の精霊サルマン。同じく地深くより湧き上がる炎を纏った矢を目前に、彼女の姿は突として失せた。風が雲を散らすように、静かだった水面に波紋が広がるように、僅かな余韻を残して。

ユアの力はついに尽きた。膝をついて座り込み、空を見上げる。こぽこぽと音をたて、血が泡となって口の端から零れる。

――滑稽だ。

自嘲的な笑みが漏れた。十年間思い続けた、願い続けた結末から大きく道を逸れ、己と同じ痛みを与えんと期していた女の手で殺されるとは。滑稽は彼らではなく、自分自身であったか。

目を閉じる。だが体は太陽の下で尚温かい。ああ、これが安らぎ。冷えていく彼の体さえ、天道は見捨てず照らし続ける……。

矢が胸板を貫く。皇一族の紋章が施された豪奢なマント留めを砕き、よく鍛えられた――よく、鍛えられた厚い胸板を――ああ、これは……彼は――……、

「……グレ、イス……」

華よ珠よと大切にされた体から、鈴のような血の滴が落ちた。

一瞬の出来事であった。

グレイスは刹那、ユアの勝利を思った。彼のサルマンが輝きに満ち、より一層その速度を増したからだ。その勢いはダレスの矢を呑んで尚余るかと見えた。が、それは最後の、本当に最後の光だったのだ。力が燃え尽きる瞬間の、散り際の美しさであったのだ。グレイスが知らず拳を握り締めたその直後、サルマンの姿は煙と消えた。その時に彼の体は動いていたのだ。考える暇などなかった。

地を蹴ったグレイスと、地に張りつけられたゼン。炎の壁すら突き破ったグレイスと、炎に怯え竦んだゼン。その違いは何であったのだろう。

それはグレイス自身の負い目だ。義母に反抗らしい反抗もせず、大人しく従い続けた自分への負い目。それが彼を突き動かした。義母と戦うだけの力はあったはず。足りないのは彼の度胸であった。男グレイス、そのまま終わっていいものか。ユアを守ろうという気持ちも確かにあっただろう。だが彼は、ついに彼自身の正義のために走ったのだ。

人垣から絶叫が漏れる。劫火をその身に宿したのは、彼らが愛する皇帝その人であった。信じられぬ結末である。彼らは泣き叫び、彼の体から呪われた矢を抜かんと熱り立った。が、体が動かぬ。足は地に縫いつけられたかのよう。

身悶えする臣下らを、グレイスは薄絹を通して見るように感じた。声が、遠くに聞こえる。誰かに名を呼ばれたような気もした。が、分からぬ。

ダレスは茫然と手を下ろす。憎きユアめを刺し貫いたかと思われた刹那、黒い影が躍るように矢の行く手を遮ったのだ。糠喜びも甚だしい。その上それが何かと煩わしい我が養子とくれば。

だが、燃える炎に身を包まれていくグレイスを見ていると、彼女の腹の底から震えるような笑いが湧き上がってきた。そうだ、そうではないか。この男こそ憎むべき男。皇尊の愛を一身に受け、皇帝

の座を実子ヤマから奪い取り、臣民の歓声を一人攫う面憎き男。そう……そうだ、グレイス＝C＝イスケ。彼もスージーの子ではなかったか！

「はは、は、あはははは！」

突然の笑い声。絶望の声を漏らしていた魔導師共は、その狂態に言葉を失う。

「あはははは！　グレイス、喜劇の最後はおまえが締めるか。はは！　馬鹿馬鹿しい！　放っておいても死ぬ男を助けて何が楽しい。何が得られる？」

身を揺らしながらの大笑である。正気の沙汰とは思えない。

「ああ、おまえが最後に間抜けをしてくれてよかったよ。御蔭で妙な謀を企む手間が省けた。空いた皇帝の椅子は、我が愛するヤマの物！　あれはわたくしの子！　富も、権力も、全てわたくしの物となる！　あはははは！」

炎が舐めるように全身を包む。小麦色の髪が熱風に渦巻く。が、不思議と苦痛は感じない。あるいは既に麻痺したか。グレイスは体を揺する義母を、どこか哀れむような目で見た。

「――ひとつ、申し上げたいことがあります」

ふふ、ふ、と苦しげに息を吐き、ダレスが唇を吊り上げる。

「我が名を御忘れでしょうか、義母上。二十二年前、あなた方に戴いた我が称号を」

ダレスの笑い声がぴたりと止まる。唇も持ち上げられたまま制止する。

「グレイス＝E＝ロウ。ただ数日の事とはいえ、私は確かに皇帝でありました」

言い切る前に、絶叫がグレイスの言葉を遮った。白粉を塗った頬を掻きむしり、ダレスがこの世の者とは思えぬ声を上げるのだ。もはや言葉すら成さぬ有様に、彼女の気狂いはその部下共にまで浸透する。

「義母上。いえ、ダレス。ダレス＝R＝タバサと御呼びしてもよろ

しいでしょうか。――汝は、皇帝殺しの罪に問われる」
「嫌！　嫌よ！　何かの間違いだわ！」
ダレスは泣き叫んだ。
「嫌よ！　わたくしが殺そうとしたのはユア！　ユア＝A＝フロイアントよ！　あなたではないわ！」
まるで子どもの戯言である。虎を射ようとして猪が斃れたが、我が欲する処は別にあったのだからこれは虎の毛皮と言い張るようなものだ。
「ではその目で御確かめ下さい。あなたの訴えが天に届けば、御身に薔薇が刻まれることはありますまい」
ダレスは我が背を見ようと首を捻り、挙句見えぬ見えぬとその場で狂狂回る始末。果てには貴様が確かめよと手近な者をひっ掴まえて、事もあろうに男の手に衣服を剥がさせんとする有様であるから呆れる。勿論男がそのような無体を働ける訳がなく、畏れて平伏すばかりであるから、ダレスは余計喚き散らした。
「どうして……どうして」
縋るような声に、グレイスは静かにふり返る。ユアが茫然とこちらを見上げ、瞳をしとりと湿らせている。ああ、泣いてくれるなよ。グレイスは心の内で思った。
「よく分からぬ。考える前に体が動いていた。おまえの楯になろうとしてか……ただ義母の思惑通りに事が運ぶのを見ているのが悔しかったからなのか、それすらも……分からぬ」
そう言ってグレイスはにこと笑った。炎に包まれ、肌は泡を吹いたかのような様子。凄惨極まりないその姿に似合わぬ、それは穏やかな笑みであった。
「だが、妙な気持ちだ。善しとされる行動では……ないのに、なぜか……心が、軽い」
――なぜか、心が軽い。
炎が彼の厚貌を溶かしたか。その真実の言葉が、グレイス＝E＝ロウ、いやグレイス＝C＝イスケ最後の言葉となった。熱で反り返

った彼の体は、ユアを避けるようにしてどうと倒れた。そしてそのまま静かに燃えた。
「グレイス皇帝！　皇帝陛下！」
呪縛が解けたかのように、魔導師団が我先にと彼に駆け寄る。治癒の魔法などと都合のいいものがある訳でもないのに、精霊を呼び出す者などもいる。
人の群れが押し寄せる中で、ユアはただ静かに血を流していた。とろとろと顎を伝う血は、彼の涙のようですらある。
ゼンは地面に座り込み、滂沱と流るる涙を拭うことすらもなく、たださっき兄と知れた男が燃える様を見ていた。膝が、手が、体が髄から震えている。その彼の隣に立つ者があった。リヒィ＝ミヒィである。
「じき、ここは焼けるぞ」
ゼンはゆっくりと声の方を見遣る。妙な被り物の――どうやら少年らしい――彼を、ゼンは知らない。誰、という声は掠れて上手く響かなかった。
「説明したところで今の君の耳には入らんだろうが、僕の名はリヒィ＝ミヒィだ。ただ、ゼン・ディアフォードよ。哀れな皇帝の身を包む炎は、すぐにも叢一体に広がる。このままでは血の繋がらない君の兄、ユアは、意識を僅かに残したまま焼け死ぬことになるぞ」
またゆっくりとユアに目を向けるゼンを、リヒィ＝ミヒィは口を歪めて見つめる。
「ゼンよ。君のその性質をお人好しと呼ぶべきか、ただの偽善者と呼ぶべきかは迷う処だ。きみは己より弱い存在に対してのみ英雄となり得る。まったくちっぽけなことよ。だが今、その下らん自己陶酔も、後少しは役に立つのではないかね。ユアを見たまえ。あれこそ救いを求めている者の姿ではないかね？」
「あんた……」
ゼンは夢から醒めきらぬかの如き口調である。
「あんた……俺は、あんた、嫌いだ……」

リヒィ＝ミヒィは少年特有の高い声で笑った。
「構わんよ。むしろその方が正常で、僕にとっても有難い。そんなことよりもさあ、行きたまえ、その終焉に向かって」
促されるままゼンは立ち上がる。もはや重みすら感じさせないユアを背負い、南へ、南へと。

「ゼン……」
ゼンの背に負われ、ユアはか細い声で言った。おれね、最初からこうするつもりだったんだ。
「こうって」
「グレイスを、楯にするの。ダレスの、矢を」
言葉を紡ぐのすら苦しそうである。一言一言を、ようやく絞り出すといった様子で、しかしユアは話を続ける。
「結局、おれの……思う通りに、なった、はずなんだ。なのに、なんだか……」
グレイスがゼンを殺すように仕向けさせ、その上で彼らの血の繋がりを明かして彼を懺悔させ、その彼を楯にダレスの矢を受けん。ユアに巣食う呪いがダレスをも襲い、ユアが心から憎む人物、そしてその血は、この日を限りに滅息する。自らの命を葬ることも含めて、ユアがお膳立てしたおぞましい舞台は、こうして幕を閉じるはずだったのだ。ゼンの死以外、結局はユアが思い描く夢をなぞるように進んだ。なのに、なのになんだか、
「なんだか、不思議な気持ち……」
手を打って喜べない。グレイスの、炎の向こうで揺れる笑顔が胸を騒がせる。
「ずっと、望んでいたはず、だった。グレイスが……憎かった。あんな、一時だけ、いい顔を見せられたからって……それで、許せるはずが……ないのに」
ゼンはすんと鼻を鳴らした。小さく跳ねて、ずり落ちるユアの体を抱え直す。

「――どうしようもなく許せない相手なのに、つい愛してしまうことも、あるんだろうよ」
「……」
「皇帝さんはあんたを愛した。あんたも、最後の最後に、ようやくあの人を愛せたんだ。そうだろう？　じゃなきゃあんた、泣かないよな」
ユアは困ったように笑う。どうして見てもないのに分かるかな、と。その顔は涙に濡れている。
会話はそれを終いに雪のように溶けた。ゼンはただ歩き続ける。どこへ行こうという考えはない。だが時間が許す限り進もうではないか。言葉はもはや必要ない。彼らが共に過ごした時間はあまりにも短かった。が、十年でも語り尽くせないような深い思いを、拳を通して交わし合えた、ような気がする。そう思うのは不遜だろうか。だが現に、今、背を通じて感じるユアの温もりは、百の言葉よりも雄弁だ。そしてとても優しい。
静かな歩みは激しいユアの咳によって止まる。降ろして、と呟くユアの声は酷く儚い。
「……ゼン」
木の幹に背を凭せ掛け、なんとか体勢を保ちながら。
「ああ」
「お願いが、あるんだけど」
なんだよ改まって、と言うとユアはゆっくりと両手を持ち上げる。半ば閉じられた目が柔らかく微笑む。ゼンの胸が詰まる。熱い涙が更に勢いを増して流れ落ちる。
ゼンは黙って頷くと膝をつき、ユアの体を抱き締めた。細く、頼りない体だった。震えるユアの手が、そっとゼンの背に重ねられる。とくとくと感じるユアの鼓動は、生まれたての雛のようであった。
くぐもった声が漏れる。食い縛った歯の隙間から、苦しく、切ない声が。

頬をくすぐるユアの髪は、太陽の日差しのように柔らかかった。

◇

これが後に、皇の血事件と呼ばれた惨劇の全貌である。レザフ＝E＝ロウの惨殺から始まり、その後を継いだ養子グレイス＝E＝ロウも又海を経たバレリアの地で息絶え――優れた長にならんと臣民の期待を集めた彼の在位は僅か十日にも満たなかった――、その義母たる皇太后までもが身に呪いを受けて絶命した。バレリアの朝が血に染まった、あれから十一日後のことである。

グレイス皇帝の御亡骸は、ローハーに葬る事さえ叶わなかった。彼はただ一片の骨すら残さず炎の糧となったのだ。彼の身を食らい終えた劫火は、それだけでは飽き足らず、バレリアの首都スプダイの外れの叢一帯をも焼き尽くした。最後までグレイス皇帝の元を離れず、火に呑まれたという魔導師もいたと言うが、大抵はそんな度胸もなく逃げ散っている。茫然自失の体でローハーに帰るか、何もかもを見失ってバレリアの地を彷徨うか、どちらにせよ彼らの末路も又哀れであったことに変わりはない。

これを受けて新しく起ったヤマ＝E＝ロウは、二十三歳の若者である。が、若さゆえの気鋭という雰囲気とは程遠い、慈愛に満ちた人物であった。あまりに柔な物腰のため、本当にあの皇太后の御子かと陰口されるほどである。両親に続き、敬愛する義兄までをも失った彼の悲嘆は尽きることがなかったが、だがローハーは指導者を欠く事ができぬ。青褪めた顔のまま即位した彼は、ユリシア国から王女ユナ・イーシアを妻に迎え、立派な男児二人と女児三人に恵まれる。やがてこの長子が齢二十にも届かぬうちに、外柔内柔とも言うべき父を蹴落とし、皇帝の座を手に入れることで、ローハーの色向きが大きく変わっていくのだが……それはまた別の話。

皇の血事件について、真実を知っている者は数少ない。グレイスはリヒィ＝ミヒィに勾引（かどわ）かされてバレリアへ渡り、そこで土匪の凶

刃に斃れたとされ、ダレスは流行り病という事で済まされている。が、強欲の皇太后の背に、烈火の如き薔薇の彫り物が浮かんで癒えなかったという噂は実しやかに皇城を巡り、大臣らがその口を防ごうとて無駄な事であった。

しかし、彼らがついに知る事ができない事実がここに、もう一つ。

彼は悲劇の主人公か、はたまた救い難いただの悪鬼か、それは判別しかねる処だが、ユア＝A＝フロイアント。間違いなくこの物語の中心に立っていたその彼が、この大事件とは場違いな優しい腕に抱かれ、愛の中で静かに息を引き取った事――これはフロイアント公だけの、秘密。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3096i/

フロイアント公の秘密

2010年10月8日14時01分発行